

KalpalatāとAvadānamālā の研究(10) : Jayamuniの 仕事とTJAM 第15章

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院

<https://hdl.handle.net/2324/4483759>

出版情報 : SOUTH ASIAN CLASSICAL STUDIES. 16, pp.51-138, 2021-07-30. 九州大学大学院人文科学府・文学部インド哲学史研究室
バージョン :
権利関係 :



Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (10) — Jayamuni の仕事と TJAM 第15章 —

九州大学 岡野 潔

本論文は2部から成る。第1部では、ネパール独自の梵文仏教説話文献群の形成に大きな役割を果たした Jayamuni という人物と、彼が遺した諸写本について論じたい。Jayamuni が筆写した諸写本間にある関係を考察することにより、彼の生涯の筆写活動の流れ・方向性が見えてくる。

第2部では、梵文仏伝文献 Tathāgatajanmāvadānamālā (如来出生アヴァダーナ・マラー) 第15章の梵文テキストを Jayamuni 写本を底本にしつつ、全文を校訂し和訳する。またその第15章の第102～127偈で説かれる様々な釈尊の今生説話(ジャータカ)を分析し、その箇所(の)の諸説話が Mahājātakamālā と Jātakamālāvadānasūtra をソースにしているらしいことから、それらの浩瀚な作品の内容を知悉する人物か、それらの製作に強く関わり合った人物によって、この仏伝 Tathāgatajanmāvadānamālā が作られた可能性があることを示したい。Jayamuni は Mahājātakamālā の最古の写本の筆記者でもあることから、Jayamuni がそれらの諸作品の形成に関わっていると私は考えている。このように本論文の第1部と第2部の研究は Jayamuni をキーワードとして、相互に関連しあっている。

[略号]

AJM	Āryaśūra's Jātakamālā
ASS	Avadānasārasamuccaya
KP	Karuṇāpuṇḍarīka
JMAS	Jātakamālāvadānasūtra
TJAM	Tathāgatajanmāvadānamālā
DA	Divyāvadāna[mālā]
BAKL	Bodhisattvāvadānakalpalatā
BJAM	Bodhisattvajātakāvadānasūtra
MJM	Mahājātakamālā
SAM	Samṛghadrāvadānamālā
SMRAM	Subhāṣitamahāratnāvadānamālā
HJM	Haribhaṭṭa's Jātakamālā

第1部 ネパールの仏教説話文学と Jayamuni 写本

1. ネパール仏教徒たちが作り始めた新しい梵語仏教文学

この『南アジア古典学』誌を中心に発表を続けてきた、アヴァダーナマーラー類の諸文献に対するこれまでの私の研究は、その特徴を一言で表現するなら、「Jayamuni が筆写した諸写本に基づくアヴァダーナマーラー諸文献の研究」といえる。

ネパールの梵語仏教写本において、17世紀頃から本生説話文献や仏伝文献のジャンルにおいて写本が急増する⁽¹⁾。その現象は、16世紀後半から徐々に貝葉の代わりに紙が使われるようになり、17世紀に本格的に紙の時代に移ったことが一つの起因になっていると思われるが、しかし単に素材の切替による写本の急増というだけでは説明がつかないように感じられる。17～18世紀にかけて、仏伝・本生話のジャンルにおいて Mahājātakamālā (MJM) や Tathāgatajanmāvadāna (TJAM) を初めとする浩瀚な新しい作品が出現し、作品の種類そのものが明らかに増えている点が注意される。その時代に梵文の仏教文芸作品の創作と普及の運動が一つのブームのように起こったのではないか。単に古い貝葉写本を紙に写すだけでなく、avadānamālā という作品様式で自分たちの手で新たに文学的な作品で創作しようという機運が起こったことが、そのジャンルにおける写本の急増と恐らく関連している。

特に文学的な仏典について、ネパール仏教社会におけるその啓蒙・普及活動は、歴史的に見て、次の2段階の時期があったと考えられる。

第1段階：難解な梵語の仏典を平易な梵語の作品として再話する時期

第2段階：梵語をネパール語に翻訳することで仏典を再話する時期

第2段階の、仏典をネパール語に訳して作品を作る時期は大体18世紀中頃より後であるが⁽²⁾、その前の17世紀～18世紀中頃において第1段階の「平易な梵語作品の創造」の

1. 例えば17～18世紀の Lalitavistara の写本の急増。私はかつて Lalitavistara や Mahāvastu や Buddhacarita などの文学的なインドの仏教梵文作品の、世界に現存する諸写本を調べて、写本情報をネットに公開したが、17～18世紀にそのジャンルで「写本爆発」と言ってよい現象が起きているように感じた。

2. ただし梵語のテキストにネパール語の語彙や説明メモを付けた程度のネパール語訳であれば、16世紀中頃から儀礼書などに写本が存在するが、それらは翻訳というより勉強ノートに近い。梵語とネパール語の本格的なバイリンガル本の作成は、梵語の学力が急速に衰えた18世紀以降になる。

時代があり、その時期に仏伝・本生活のジャンルにおいて新しい梵語作品がネワール仏教徒によって熱心に作られたと考えられる。

私が先に作品名を挙げた、MJM という作品は⁽³⁾釈尊の前世の誓願と本生を語る文献であり、また TJAM は釈尊の今世の生の前半を語る仏伝文献であるが、それらの文学的な作品は17世紀の時代にネワール仏教徒たちが自ら作り始めた独自の梵文の文学的作品の代表例であるといえる。上記の第1段階の時期にあたる、新たな創作運動の仕掛け人は — 少なくともその代表的な一人は — カトウマンドウ近郊の古都パタン (Patan, Lalitpur) に住んだ Jayamuni という人物であったと私は考えている。

このような釈尊の前世の物語や釈尊の伝記が梵文作品としてネワール仏教徒たちにより独自に作られるに至る、釈尊への関心の高まりが生じた原因として、釈迦仏への信仰の復興運動がパタンなどのシャーキヤたち (śākya) を中心に生じたのではないかと私は考えている。釈迦仏への信仰は、仏教徒として当然ではないかと思われるかもしれないが、カトウマンドウ盆地のネワール族が伝統的にもつ、本初仏 Svayambhū や Vajrasattva や Cakrasaṃvara や変化観音 (Karuṇāmaya 尊) や普賢などの密教的尊格を教主釈尊よりも重視する後期密教の儀礼文化においては、それは決して当たり前ではない。それらの古い密教の教えとは異なる方向性をもつ信仰として、私は16～17世紀にネワール族の内部の特に自らを古代の釈迦族の末裔であると信じるシャーキヤの人々を中心に、「釈尊 (釈迦族の聖者、シャーキヤ・ムニ) への信仰に帰れ」という一種の復帰運動が力強く湧き起こって来たのではないかと推測する⁽⁴⁾。その釈尊信仰の運動の一つのシンボルを見なしうるのが、彼らの中心地パタンにある Mahābuddha (or Mahābuddha) という寺⁽⁵⁾に聳え立つ、インドの釈尊の大聖地 Bodhgayā にある大塔を大まかに模

3. Mahajjātakamālā は Hahn & Bühnemann (1985) により出版された。この作品は本来は約 11,000 の詩節から出来ていたが、葉の喪失により現存写本は 9,300 詩節から成る。この大きな梵語作品の中核部分は、梵文の悲華經 (Karuṇāpuṇḍarīka) 中の釈尊の前世物語の再話を内容とする。

4. 1615年頃から、パタン地域の諸々の Bāhā に属するシャーキヤたちにおいて Śākyavaṃśa 「釈迦の種姓、釈迦の血統」という名字 (surname) を用いることが普通になったという。Gellner (1992: 165, 166) を参照。この現象も、その17世紀初めの頃に自分たちが釈迦族の末裔であるという意識が強く起こっていたことを示すものであろう。

5. パタンのこの寺は、D. Wright の王統譜の英訳 (pp. 204-208) では Mahābuddha という名であるが、Bajracarya & Michaels の出版したネパール王統譜 Nepālikabhūpavaṃśāvalī テキストでは Mahābuddha という名で記されている (つまり梵語で「Mahābuddha の (ための寺院)」の意味)。Cf. Bajracarya & Michaels (2015), 121b/II, [90]～[100]. 私はここで寺名として Mahābuddha の名を用いるが、しかし一般に Mahābuddha 寺と呼ばれていることから、Mahābuddha 寺と記しても間違いではない。— なおカトウマンドウにも Mahābuddha Mahāvihāra (= Mahābū Bāhā) という、巨大な仏塔と触地印の仏像をもつ寺があるが、そちらの寺の建立の経緯はよくわからない。Cf.

した美しい塔であろう⁶⁾。1601年完成の Mahābauddha 寺を建立したシャーキヤたちは、釈尊という原点に戻ること、自分たちの宗教的な役割を再確立しようとしたのではないか。そのためには釈尊の伝記や釈尊の前世の物語を深く学ぶことが自分たちの務めであると考えたのではないだろうか。

17世紀に TJAM に代表される釈尊の伝記や MJM に代表される釈尊の前世（ジャータカ）を語る、新たな梵文の諸作品がネワール民の内部で続々と作られる現象と、その Mahābauddha 寺とを結びつける鍵となると思われる唯一の人物が、「Mahābauddha のパండిタ（賢者）Jayamuni」（mahābuddhakā jayamuni paṇḍita）と人々に呼ばれた、Jayamuni なのである。

その Mahābauddha 寺の建立の由来を見ると⁷⁾、Jayamuni の曾祖父 Abhayarāja (or Abhayarājaju) は、Uku Bāhā 大寺の指導的シャーキヤであったが、ネパールからインドの釈尊の大聖地への旅に出て、彼が Bodhgayā (or Bauddhagayā) の地で3年間釈尊への敬虔な信徒として過ごした時、天空から Mahābuddha 仏の侍女 Vidyādhārī devī の声を聞き、Mahābuddha 仏からの指示を授かるという不思議な宗教的な経験を得た。その曾祖父はその仏蹟で得た一大啓示に従い、自国パタンに戻って来ると、さっそく3階立ての寺院を建設し、また釈迦牟尼の仏像を作ったという。その建立の経緯により、彼の建てた寺は釈迦牟尼（Mahābuddha）を祀るための寺院であったと確認できる⁸⁾。彼は国に帰ってから、Amara Malla 王より貨幣鑄造を監督する役職に任命された。その収益が寺院の建造を容易にしたのであろうか。さて Abhayarāja の Bodhgayā 滞在中に彼の息子 Baudhdhaju (= Jayamuni の祖父) がその聖地で誕生したが、その Bauddhaju の息子 Jivārā-

Locke (1985), 343-345.

6. Mahābauddha 寺 (Mahābuddha Bāhā, Bodhimaṇḍa Vihāra) については Locke (1985), pp. 97-101 の解説を、またその Mahābauddha 寺を支院としている Uku Bāhā 大寺 (= Rudravarṇa- or Rudravarma- Mahāvihāra) については Locke, pp. 90-95 の解説を参照のこと。Gellner (1992: 58) によれば、Uku Bāhā 寺に住むシャーキヤたちは自分らがその寺を建立した王の子孫であることを誇りにしていた。この Uku Bāhā は、金剛師 (Vajrācārya) ではなく、シャーキヤたちが管理する寺である。その点については、田中公明・吉崎一美 (1998) 『ネパール仏教』、春秋社、52頁を参照。

7. Mahābauddha 寺院の建立に関して Locke (1985), pp. 97-100 の Mahābuddha Bāhā の記述がよく纏まっており、私のここでの記述はそれに基づいた。また王統譜については Wright (1877), pp. 204-205, 208 と、Nepālikabhūpavaṃśāvalī ネパール王統譜の Bajracarya & Michaels (2015), ii, p. 103 の英訳も参照した。

8. Jayamuni が筆写した MJM の作品の冒頭に namaḥ śrīmate bhagavate śākyamunaye mahābuddhāya namo namaḥ // という文があることから、Mahābuddha とは釈迦牟尼仏であることが確認できる。

ja (= Jayamuni の父) は聖地 Bodhgayā に詣でて、故郷パタンに戻つてくると、Bodhgayā の大塔をモデルにした śikhara 様式の塔をもつ Mahābauddha 寺を建てた⁹⁾。また Jīvarāja はシッキムに行ってチベット人のラマに Mahābauddha 寺の恵みを説明して、多額の寄進を得たという。以上の王統譜の伝承では Mahābauddha 寺の建立の手柄を Jīvarāja 一人に帰しているが、しかし別の、より確からしい伝承では¹⁰⁾、Mahābauddha 寺の建立の計画を立てたのは曾祖父 Abhayajāra 自身であり、それ故、その寺の建造の開始年は西暦1565年 (685 N.S.) となる。Abhayarāja は計画を立てて死亡したので、建造を実行に移したのは彼の息子たちのうちの4人であったが、その4人のうちの3人の息子は建造中に亡くなり、後を任された4番目の息子 Bauddhaju も遂にその完成を見ることが出来ずに亡くなって、その建造は彼の息子 Jīvarāja (Jayamuni の父) に託された。実際にその寺の建造が終わったのは1601年 (721 N.S.) である。彼らが計画だけで諦めずに、二代もかかって粘り強く建造を続けたのはなんであったかを考えると、それはやはり Mahābauddha への熱い信仰心があったからであろう。

9. Bodhgyā の大塔をイメージしたこの Mahābuddha 寺院の独特の塔は、インドから巡礼者が土産物として持ち帰った、石鹼石で作られた Bodhgyā の大塔のミニチュア品 — Slusser (1982), II, plate 211 の写真を参照 — をモデルにして作られた可能性がある。インドの Bodhgyā は、イスラームの侵攻を受けた13世紀以降の長い忘却と土に埋もれた期間を経て、16世紀末からヒンドゥー教シヴァ派マハンタ (Mahanta 僧院長) の管理下に置かれるようになった時、Abhayarāja のような16世紀中葉に訪れた巡礼者たちがどの程度まで大塔の全体の姿を見ることができたかは不明であるが、1881年の時点でも大塔は下半分が埋まって、四維の四つの小塔が埋もれて見えない状態であったようだ。パタンの Mahābuddha の塔がインドの Bodhgyā の大塔の大まかなイメージを示すものの、四維の小塔のあたりが合わないのはそのためであろうか。なお今は観光の名所になっているこのパタンの Mahābuddha の塔は、1934年の大地震で塔全体が崩れ落ちてしまったため、現在ある塔はその後に再建されたものである。Cf. Slusser (1982), I, p. 148, note 62.

11. 私のこの意見の根拠を述べると、第一に MJM という作品は Jayamuni が筆写した BJAM の写本を利用して作られているから MJM は Jayamuni の活動期間と重なる期間（17世紀中頃）に作られた作品であると判断できること、第二に彼が MJM と BJAM と TJAM と SAM と SMRAM と

Mahābauddha 寺を中心とする、釈迦信仰の推進を願うシャーキヤたちのグループに属していた Jayamuni によって⁽¹²⁾、TJAM や SAM という「仏伝 avadānamālā」の筆写がなされた動機は、釈尊の仏伝を読みやすい形にして普及させることが、釈迦仏への信仰を高めるために最も必要で有効であったからであると、そのように理解できる⁽¹³⁾。

釈迦仏への信仰の復活運動という観点から見る時、その17世紀の時代に MJM という浩瀚なる釈尊の前世物語の avadānamālā が作られた理由も、容易に説明できる。ネワール族は大乗仏教徒である。釈尊の前生活を説いた文献はたしかに小乗仏教の文献に多いが、しかし大乗經典として、慈悲により五濁惡世に自ら出現する穢土の仏たらんと決意した釈尊の前世の誓願と絡めて、釈尊の前生活をきちんと説いた經典こそが、梵文の

KDAM などの最古の写本 (archetype 写本) を書いた人物であることを考慮すると、彼はそれらの、彼以前には恐らく存在しなかった作品を最初に筆写した人物という役割を担うだけではなく、彼はそれらの作品の製作者グループと密接な繋がりがあったか、彼自ら製作者の一人として創作活動に励んでいたという可能性が自然に浮かんでくること、である (注21を参照)。

12. 以前の論文、岡野 (2019) 2頁で私は Jayamuni を「金剛師」と記述したが、Mahābauddha 寺の Jayamuni が金剛師 (Vajracārya) ではなくシャーキヤであることはほぼ確実で、その事はとても重要なポイントなので、その私の誤りをここで訂正しておきたい。— 以下は私の憶測なのであるが、金剛師の世襲化によって金剛師になる道を断たれてしまったカースト固定化の時代のシャーキヤたちの中の知的エリートたちは、その宗教的方向性を、金剛乗の密教儀礼ではなく、釈尊という自分たちの血と結びついた仏への信仰に置くことによって、自分たちシャーキヤの宗教的な位置を取り戻そうとしたのではないか。つまり Mahābauddha 寺をその一つの支院として、30寺近い数の支院を有する、Uku Bāhā 寺に属する大きな僧団 (サンガ) のシャーキヤたちは、金剛師の教えである密教の尊格たちよりもまず釈尊を尊ぶ、新しい宗教運動をパタンの地において起こそうとしていたのではないか。パタンに住むそれらの宗教者たちによる新しい意識改革が、釈尊の伝記とその前世をめぐる文学的文献の精力的な製作を強く求め、17世紀から始まるネパール撰述の avadānamālā 文献群の形成をもたらしたのではないか。また密教儀礼文献の場合は金剛師でなければその文献の写本の所有や複写が難しいが、仏伝や説話文献であればシャーキヤたちもその写本の所有や複写が容易なので、それらのジャンルにおいて作品の創造と紙写本の製作という知的な活動をシャーキヤの知的エリートたちは楽しみ、宗教的なやりがいを見出すことが出来たということもあるであろう。

13. 17世紀に Jayamuni が筆写し、恐らくその製作にも関わっていたと思われる作品たる MJM や TJAM や SAM や SMRAM や KDAM などの avadānamālā 文献が、Mahābauddha (釈尊) を祀る Mahābauddha 寺への信仰の推進という動機から作られたとすれば、それらの仏伝と前生活の作品は、Svayambhū (本初仏) を祀る Svayambhūnāth 仏塔の信仰の推進という目的をもって15世紀頃に原形が成立したネワール仏教独自の梵語作品 Svayambhūpurāṇa とは、宗教性と作品製作の目的の違いの故に、作品の背後にいる製作者たちの所属する社会集団がはっきり違っていると判断できよう。

悲華經（*Karuṇāpuṇḍarīka*）である。その悲華經の内容を広く知らしめるための、その經の一部をなす釈尊の前世の物語に対する再話が、MJM という巨大な作品の大部分をなしている。それ故 MJM の製作に、ネワール族のカースト制度確立後の時代における釈迦仏信仰への復帰という動機を読み取ることが出来る⁽¹⁴⁾。

2. インド仏教研究に果たした Jayamuni 写本の役割

インド仏教文学諸文献の校訂研究は西洋で19世紀から始まったが、その校訂の歩みはこれまで、前述の17世紀のネワール仏教徒 Jayamuni の学問的努力の恩恵を非常に被ってきた。

E. Senart が1882～1897年にインドの仏伝 *Mahāvastu* の梵文テキストを校訂・出版できたのは、Jayamuni が貝葉から写して作った *Mahāvastu* の紙の archetype 写本から派生した諸写本の使用のおかげとあってよい⁽¹⁵⁾。

Cowell と Neil が1886年に *Divyāvadāna* の梵文の校訂テキストをあまり苦勞せずに出版できたのも、Jayamuni が貝葉から写して作った *Divyāvadāna* の紙の archetype 写本から派生した紙の諸写本を用いることが出来たおかげである⁽¹⁶⁾。

14. 12～13世紀頃からネワールの仏教出家者の多くが妻帯するようになり、また14世紀後半からのカースト制度の導入によりシャーキャが金剛師に次ぐ地位をもつ高位カーストとして確立すると、仏教出家比丘を意味する「釈迦の比丘」（*śākya-bhikṣu*）という本来の意味のシャーキャよりも、家系・血統としてのシャーキャ（*śākya-vaṃśa*）の意味が強まって、「自分たちはカピラヴァストウの釈迦族の血を引く者である」という誇らかな意識が強くなったと考えられる。16世紀中頃にインドの Bodhgayā への巡礼を行った Jayamuni の曾祖父 Abhayarāja のような人物が出たのは、釈迦族という自らの血統の自覚に基づいて、自分たちの祖先の信仰、すなわち釈迦族の聖者（シャーキャ・ムニ）への信仰に戻ろうとする願望が当時起こっていたからであろう。

15. Émile Senart (1882, 90, 97): *Le Mahāvastu. Texte sanscrit pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire*, 3 vols. Paris. — この *Mahāvastu* の Jayamuni 写本については Tournier (2012) (2017) や Marciniak (2017a) (2017b) を参照のこと。

16. E.B. Cowell & R.A. Neil (1886): *Divyāvadāna, a Collection of Early Buddhist Legends*, Cambridge. — Jayamuni は *Divyāvadāna* (略号 DA) の紙写本 (NGMCP A 123/6) を、11世紀頃の貝葉 (NGMCP A38/14 と A38/15) から写したらしい。この DA における Jayamuni の貢献は、貝葉から信頼しうる紙写本を作り、根本有部律由来の *avadāna* を集成した作品 DA — この DA という作品名がインド古来のものか、ネパールの写経生が暫定的に付けた仮の名かどうかは不明であるが — のテキスト全体が失われるのを防いで、DA という作品を確実に後の世代に渡すのに成功したことである。Cowell & Neil (1886) の校訂に使われた紙写本7本の archetype 写本である17世紀に Jayamuni が書いた紙写本がもし存在せず、古い貝葉写本が紙に写されずにそのまま放置されていたら、DA の多くの章は地上から永久に失われたはずだった。現存する貝葉は作品の一部分が残っているだけからである。 — なお DA 出版本にある *Maitrakanyaka* の章は、本来は Jayamuni

L. Finot が *Rāṣṭrapālaparipṛcchā* の梵文テキストを⁽¹⁷⁾わずか1本の写本に基づいて1901年に出版できたのも、その利用した写本が Cambridge University Library にある、Jayamuni が筆写した写本だったからである。

J. S. Speyer が1906～1909年に *Avadānaśataka* の梵文テキストを、わずかな数の写本を見ただけで速やかに校訂・出版できたのも、Jayamuni が貝葉から写した、Cambridge University Library 所蔵の、*Avadānaśataka* の紙の諸写本の archetype 写本を底本にしたおかげである⁽¹⁸⁾。

が筆写した *Bodhisattvajātakāvadānamālā* (BJAM) の NGMCP B 98/4 の写本にあった同じ名前をもつ別の章であって、Jayamuni より後の時代の人々がそれを誤って DA に移動させたものであり、その誤った移動は DA を筆写した Jayamuni の責任ではない。Hahn (2011: 86) によれば、まだ *Maitrakanyaka* の章が奪われていない状態の BJAM の Jayamuni 写本から *Jātakamālāvadānasūtra* (JMAS) の西暦1690年の日付をもつ写本は写されている故に、Jayamuni の生存中にはまだ *Maitrakanyaka* の章が DA に移動していなかったと推測できるので、その誤った移動は Jayamuni 自身の責任ではない、と見なしうる。DA に本来あった *Maitrakanyaka* の章は、Jayamuni が写した DA 写本においてどこまで完全な形であったのかは、現在失われてしまったため分からないが、或る時にその DA 写本からその章にあたる葉が既に失われているのを Jayamuni より後の時代に或る人物が気づいたらしい。その人はその章を探し、BJAM に同名の章があるのを見つけた。つまりその DA も BJAM もどちらも Jayamuni によって筆写されていたため、その同じ筆跡に惑わされ、うっかり BJAM からその *Maitrakanyaka* の32～37葉を DA に移動させたと推測される。Cowell & Neil (1886) に第38章として文体的に極めて場違いな *Maitrakanyaka* の章 (Hahn によれば GJM の一部) が入っているのはそのせいである。

17. L. Finot (1901): *Rāṣṭrapālaparipṛcchā, Sūtra du Mahāyāna*, Bibliotheca Buddhica, St.-Petersbourg. — この Finot 本に対する訂正の試みが諸学者によってなされてきたが、百年以上経っても未だにこの Jayamuni の写本だけに基いて作られた Finot 本に代わる新校訂本が現れていない。この Finot 本を底本とした翻訳として、次のものがある：J. Ensink (1952): *The Question of Rāṣṭrapāla*, Zwolle; 桜部建訳「護国尊者諸問経」『大乘仏典9 宝積部経典』1974年、中央公論社。

18. J. S. Speyer (1906, 1909): *Avadānaśataka, a century of edifying tales belonging to the Hīnayāna*, Bibliotheca Buddhica III, 2 vols, St.-Petersbourg. — 西暦1645年に Jayamuni は *Avadānaśataka* の紙写本 (CUL 1611) を筆写したが、その写本はこの Speyer の校訂本において B という記号を与えられ、諸写本の中で最も信頼できる写本、いわば底本として使われた。Speyer の校訂が基づいたこの Jayamuni 写本に関する情報は Demoto (2006) と Formigatti (2016) と Fiordalis (2019) を参照のこと。ヨーロッパでこの *Avadānaśataka* の editio princeps が、チベット訳を厳密に参照する必要もなく、L. Feer (1891) の仏訳と4本の梵文写本を見ただけで速やかに1902年に出版されたのは、何より Bendall が蒐集した Cambridge の写本の中に幸運にもこの Jayamuni の写本 B が存在したからである。もしこの写本がネパール国内に留まったままであったら、20世紀初頭における *Avadānaśataka* の速やかな校訂出版はたぶん不可能であり、その最初の校訂本の出現は70年から100年ほど遅れた可能性がある。

岩本裕が1968年に出版した *Sumāgadhāvadāna* の梵文テキストの校訂本も、実質的に Cambridge にある Jayamuni 写本に基づいている⁽¹⁹⁾。

また Michael Hahn が1977年以降 *Haribhaṭṭa Jātakamālā* の第 2, 4, 5, 6, 11, 12, 19, 20, 22, 32, 35 章の校訂を順調に進めることができたのは、Jayamuni が書いた *Bodhisattvajātakāvadānamālā* の最古の紙写本 (NGMCP B 98/4) を利用できたおかげである。

また M. Hahn & Bühnemann (1985) による *Mahajjātakamālā* の全章の校訂、さらに私 (岡野) による *Tathāgatajanmāvadānamālā* (= *Padyalalitavistara*) と *Subhāṣitamahārātnāvadānamālā* の多数の諸章の校訂、また Asplund (2013) の博士論文における *Kalpādrumāvadānamālā* 第26章の校訂など、近年のネパール撰述アヴァダーナマラーの領域で行われた校訂の作業においても、それぞれの作品の Jayamuni が筆写した紙写本が底本の役割を果たした。

19世紀以降行われてきた仏教文学の分野のこれらの校訂研究は、Jayamuni という人物に筆写された紙写本が非常に有用であることを意識せぬままに、偶然 Jayamuni の写本やそれに近い位置にある派生的諸写本に出会って、その恩恵を受けてきたわけであるが、これからの時代はその Jayamuni 写本の学術的価値を強く意識して効率的に研究を進める時代になろう。

Jayamuni が書いた写本の特徴は、次の世代に正確な梵語テキストを伝えようという学問的良心をもって常にテキストの内容を理解しながら注意深く筆写されていることである。責任感に満ちたこの筆写の態度は古代インドでは当然であったのかもしれないが、ネパールでは Jayamuni より後の世代 (特に18世紀以降) の紙写本では次第にそれが失われてしまったため、それだけに紙の時代の諸写本では Jayamuni の筆写の仕事の貴重さが際立つ結果となった。*Samṃbhadṛāvadānamālā* の巻末のコロフォンで Jayamuni は自らを「菩薩」(*bodhisattva*) と称したが、信頼しうる写本の作成という行為こそが恐らく、彼が生涯の間自ら心に誓い、黙々と実行し続けた菩薩行であったに違いない。彼はネワール族が代々継承してきた梵語の仏教文学諸文献の貴重な遺産を、読みやすい紙写本で、現代の仏教文献学にしっかり受け渡してくれた恩人である。

現在私が Jayamuni 筆写本と考えている16作品の写本のほとんどは、どれも梵語仏教文学の文献学的研究において重要な意味をもつものである。次にそれらの16写本について若干の考察を行いたい。

19. Y. Iwamoto (1968): *Sumāgadhāvadāna, neubearbeitet herausgegeben*, <Studien zur buddhistischen Erzählliteratur II>, Hôzôkan Verlag, Kyoto. — この校訂本において岩本裕は Jayamuni 写本より古い13世紀頃の1本の貝葉写本 (Asiatic Society of Bengal 所蔵本 No. B. 57) も用いているが、しかし実質的に彼の校訂本において底本の役割を果たしたのは Jayamuni が作った13葉の紙写本 C (紙の諸写本の archetype 写本) であった。

3. Jayamuni の16写本の検討

私は先の論文、岡野 (2019: 17) と (2020: 149) で Jayamuni に帰せられる16作品の写本を列挙したが⁽²⁰⁾、それらの Jayamuni 写本のリストをここでもう一度挙げることから、考察を始めたい。

その16作品は以下のように、「Aグループ：インド撰述の諸作品」と「Bグループ：ネパール撰述の諸作品」に分類できる⁽²¹⁾。

20. この16写本のリスト作りには、Formigatti (2016) が行った Jayamuni 諸写本の考察が最も大きく貢献している。Formigatti らの指摘した諸写本に、私は更に3写本を付け加えて、16写本とした。岡野 (2019), 16-17頁を参照。

21. Jayamuni の16写本を「Aグループ：インド撰述の諸作品」と「Bグループ：ネパール撰述の諸作品」に分類する理由について、ここで説明しておきたい。— 大きな志を抱く Jayamuni の筆写活動は、写本という伝統的遺産の在庫調べと古写本の筆写から始まったであろう。カトゥマンドゥ盆地に伝わる仏教の文学的な梵文の諸作品の写本伝統が将来にも失われないように決意し、その保存・維持のために貝葉でなく紙を用いて筆写活動を開始したと推測される。彼はその保存活動のために、まずどのくらいの数の仏教の文学的な梵文の諸作品がカトゥマンドゥ盆地に伝わるのか、その貴重な遺産の「在庫調べ」をしたはずである。恐らく彼はあちこちの寺や王宮などの写本の保管場所を訪ねて、どのくらいの作品があるのか、またそれぞれの作品について最も貴重な古い写本はどれかを調べたであろう。梵文仏教文学の遺産の「在庫調べ」をしながら、どの貝葉写本を用いて筆写すればよいのかをよく見極めた上で、すぐれた学者である彼は細心の注意をもってそれを紙に写したであろう。そしてパタンの仲間たちに、今後その作品の写本の筆写をする際には、自分が写して作った紙写本を原本にして写すように勧めたであろう。そのようにして、Jayamuni が筆写したAグループの紙写本 (① Avadānaśataka や ⑦ Mahāvastu など) がその後には作られる若い写本にとっての archetype 写本の役割を果たしていったと思われる。— 歴史的に見れば、Jayamuni の筆写活動は明らかに、同時代の梵文仏教文学の創作運動と結びついていた。間接的な影響というより直接的な貢献として。その事実を考えると、Jayamuni の筆写活動は、単に写本伝統の保存だけが目的ではなかったろう。彼の活動は次の様に二つのステージに分けられるであろう。第1のステージは、上に述べたような「写本という伝統的遺産の在庫調べと古写本の筆写」のステージである。それが「Aグループ：インド撰述の諸作品」の写本にあたる。次に来る第2のステージは、「同時代に生み出されつつある梵文仏教文学の新作の製作活動の一環」としての新作の筆写である。この第2ステージで行われる新作の製作活動とは、第1のステージで作られた彼の読みやすい紙写本などをソースに用いながら、その古い作品を再話して新しい作品を作るという仕事であるから、第1のステージの活動は第2のステージの活動の準備としてあったわけである。第2のステージの彼の活動とは、具体的に「Bグループ：ネパール撰述の諸作品」に見られる諸文献の筆写である。具体的に例を示すと、まず ① Avadānaśataka の紙写本が第1のステージで作られた後、次の第2ステージで、「Bグループ：ネパール撰述の諸作品」に見られる文献、つまりその Avadānaśataka を再話する「Avadānaśataka 系列の avadānamālā 文献群」の新作の製作が行われたが、その際 Jayamuni は ⑪ Kalpadrumāvadānamālā や ⑯

Jayamuni に筆写された16写本のリスト

[Aグループ：インド撰述の諸作品]

- ① Avadānaśataka (CUL, Add. 1611)
- ② Divyāvadāna[mālā] (NGMCP A 123/6)
- ③ Dṛḍhādhyāśayāvadāna of Gopadatta Jātakamālā ([③+⑮] =) NGMCP H 380/7)
- ④ Dhīmatīparipṛcchāvadāna (NGMCP A 131/14)⁽²²⁾
- ⑤ Bodhicaryāvatāra (NGMCP H 380/7)
- ⑥ Bodhisattvajātakāvanamālā (NGMCP B 98/4)
- ⑦ Mahāvastu (NGMCP B 98/14)
- ⑧ Rāṣṭrapālāparipṛcchā (CUL, Add. 1586)
- ⑨ Sumāgadhāvadāna (CUL, Add. 1585)
- ⑩ Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra (CUL, Add. 1041)⁽²³⁾

[Bグループ：ネパール撰述の諸作品]

- ⑪ Kalpadrumāvadānamālā (NGMCP A 117/13 to A 118/1; A 861/5)
- ⑫ Tathāgatajanmāvadānamālā [alias Padya-Lalitavistara] (NGMCP A 123/5)
- ⑬ Mahājātakamālā (NGMCP B 98/15)

Subhāṣitamahāratnāvadānamālā などの新作品の筆写によってその製作活動を支援した。また別の、仏伝（釈尊の伝記）文献のジャンルにおいては、第1のステージとして ⑦ Mahāvastu の紙写本が作られ、次の第2ステージで、その Mahāvastu などの梵文仏伝を材料にして再話する「仏伝の avadānamālā 文献群」の新作品の製作が行われて、Jayamuni はその製作活動を ⑫ Tathāgatajanmāvadāna や ⑭ Saṃbhadrāvadānamālā という新仏伝作品を筆写するという役割を担うことによって支援した。このように、もともと Jayamuni の志は、第1ステージの古写本の発掘と保存事業に留まらず、第2ステージの創作運動を見据えたものであったと理解できる。

22. この ④ の Dhīmatī(or Śrīmatī-?)-paripṛcchāvadāna については、写本を未見のため内容がわからず、その作品をAグループかBグループかのどちらに入れるべきか判断がつかないので、仮にAグループに入れておいた。

23. この ⑩ の写本はコロフォンには Paṇḍita Siddhasena によって N.S. 671年（西暦1551年）に書かれたとあるが、Bendall (1883) が記すように、その写本の本当の筆写年とは思えない。Bendall は鋭くも、この写本が ⑧ Rāṣṭrapālāparipṛcchā の写本（1661年）と字が似ていることに気づいて、そのことを指摘している。この ⑩ 写本は少なくとも前半部分は Jayamuni による筆写のようであるが、巻末のコロフォンが記されている葉（362b）は Jayamuni の筆跡ではないから、Paṇḍita Siddhasena という名や筆写年についてはその点も考慮しなくてはならない。

⑭ Saṃbhadrāvadānamālā (東大 Matsunami No. 429)

⑮ Sugatāvadāna ([⑬+⑮]=] NGMCP H 380/7)

⑯ Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (NGMCP B 101/3)

前論文では、この16本を二つに分類して、①～⑩の写本を「Aグループ」とし、⑪～⑯の写本を「Bグループ」と分けた。Aグループの①～⑩の写本は、インドで作られた古い梵文作品のテキスト、Bグループの⑪～⑯の写本は、ネパールで17世紀に新たに作られた梵文作品のテキストである。

これら16作品について特に写本の紙の大きさに着目し、筆写年がわかっている写本についてはそのことも考慮しながら、以下、Jayamuni の写本間の関係を考察してみたい。

2本の Cambridge 大学図書館 (UCL) が所蔵する写本、⑧ Sumāgadhāvadāna (UCL, Add. 1585) と ⑨ Rāṣṭrapālāparipṛcchā (UCL, Add. 1586) の両写本は、画像を一見しただけでまるで同一の写本の様によく似ていることが感じられる。これら2写本は同じ大きさの紙が用いられているから、ほぼ同じ時期に Jayamuni によって筆写されたようである。⑧ Rāṣṭrapālāparipṛcchā の筆写年代はわかっており、西暦1661年である。

⑧ Rāṣṭrapālāparipṛcchā 35.56 × 7.62 cm⁽²⁴⁾ (= 14 × 3 in.) 10 lines

⑨ Sumāgadhāvadāna 35.56 × 7.62 cm (= 14 × 3 in.) 10 lines

次に ⑥ Bodhisattvajātakāvadānamālā (略号 BJAM) という作品は、現存しない Haribhaṭṭa の Jātakamālā の古写本から筆写されたものらしいが、ネパールで編集された avadānamālā として、ソースの古い作品名を失い、別の作品名を新たに与えられて成立したものであり、筆写年は不明である。Jayamuni が筆写したこの ⑥ の写本は現存する BJAM の2写本のうちの最古の写本である。本来かなり嵩張る作品 (Āryasūra Jātakamālā の1.5倍の長さをもつ Jātakamālā) である Haribhaṭṭa Jātakamālā の写しの一部だったと考えられる。この ⑥ 写本が Jayamuni によって記されたものと指摘したのは、Formigatti (2016: 125) である。さてこの ⑥ の写本について、他の Jayamuni 諸写本を比べて見ると、次の ① ③ ⑮ の写本の紙の大きさが、この ⑥ の写本とかなり近いことに気づく。

① Avadānaśataka 35.56 × 10.16 cms (= 14×4 in.) 13 lines

③ Dṛḍhādhyāśayāvadāna of GJM 35.5 × 10.2 cms 12 lines

24. Bendall (1883) のカタログでは inch で書かれているから、それを cm に換算した。

⑥ Bodhisattvajātakāvanamālā

35.5 × 10.5 cms⁽²⁵⁾ 10～13 lines

⑮ Sugatāvadāna

35.5 × 10.2 cms 12 lines⁽²⁶⁾

③ の Gopadatta Jātakamālā (略号 GJM) の第18章 Dṛḍhādhyāśayāvadāna と、⑮ Sugatāvadāna は、実は一つの写本 (NGMCP H 380/7) に書かれた二つのテキストであるから大きさが同じなのは当然なのであるが、③+⑮ の写本は特に ① の写本と、一見して相互によく似ているという印象を写本の画像から受ける。① Avadānaśataka の写本の筆写年は西暦1645年であり、③+⑮ の写本の筆写年は1643～1644年であるから、この ① と ③+⑮ の写本は同じ時に業者から仕入れた、同じ紙を使っている可能性がある。両写本は紙の大きさが近似するばかりか、余白の幅の取り方などが似ている。

この ③+⑮ の写本について Marciniak (2017c) は重要な指摘をした。16葉から成る ③+⑮ の写本は第65葉から始まっており、第64葉以前の葉はすべて失われているが、その第65葉では、第5行目から ⑮ Sugatāvadāna のテキストが開始され、その前の第1～4行目には ③ GJM の最終章としての第18章 Dṛḍhādhyāśayāvadāna のテキストの最後の部分が記されている。その GJM のテキストにはコロフォンが付けられており、その最終コロフォンから Jayamuni が西暦1643年 (763 N.S.) に ③ の GJM のテキストの筆記を終えたことが知られる。GJM の最終コロフォンが第65葉にあるということは、恐らく失われた第1～第64葉には GJM の全部の章が記されていたのであろう。第65葉の5行目から始まる ⑮ Sugatāvadāna の全テキストは第80葉に終わるが、その第80葉にも最終コロフォンが付けられていて、そのコロフォンによって Jayamuni が ⑮ のテキストを西暦1644年 (764 N.S.) に筆記し終えたことが知られる。このように、二つのコロフォンのおかげで ③ が西暦1643年に記された後、⑮ が翌年の1644年に記されたことを知ることが出来る。以上の情報は、Jayamuni のその当時の志向と活動を推測する上で極めて重要である。Jayamuni が1643年に GJM の筆写を行っていたことは、その頃に Jayamuni が強く Jātakamālā 文献群の写本への関心を持って筆写活動を行っていたことを示すものである。つまりその頃に Jayamuni が GJM の筆写をしたことは、彼が Haribhaṭṭa Jātakamālā (略号 HJM) の写本の筆写を行ったのも、その前後の近い時期であったことを推測させる。つまり、⑥ BJAM は中身の大部分が HJM の諸章から出来ている作品であ

25. これは NGMCP catalogue の情報による。ただし Hahn (1983: 28) と Hahn (2007: 42) によれば、36.5 × 10 cm で、微妙に数値が違う。またこの ⑥ の写本では葉によって行数が固定的ではないという印象を受ける。10行～11行の葉が多いが、12行や13行の葉もある。

26. ⑮ Sugatāvadāna の写本に関する数字は Marciniak (2017c), p. 124 にある NGMCP Catalogue Card の情報を参照し、また1葉の行数については同論文, p. 127 を参照した。どの葉の両面も12行で書かれているが、最後の葉だけは例外的に10行である。⑮ Sugatāvadāna 写本の画像は Marciniak (2017c), p. 124 に1枚だけ載せられている。それは第65葉の画像である。

るから、Jayamuni による ⑥ の写本の筆写年は ③ の GJM が書かれた1643年の前後であったのではないかと考えられる。すると、⑥ BJAM の写本と ③+⑮ の写本がほぼ同じ大きさであることは不思議ではなくなる。Jayamuni が同じ頃に ③ の GJM と ⑥ の HJM という、同じ Jātakamālā ジャンルの二つの作品を、紙の大きさを揃えて筆写したことは大いに考えられることである。また、次に述べる別の観点からも、私は ⑥ BJAM が、① や ③+⑮ と同様に、Jayamuni が若い頃の時期に筆写された写本である可能性を考えてよいと思う。Jayamuni が ① Avadānaśataka (略号 Avś) の紙写本を作ったことを出発点に、それを利用して「Avś 系列の avadānamālā 文献群」の長期間にわたる膨大な製作作業がその後続いていったと私は推測するが、それを考えると、① の写本年代（西暦1645年）が Jayamuni の筆写の仕事の比較的初めの頃にあたることは自然で、納得できる⁽²⁷⁾。また ⑥ BJAM も、関連する諸作品の成立順序上の位置づけから考えるならば、Jayamuni の諸写本の間ではその写本の筆写は比較的早い時期に置かれるはずだと思う。なぜなら ⑥ BJAM の写本から、Jātatakamālāvadānasūtra (略号 JMAS)、或いはその JMAS と作品形態に近い、より古い JMAS の別の version である E 8604 が作られ、その後それ (JMAS, E 8604) を利用しながら ⑬ Mahājātakamālā という大きな avadānamālā が作られていったという流れが推測できるからである⁽²⁸⁾。

27. Jayamuni が西暦1645年にこの ① Avadānaśataka (= Avś) の紙写本 (CUL 1611) を筆写し終わった時、この紙写本に基づいて、百話から成る Avś の大部分の章の内容を韻文で再話する avadānamālā を作ろうという壮大な計画が彼か彼の周辺の人々に浮かんでいたと考えられる。

「Avś 系列の avadānamālā 文献群」(いわゆる "Ratnāvadānamālā cycle") の4文献のうち、少なくとも KDAM (= Kalpadrumāvadānamālā) と SMRAM (= Subhāṣitamahāratanāvadānamālā) は Jayamuni の筆写本 (⑪と⑥) が存在し、その Jayamuni 写本がそれぞれの作品における後代の紙写本にとっての archetype 写本の位置を占める。K DAM と SMRAM の、その2作品が含む章の多さから考えると、その2作品だけで既に Avś の大部分の章を韻文で再話する仕事の全体の約8割を占めてしまうことから、Avś の大部分の諸章の再話文献たる avadānamālā 群を作るという壮大なプロジェクトは Jayamuni 生存中に完成されていたと推測できる。すなわちその再話文献の製作運動の開始年は、Jayamuni の ① Avś 写本の筆写年である西暦1645年が上限となる。その製作運動の終了年については、Jayamuni の死亡年を下限とみなすべきであろうが、死亡年は知られていないため、彼の筆写活動が終わったらしい1680年代の終わり頃を下限とすべきであろう。すなわち、現存する KDAM, SMRAM, RAM (= Ratnāvadānamālā), AAM (= Aśokāvadānamālā) の4作品の中にある Avś を再話した諸章はすべて、1645年から1690年頃までの約45年の間のどこかの時期に継起的に作られたはずである。(ただし AAM の編集は Avś を再話した諸章の成立より遅れる可能性がある。)

28. Hahn (2011) によれば、BJAM, JMAS (= Jātakamālāvadānasūtra), ASS (= Avadānasārasamuccaya), MJM (= Mahājātakamālā) の4作品の中で、最初に成立したのは BJAM であり、その BJAM を一資料として利用しながら JMAS が成立した。JMAS という作品は大まかにいえば3種の Jātakamālā を合本させた大きな作品であって、最も古いその写本「JMAS 1」は361葉から成る。その後 BJAM と JMAS あたりを利用して ASS も成立したようだ。他方、JMAS を(より正確には、

また③のGJMの写本がJayamuniによって西暦1643年に書かれたことは、成立年代がわかっていない（現存する最古の写本が samvat 810, 西暦1690年頃である）JMAS という作品が、1643年より後に作られたことを私たちに推測させる。JMAS は Āryasūra と Haribhaṭṭa と Gopadatta の3種の Jātakamālā の諸章を結合させた作品であるから、その作品が出来するためには、それ以前にまず HJM と GHM の作品の筆写が行われていなければならない、それ故 Jayamuni による③GHMの筆写年代が1643年であるという貴重な情報は、JMASの成立年代の上限がその年であることを推測する重要な根拠となりうる。また Jayamuni が HJM と GHM の両作品の写本を筆写していたことが確認できたことは、彼が JMAS (≡ E8064) の編集に向かって（最終的には Mahajjātakamālā の製作に向かって）自ら計画的に写本の筆写活動をしていたのかも知れない、という憶測を成り立たせる一つの根拠になるであろう。

ここで、現時点で推測できる17世紀における諸作品（写本）形成の流れを短くまとめるならば、次のようになろう：（第1段階）Jayamuni が⑥BJAM と③GJM の紙写本を作った →（第2段階）その⑥BJAM と③GJM などを用いてそれらのテキストを結合させた JMAS (≡ E8064) が出来た →（第3段階）その⑬JMAS (≡ E8064) を用いて Mahajjātakamālā が作られた。本論文の第2部（TJAM 第15章の研究）では更に第4段階として、JMAS (≡ E8064) と Mahajjātakamālā を利用して⑫Tathāgatajanmāvadānamālā が作られたことを証明したい。この⑫の Jayamuni 写本の筆写年はわかっていないが、⑫の「続き」としての仏伝作品である⑭Saṃbhadravādānamālā の筆写年は西暦1686年である（もし誤りでなければ）。つまり第1段階は1643年頃、第4段階は1686年頃と、大体の目安をつけることが出来る。第1段階から第4段階に至るまでは約40年の歳月が流れている。このように、17世紀におけるネパール梵文仏教文学の主要な諸作品が、Jayamuni の生存期間のうちに完成させられていたことがわかるが、それはそれらの諸作品の形成に Jayamuni が密接に関わっていたことを示唆するものである。

JMAS に似ているが JMAS より古い形態をもつ E 8604 の version を）利用しながら MJM が成立した。つまり BJAM→E 8604 & JMAS→MJM という諸作品の生成の流れが Hahn によって推測された。それら5作品（BJAM, E 8604, JMAS, MJM, ASS）の成立順序の最初に Jayamuni のBJAM 写本の筆写が置かれることはほぼ確実である。この BJAM という作品には HJM (= Haribhaṭṭa Jātakamālā) の10の章と Maitrakanyaka と Śākyasiṃha と Karmaṇīkāsūtra 章の、合計13の章から出来ている。Hahn 校訂の HJM のテキストで最も重要な「A写本」として使われるのは、Jayamuni が筆写した⑥の写本「BJAS 1」であって、その写本の伝承のほうが JMAS の伝承よりも勝れている。JMAS や ASS の写本の伝承は悪く、チベット訳を見なければ HJM の正確な校訂は出来ない有様であった。「BJAS 1」の写本が見つかって初めてその問題が解決した。Hahn はこの⑥の写本をネパールの Haribhaṭṭa 諸章を含む諸写本の archetype であると見なす。Hahn (2007), p. 42 を参照。

次に、Jayamuni の 2 写本 ⑫ ⑭ は、どちらも「仏伝 avadānamālā」なのであるが、それらも作品内容が姉妹的な関係にあるばかりでなく、紙の大きさも近似することがわかる。

⑫ Tathāgatajanmāvadānamālā 42.5 × 8.5 cms 8 lines

⑭ Saṃbhadṛāvadānamālā 42.55 × 8.89 cms (= 16 3/4 × 3 1/2 in.) 8 lines

⑭ の写本の筆写年は西暦1686年であり⁽²⁹⁾、Jayamuni の筆写の仕事の中で最も遅い時期に属する。さてこれら ⑫ ⑭ の 2 つの再話仏伝作品と紙の大きさが近似するのが、次の⑬ Mahajjātakamālā である。

⑬ Mahajjātakamālā 43 × 9 cms 8 lines

これらの 3 写本⑫⑬⑭の紙の大きさがほぼ同じであるため、それら 3 作品の Jayamuni の筆写年が近いかもしれないという可能性を考えてみることは大切である。なぜならその可能性は、本論文の第 2 部の研究で私がたどり着いた、「⑫ Tathāgatajanmāvadānamālā の作品の製作者はその作品の第15章の釈尊の本生説話の箇所（第102～127偈）を作る時にきつと ⑬ MJM の内容を思い出しながら書いたに違いない」という結論と合わせてゆく時に、別の重大な推測を生じさせるからである。それは、⑫ と ⑬ は Jayamuni という同一人物によって筆写された作品であるばかりでなく、両作品においては製作者（のグループ）も同じであったかもしれない、という推測なのであるが、そのことは ⑬ から ⑫ へと作品が作られてゆく製作のプロセスに、両写本の筆記者である Jayamuni が関わっていることを強く示唆するものである。

ちなみにこの ⑫ ⑬ ⑭ の 3 つの再話作品と比べて、紙の左右の横幅が同じであるが、紙の縦幅が違うのが、仏伝 ⑦ Mahāvastu 写本である。縦幅が 3 センチ違うため、1 葉の行数も大きく違う。一見して、⑫ ⑬ ⑭ とは離れた年に筆写された写本である。

⑦ Mahāvastu 43 × 11 cms 12～14 lines

この⑦の写本は、そもそも ⑫と⑭の仏伝 avadānamālā を製作するための準備として、それらの種本として資料の一つに用いるために（もしその製作者が Jayamuni 本人でなければ彼の近辺にいる製作者グループに使わせるため）、入念に筆写されたものではないかと推測される。Jayamuni がこの ⑦ の紙写本を筆写したのは1657年であり、⑫ Tathāgatajanmāvadānamālā と ⑭ Saṃbhadṛāvadānamālā はその ⑦ Mahāvastu 紙写本を使いながら作られたと思われるから、もしその推測に立てば、Jayamuni が筆写した仏伝 avadānamālā の ⑫ ⑭ の作品が作成されたのは必然的に1657年以降となる⁽³⁰⁾。

29. 岡野 (2013), 326頁を参照のこと。

30. ちなみに Lalitavistara については Jayamuni が筆写した紙写本が存在するかどうかは明らかで

さて更に、ほかの Jayamuni 写本についても紙の大きさや行数に注意しながら考察してみよう。

次の ⑪ と ⑫ の 2 写本はどちらも Avś を韻文で再話した avadānamālā なのであるが、内容が似ているばかりでなく紙の大きさが近似する⁽³¹⁾。

⑪ Kalpadrumāvadānamālā 35 × 8.3 cms 8～11 lines⁽³²⁾

⑫ Subhāṣitamahāratanāvadānamālā 36.5 × 9 cms 8 lines

これら「Avś 系の avadānamālā」の 2 作品 ⑪ ⑫ は、紙の大きさの近似と 1 葉の行数（大体 8 行）などの全体的な類似から、かなり近い時期に前後して写された可能性が大きいと考えられる⁽³³⁾。あるいはまた両者は同じジャンルの作品なので Jayamuni は似た大きさの紙を用いて筆写したのかも知れない。

なおこの ⑪ ⑫ と、紙の大きさが近似するのが、⑩ Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā の写本である。

⑩ Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā 35.5 × 9.5 cms (= 14 × 3 3/4 in.) 10～12 lines

はない。Lalitavistara の多数の現存する紙写本が 1 本の archetype の紙写本に遡るかどうかとも未研究であるが、17 世紀の TJAM の製作者は恐らく貝葉の Lalitavistara でなく扱いやすい紙写本の Lalitavistara を用意して、それを絶えず見ながら TJAM を作っていたと考えられるので、TJAM という作品がソースとして利用したのは Lalitavistara の紙写本の中のどの系統の伝本なのかを調べれば、或いはまたもし Jayamuni が筆写した Lalitavistara の紙写本が今後発見されれば、その紙写本の日付によって ⑫ TJAM の製作年の上限が一層確かになる可能性がある。

31. ⑪ ⑫ 両写本の近似性などについては岡野 (2019: 16, 19) を参照のこと。

32. この Jayamuni 筆写の ⑪ KDAM 写本の情報は Asplund (2013), pp. 56-59 を参照。この KDAM 写本は (siddham) namaḥ śrīsarvabuddhabodhisatvebhyaḥ // という言葉から始まっているが、Jayamuni 筆写の ⑫ SMRAM 写本のほうは (siddham) namaḥ śrīratnatrayāya sarvabuddhabodhisatvebhyo namaḥ // という言葉から始まっている。またそれらと同系列の作品である Ratnāvadānamālā ではその作品が om namaḥ śrīsarvabuddhabodhisatvebhyaḥ // という言葉から始まっている。Takahata (1954: 1) を参照。このように開始句が似ていることは、それらの作品は同じ製作者（グループ）の手によるものであることを窺わせる。なお Ratnāvadānamālā には Jayamuni 筆写の写本がまだ見つかっておらず、高島寛我が用いた Ratnāvadānamālā の紙の諸写本はどれも Jayamuni 写本ではない。

33. なお「Avś 系の avadānamālā 文献群」にはこれらの 2 作品以外にも別の 2 作品（Ratnāvadānamālā と Aśokāvadānamālā）もあり、それらの作品ではまだ Jayamuni 写本は見つっていないが、プロジェクト性の強い作品だけに、それらの作品に含まれる Avś の再話の章も Jayamuni によって筆写されていた可能性が高く、それらの「Avś 系の avadānamālā」諸写本はすべて揃えて大体同じ大きさの紙に書かれていた可能性がある。

この⑩は362葉から成るが、少なくとも写本の前半は疑いなく Jayamuni の字と見てよいように思う。その前半を見る限り、⑩は1葉の行数が12行もある葉が多く、⑪⑮の大体1葉8行の行数とは大きく異なる。恐らく⑩はとても嵩張る作品の写本であるため、葉数を節約するため行数を増やしたのでであろう。1葉に書く行数の多さという点ではこの⑩の写本は①③⑥⑮の写本に似ている。

以上、写本の大きさを見ながら様々に Jayamuni の筆写年代について憶測——諸写本すべてが見れるわけではない現段階ではすこし勇み足すぎるかもしれない憶測——を行った。17世紀ネパールの紙写本は、紙を仕入れた時期の違いや紙の仕入れ先の業者の違いによって、筆写に用いる紙の大きさが絶えず変化しているようであるから、もし一人の人物が書いた写本の紙の大きさが同じで、内容的にも関連しあう作品である場合は、あまり長い年月を間におかず筆写された可能性が高いといえる。そのように考えながら、一つ一つ写本間の関係を検討してみた。これらの憶測は Jayamuni が筆写しながら辿ったであろう、17世紀におけるネパール独自の仏教梵語文学の生成の流れを推測してゆく上で幾分か役立つであろう。

⑪と⑮という「Avś系のavadānamālā」の両作品や、また⑫と⑭の「仏伝avadānamālā」の両作品に見られるような、内容的に姉妹的な関係にある二つの作品の写本において、紙の大きさが近似することを確かめたことは、今後の Jayamuni 写本の更なる搜索に活用できる性質をもつ、大切な確認点である。それらの姉妹的作品が示す紙の大きさの近似性は、あまり隔たっていない年に相次いで作られて直ちに筆記者の Jayamuni によって写されたという、作品形成をめぐる憶測を補強するものである。

なお⑧ Rāṣṭrapālāparipṛcchā と⑨ Sumāgadhāvadāna の写本の場合、作品の内容からはどちらも本生話に関係するインドの作品であるという事以外、明確な連続性があるとは言えないものの、同じ仕入れ先から入手した紙が用いられて同じ頃に筆写されたという意味においては明らかに姉妹的な写本である。⑧写本が筆写された西暦1661年頃の Jayamuni の関心がインドの本生話の更なる探求にあったことがわかる。

また① Avś と⑥ BJAM と③ GJM の写本の場合、どれもインドの説話文学の古い作品の貝葉から Jayamuni が筆写した写本であるという事以外、両者の間に内容的な連続性や関連性があるとは言えないが、恐らく Jayamuni がインドの説話文学作品の優良な貝葉写本を探し求めては紙に筆写していた若い時代——⑪⑫⑬⑭⑮などのavadānamālā群の創作が始まる前の準備的な時代——に、それらの3写本は互いに近い時期に筆写されたために、近似する大きさの紙に書かれたという推測を立てても許されるように思われる。

第2部 Tathāgatajanmāvadānamālā 第15章の研究

1. TJAM 第15章の中に見られるジャータカの検討

さて本論文で今回『如来出生アヴァダーナ・マーラー』 TJAM (= Tathāgatajanmāvadānamālā) の梵文テキスト研究のために取り上げるのが第15章である。『南アジア古典学』誌上に私はこれまで TJAM の 1, 3, 4, 8, 13, 14章の校訂と訳を發表してきた。

TJAM 第15章は Lalitavistara の第13章勸発品 Saṃcodanā-parivarta を再話している章である。以下、TJAM のこの章について説明したい。

TJAM という作品は全体的に、Lalitavistara と Mahāvastu という二つの大きなインドの梵文仏伝を主要なソースにしながら再話を行っているが、どちらの作品も仏教梵語で書かれており、読むのにその特殊な梵語への語学的な習熟が必要となる。Lalitavistara の第13章勸発品は、章の全体の八割が韻文で作られている難しい章である。この章の韻文は詩作の訓練を相当に積んだ人物の手で作られたらしく、芸術的な性格が強い。Lalitavistara の中で最も芸術的に作られた章がこの第13章であると言ってよいが、種々の長い複雑な韻律を多用していることと、それらの韻文においては特に濃厚な仏教梵語が出てくることから、昔の知識人もこの章を読むのに時間がかかったはずである。

ネパールにおいて、平易な梵語で書かれた TJAM や Saṃbhadrāvadānamālā のような新たな仏伝が必要になったのは、このようなインドの仏伝のテキスト読解の難しさのためであろう。仏教梵語に習熟しているのが当たり前であった時代が過ぎ去り、一部の学者たちを除いて、17世紀、ネワールの一般の僧侶や知識人が梵語の仏典を読む際に相当苦勞するようになってきた時代に、Lalitavistara や Mahāvastu などの権威ある仏伝の内容を噛み砕いて、短く使いやすい anuṣṭubh 韻律（シュローカ）を用いてわかりやすく再話する仕事が望まれた。ルターが宗教改革のために聖書を翻訳したように、それは一種の翻訳に似た作業であって、「新しい釈尊信仰」の土台となる聖典的知識をしっかりネワールの人々に根付かせるために平明な新仏伝が必要と感じられたのであろう⁽³⁴⁾。

34. この17世紀における、仏伝を「平易な梵語で再話する」という努力は無駄にならず、TJAM などの新しい梵語仏伝の製作は、後の時代にネワール語の Lalitavistara が作られるなどの成果を生じるに至る歴史的な流れを作ったと考えられる。ただしネワール語訳の Lalitavistara がどの程度まで TJAM (別名 Padyalalitavistara) に基づいて作られているかは、現時点でまだ研究が無い。吉崎一美によれば、Niṣṭhānanda Vajrācārya が西暦1914年頃 (N.S. 1034) に出版したネワール語訳 Lalitavistara はネワール仏教における印刷本の金字塔であり、ネワール仏教界に新風を吹き込んだ。吉崎一美 (2019): 「ネワール仏教近代化の側面 — 仏典の売買 —」 『印度学佛教学研究』 67-2, p. (158) を参照。このように当時ネパールの九宝法 (Nava[ratna]dharma) の一つと崇められた

このような新時代の要求によって作られた作品である TJAM の第15章には全部で350の偈頌がある。それらの偈頌は基本的には Lalitavistara の第13章のテキストの再話を目的としているのであるが、しかしすべての偈頌が忠実な再話なのではない。それらの350の偈頌は、中身から判断して、Lalitavistara を再話している偈頌と、Lalitavistara と内容が合致していない（つまり忠実に再話していない）独自の内容をもつ偈頌とに分けることが出来る。そこで前者を『再話的内容の偈頌』、後者を『独自内容の偈頌』と表現することにしたい。TJAMという作品は、章の全体の流れを Lalitavistara に対応する『再話的な内容の偈頌』によって構築しながら、しかしあちこちに『独自内容の偈頌』を自由に入れることによって、章全体のボリュームを膨らませていると言えるであろう。

第15章において最も『独自内容の偈頌』がまとまって出てくる箇所として、特に注目したいのが第102～127偈である。その TJAM のパートにおいて釈尊の本生説話（ジャータカ）がいくつも紹介されるが、それらの本生話は Lalitavistara 第13章にある記述と内容が合致しない。その点について、以下に説明をしたい。

Lalitavistara は第13章の第24詩節で、話題を釈尊の前生の出来事に向ける。そして第25～33詩節において九つのジャータカを連続的に語るが、それに対して TJAM も第75～94偈において、それらのジャータカを再話している。ここまでは TJAM は Lalitavistara の説く釈尊の前生話を忠実に再話する努力を続けているといえる。しかしその後になると、Lalitavistara が第13章第38, 40, 42, 44, 46, 53, 54, 55詩節において再び多数の釈尊の前生（菩薩が王として活躍するジャータカ）を説いているにもかかわらず、TJAM はそれらの Lalitavistara の釈尊の前生に対して、ほとんど再話が行っていない⁽³⁵⁾。そのことを次の表で示したい（表1）。

表 1

Lalitavistara 13 章のジャータカ (13章の詩節番号、ジャータカの主人公)	対応する TJAM 15 章の偈頌
25 国土を布施した王	75-76

Lalitavistara という梵語仏典の場合、第1段階：17世紀に難解な梵語のLalitavistara を平易な梵語の作品として再話して TJAM が出来る → 第2段階：20世紀初めの Niṣṭhānanda Vajrācārya 出版本のように梵語をネワール語に訳し再話することでネワール語訳の Lalitavistara が出来る、という2段階があったことが歴史的に確認できる。

35. ここで「再話が行っていない」と言い切れずに、「ほとんど」という言葉を加えたのは、Lalitavistara 13章 38a に出る Śiva 王の名は Śibi 王の名の異伝承と見なすべきなのかどうか、判断出来ないからである。Śibi 王の本生話ならば TJAM 15章の第104偈にある。

26 婆羅門 Svaka	77
27 悪王に四肢を切られた王仙 (= 忍辱仙人本生)	80-81
28 婆羅門の子 Syama (= Śyāma[ka] 本生)	82-83
29 忘恩を赦す鹿王 (= Ruru 鹿本生)	84
30 宝珠を求めて大海の水を汲んだ婆羅門の子	85
31 鳥を庇護し捨身した婆羅門	86-89
32 一樹の葉の数を正しく知る Syama (= Śyāma) 仙人	90-91
33 樹が枯れてもその樹を見捨てなかった鸚鵡	92-94
38a 施をなす Śiva 王 (= Śibi 王本生 ?)	104 (?)
38a 施をなす Śaśiketu 王	
38a 施をなす Sudaṃṣṭra 王 (= Viśvantara 本生)	
38b 施をなす Kṛpakaruṇāmanas 王	
38b 施をなす Maṇicūḍa 王	
38b 施をなす Candrapradīpa 王	
38c 施をなす Dṛḍhasūra 王	
38c 施をなす Sunetra 王	
40 獵師に牙を施した象王 (= 六牙象王)	
42 人の忘恩を忍受した熊	
44 羅刹女の島から人々を救った空飛ぶ馬	
46 王になって人々を梵天界に導いた禅定を好む仙人	
53a 施をなす Adīnapuṇya 王	
53a 施をなす Viśrutaśriya 王	
53b 施をなす Nimindhara 王	
53b 施をなす Nimi 王	
53b 施をなす Kṛṣṇabandhu 王	
53b 施をなす Brahmadaṭṭa 王	
53b 施をなす Keśarin 王	
53c 施をなす Sahasrayajña 王	
53c 施をなす Dharmacintī 王	
53c 施をなす Arcimat 王	
53c 施をなす Dṛḍhadhana (or Dṛḍhadhanu?) 王	
53d 施をなす Sucintitārtha 王	
54a 施をなす Sutasoma 王	
54a 施をなす Dīptavīrya 王	
54a 施をなす Puṇyaraśmi 王	
54b 施をなす Kṛtajña 王	
54c 施をなす Satyavardhana 王仙	
54d 施をなす Subhāṣitagaveśin 王 (= 善説尋求本生)	
54d 施をなす Sūmati 王	
54d 施をなす Sūrata 王	

55a 施をなす Candraprabha 王 (= 月光王本生)	
55a 施をなす Viśeṣagāmin 王	
55a 施をなす Reṇu 王	
55a 施をなす Diśāmpati 王	
55b 施をなす Pradānasūra カーシ国王	
55b 施をなす Ratnacūḍa 王	
55b 施をなす Sāntaga (= Śāntaga) 王	

Lalitavistara 第13章は第38詩節と第53～55詩節では釈尊の前生であった王の名のみを列挙して、それで説明を済ませてしまう語り方をする。第38詩節はたった1詩節の中に8人の釈尊の前生である王たちの名を挙げ、また第53～55詩節ではその3詩節の中に27人の釈尊の前生である王たちの名を列挙する。しかしLalitavistaraの第40, 42, 44, 46詩節はそれぞれ1詩節に1ジャータカを語る語り方をしている。Lalitavistaraのそれらの第38, 40, 42, 44, 46, 53, 54, 55詩節のパートで説かれるジャータカに対して TJAMの作者が再話を行っていないのは、恐らく TJAMの作者はそれらの大半の説話の中身をよく知らなかったために、Lalitavistaraの記述を忠実に追うことを断念せざるを得なかったのであろう。TJAMの作者はここでLalitavistaraのその箇所にある本生話の記述を追うことを諦めた故に、『再話的な内容の偈頌』ではなく『独自内容の偈頌』の語りとしての、自身がよく知る本生話の語りに切り替えたい。TJAMの第102～127偈は明らかにネワール人の作者が、自分の知っている範囲での釈尊の前生物語を自発的に語っている。

第102～127偈のそのパートは、Lalitavistaraの原文を忠実に追うことをやめた TJAMの作者が特に釈尊の本生話について語りたいと意欲したことを付け加えて出来た、オリジナルなパートであるから、そこではネワール人の作者がその聴き手たちに知らせたいと思っていた考えや知識が濃厚に表現されていると思われる。そのような、Lalitavistaraと合致しないオリジナルな創作のパートを検討することによって、私たちは TJAMの作者がもつ知識の範囲を知ることが出来るし、またそれによって TJAMという作品の作者や成立年代を推測する手がかりをも得ることができる。

2. 第15章第102～127偈の検討

以下、『独自内容の偈頌』たる TJAM 第102～127偈の箇所の内容を詳しく検討してみたい。

TJAM 第15章では、結婚して釈迦族の王宮で在家生活を営む王子（釈尊）が、王宮で催される音楽から聞こえてきた不思議な勧発の声によって幾度も出家を促され、その後更に真夜中に訪れたフリーという名の兜率天や他の神々によっても出家を促されるという出来事が語られる。この超自然的な勧発の出来事が、釈尊に出家の 때가 迫ったこと

を知らせて、彼に出城を決意させる一大契機となる。その TJAM 第15章の全体的なソースとなっている Lalitavistara 第13章では、釈尊の生の大きな転機となったこの出家勧発の出来事を語るためにその一つの章をまるごと割いている。Lalitavistara 第13章が、長い複雑な韻律と長い複合語の散文を多用しているのに対して、その第13章を再話する TJAM 第15章では、Lalitavistara の芸術的な種々の韻律の韻文と長大な複合語から成る凝った散文を、何とかうまくシュローカの単純な韻律のみを用いて内容を要約しようと試みながら、比較的平易な梵文で再話を行っている。

出現する勧発の声は、単に出家を勧めるだけでなく、様々に真理や釈尊の前生を語っている。Lalitavistara 第13章の最大の目的は勧発の声が語ったその内容を説き示すことにあり、全部で7回の音曲から発せられた勧発の言葉が主に韻文を用いて語られる。その7回目の勧発の後に、Lalitavistara は今度は出家を決意した王子が自らの威神力により音曲から言葉を出現させて後宮の女たちを教化する出来事を説き、その後、フリーデーヴァという名の兜率天の神が他の神々を伴って夜半に王子のいる高樓にやって来て菩薩に対して勧発の言葉を語る出来事を説く。

しかし7回の勧発の声の出現があって、すでに王子が出家が決意しているというのに、第13章の最後でまたわざわざ兜率天の神がやってきて、更に王子に出家を勧めるというのは変である。Lalitavistara というテキストの新古の層を学問的に検討してみると、その奇妙さが生じた理由がわかる³⁶⁾。もともと Lalitavistara の古い形では Saṃcodanāparivarta という章は無かったのであり、その原形の段階では、7回の勧発の声の出現は説かれず、ただ兜率天の神が菩薩に出家するように勧める、という内容の話だけであつた（普曜経 T3 502a28-c14 にある形の如く）。後の時代になって、その兜率天の神のエピソードの前に位置に7回の勧発の声のテキストが付加されたため、そのテキストの増大をきっかけに Saṃcodanāparivarta という章が新たに成立した。つまりテキストの原形にあった兜率天の神の勧請を後ろに押しやるかたちで、7回の勧発の声が新規に挿入されたために、このような奇妙さが生じたのである。

さて上述のように Lalitavistara 第13章が語る勧発の声の出現は全部で7回あるが、それに対して TJAM 第15章では、王宮で奏でられる音楽からの勧発の声の出現が全部で8回ある構成の仕方をする。両テキストの詩節の対応関係は次の表のとおりである（表2）。

表2

Lalitavistara 第13章の詩節	対応する TJAM 第15章の詩節
-----------------------	-------------------

36. 岡野潔 (1987): 「普曜経の研究 (上) — Lalitavistara における新古の層の区分 —」、東北印度学宗教学会『論集』第14号、98頁を参照のこと。

1 回目の勧発： vv. 1～8	1 回目の勧発： vv. 25～43
2 回目の勧発： vv. 9～20	2 回目の勧発： vv. 57～69
3 回目の勧発： vv. 21～34	3 回目の勧発： vv. 70～98
4 回目の勧発： vv. 35～49	4 回目の勧発： vv. 99～130
	5 回目の勧発： vv. 131～152
5 回目の勧発： vv. 50～67	6 回目の勧発： vv. 153～189
6 回目の勧発： vv. 68～92	7 回目の勧発： vv. 190～230
7 回目の勧発： vv. 93～132	8 回目の勧発： vv. 231～269

この表から見てとることが出来るように、Lalitavistara の 4 回目の勧発（第35～49 詩節）のパートへの対応部分を TJAM は特に大きく膨らませている。Lalitavistara のその 4 回目の勧発の出来事を二つに分割して、TJAM は 4 回目と 5 回目の勧発としているために、結果的に TJAM では勧発は全部で 8 回となった。その後、王子が自らの威神力で音曲から言葉を出現させる出来事が説かれ（TJAM 第291～307偈）、その後にフリーという名の兜率天の神がやってきて、菩薩に対して勧発の言葉を語る出来事が説かれる（第308～343偈）。

TJAM 15章における 8 回の「音曲からの勧発の声」の内容は全体的に Lalitavistara の記述の流れに沿ったものであるが、しかし TJAM の第 4 回目の勧発のパート（第 99～130偈）だけは Lalitavistara を忠実に再話することから大きく外れる。そのパートは前述の、「最も『独自内容の偈頌』がまとまって出てくる箇所」にあたり、学問的に見て大変興味深い内容をもつ。そのパートの内容を分析することによって、私たちは TJAM が疑いなくネパールの或る限られた時代に作られたという決定的な証拠を得ることが出来るのである。

以下、TJAM 15章のその第 4 回目の勧発のパートの内容について分析を行い、そのソースを明らかにしたい。

TJAMのその箇所（第99～130偈）に相当する Lalitavistara 13章の箇所（第35～38詩節）において、複数のジャータカについて言及がなされるのは第37と38詩節である。その 2 つの詩節を外蘭幸一博士の訳で示すと⁽³⁷⁾、次のとおりである：

37. 汝は、今まで那由多もの生において、種々多大なる布施を為せり。
財物や黄金や、宝石や、宝石に飾られた美しき衣服や、

37. 外蘭幸一 (2019)：「和訳『ラリタヴィスタラ（改訂版）』（第13～14章）」、『国際文化学部論集』20巻2号、133-134頁。

- 手や足や、眼や、愛する息子や、繁栄せる王国を、
 汝は捨施したるも、汝には、来乞者に対する悪意も瞋恚もなかりき。
38. 汝は、これまでシヴァ王、シャシケート、スダンシュトラと成り、
 クリパカルナーマナス、マニチューダ、チャンドラプラディーパ、
 ドゥリダスーラ、スネートラ王、かくの如きを初めとして、
 幾那由多もの王が布施への愛好を様々に示現せり、それ汝なりき。

Lalitavistara がこの第38詩節で言及している王の名、すなわち Śiva 王、Śaśiketu 王、Sudaṃṣṭra 王、Kṛpakaruṇāmanas 王、Maṇicūḍa 王、Candrapradīpa 王、Dṛḍhasūra 王、Sunetra 王は、2世紀頃の西北インドではそれらの王の名前だけを挙げるだけでその本生話を思い浮かべることが出来るほどによく知られていたものだったのであろう。しかし TJAM の作者は Lalitavistara のその箇所にある、王の名前しか示さぬジャータカの列挙を見て、ネパールでは知られていないジャータカが (Maṇicūḍa を例外として) そこにかなり多くあるので、再話に際して困ったらしい。そこで、TJAMの作者は自分がよく知らないそれらのジャータカについて、TJAM の第4回目の勧発のパートで忠実に再話することを諦め、その代わりに、ネワール僧の自分がよく知っている釈尊の本生説話を語ることにしたらしい。そのため、TJAM のこの第102～127偈においては、Lalitavistara に内容的に忠実であることをやめて、TJAM の独自内容として、釈尊の前生物語の記述がなされている。その箇所で TJAM は22箇のジャータカを語っている。私はそれらのジャータカについて、パラレルも探して、以下のような表を作ってみた (表3)。

この表3は、全体が3列に区切られる。左の列に TJAM のその箇所で説かれるジャータカの主人公を簡単に記し、中央の列にそのTJAM のジャータカに対して重要なパラレルと思われる Mahajjātakamālā (MJM) の章を記し、右の列には MJM 以外の個々のパラレルを挙げてみた。

表3

TJAM 15 章 (偈番号とジャータカ)	Mahajjātakamālā (左の TJAM の偈に対応する MJM の章)	他の出典 (MJM 以外の並行話で、ネパールで伝承される文献に限る)
102-103 捨身して雌虎と仔らを救った婆羅門	43章 Brāhmaṇajātakāvadāna	AJM 1章 Vyāgrī JMAS 1章 Vyāgrī (= AJM)
104 盲目の婆羅門に自らの眼を施した Śibi 王	44章 Śibirājacakṣuḥpradānāvadāna	AJM 2章 Śibi; JMAS 2章 Śibi (= AJM)
105 夜叉たちに自らの血肉を施した Maitrībala 王	46章 Maitrībālāvadāna	AJM 8章 Maitrībala; JMAS 8章 Maitrībala (= AJM)

106 飢えた婆羅門に身を施すために火に飛び込んだ兔	47章 Śaśajātakāvadāna	AJM 6章 Śaśa; JMAS 6章 Śaśa (= AJM); HJM 4章 Śaśa; BAKL 104章 Śaśaka
107 婆羅門たちに自分の妻と二人の子を施した Viśvantara 王子		AJM 9章 Viśvantara; JMAS 9章 Viśvantara (= AJM); BAKL 23章 Viśvantara
108 飢えた生類のために自らソーマ（巨大な虫の名）と なって自分の血肉を布施した 神々の王	8章 Soma	GJM Śvan; JMAS 43章 Śvan (= GJM);
109 飢えた女に食べさせるため自分の両乳房を切った美女 Rūpyāvatī		HJM 6章 Rūpyāvatī; BJAM 4章 Rūpyāvatī (= HJM); JMAS 47章 Rūpyāvatī (= HJM); DA 32章 Rūp[y]āvatī; BAKL 51章 Rukmāvatī
110 尊師の癰を治すため自分の腿の血肉を施した Jñānavatī 王女		GJM Jñānavatī; JMAS 38章 Jñānavatī (= GJM; cf. Ms. E8604 no.4); Samādhirājasūtra 34章 Jñānavatī-parivarta
111 自分の血肉・息子・妻と如意宝珠から生じた物を与えた Mañicūḍa 王	49章 Śrīmanmahāsattva-mañicūḍarājabodhisattvāvadāna	Mañicūḍāvadāna ⁽³⁸⁾ ; BAKL 3章 Mañicūḍa; Svayaṃbhūpurāṇa (Paris Ms.) 4章 Mañicūḍakathā; Kapīśāvadāna 17章
112 逃げてきた鳩の身代わりに我が身を布施した Sarvaṃdada 王	45章 Sarvaṃdadābhīdhāna-mahārājāvadāna	GJM Sarvaṃdada; JMAS 37章 Sarvaṃdada (= GJM; cf. Ms. E8604 no.3); ASS 3章 Sarvaṃdada
113 飢えた人々に自分の血肉を布施した象王		AJM 30章 Hastin; JMAS 30章 Hastin (= AJM); BAKL 96章 Hastin

38. Cf. R. Handurukande (1967): *Mañicūḍāvadāna being a Translation and Edition and Lokānanda, a Transliteration and Synopsis*, <Sacred Books of the Buddhists, Vol.XXIV>, London.; R. Handurukande (1976): "The Mañicūḍa Study", 『仏教研究』第5号、293-285頁; R. Handurukande (1987): "The Leningrad Manuscript of the Mañicūḍāvadāna", *The Sri Lanka Journal of the Humanities*, Vol.X, No.1 & 2, 1984 (published in 1987), pp. 39-45.

114 象の御者の教示により、 菩提の誓願を得た Suprabhāsa 王 (= Prabhāsa 王)	7章 Suprabhāsa	HJM 1章 Prabhāsa; GJM Suprabhāsa; JMAS 0.3章 Suprabhāsa (= GJM; cf. Ms. E8604 no.9); BAKL 1章 Prabhāsa; BAKL 100章 Puṇyaprabhāsa
115 あらゆる人々を正法に導 いた婆羅門 Samudrareṇu	10章 Araṇemino [...]vyākaraṇa; 31章 Samudra[...]vyākaraṇa; 32章 Samudra[...]parivarta; 33章 Bhagavatsamudrareṇu[...] janmāvadāna	KP (ed. Yamada), pp. 52-347.
116-117 自身の皮・肉・両眼を 与えた caṇḍāla の Puṇyabala 王	34章 Puṇyabalāvadāna	KP (ed. Yamada), pp. 348-352.
118 乞う者たちに舌と両耳を 与えた Dharmākara 王	35章 Dharmākaraavadāna	KP (ed. Yamada), p. 353.
119 生類に全身のあらゆる部 分を与え続けた Durdhana 王	36章 Durdhanākhyā- cakravartinrājāvadāna	KP (ed. Yamada), pp. 355-367.
120 海で商人たちを救った Pradīpapadyota 王仙	37章 Pradīpapadyota- cakravartinrājāvadāna	KP (ed. Yamada), pp. 368-371.
121 人々の上に財を雨降らし た Susiddhārthamati 商主	38章 Susiddhārthamati- sārthavāhāvadāna	KP (ed. Yamada), pp. 371-372.
122 あらゆる災害を鎮めた Sūryamālagandha 仙人	39章 Sūryamālagandhākhyā- brahmarṣijātakāvadāna	KP (ed. Yamada), pp. 372-376.
123-124 所有物と自らの肢体の 一切を布施した Ambara 王	40章 Ambaracakravartī- sarvaṃdadāvadāna	KP (ed. Yamada), pp. 377-382.
125 七度も地上に伏蔵を出現 させた龍	41章 Nāgarājāvadāna	KP (ed. Yamada), pp. 382-383.
126-127 自分の頭を布施した Candraprabha 王	48章 Candraprabharājāvadāna	HJM 5章 Candraprabha; JMAS 46章 Candraprabha (= HJM; cf. Ms. E8604, no.13); DA 22章 Candraprabha; BAKL 5章 Candraprabha

この表3を見ると、TJAM 第15章のこのパート（第102～127偈）は、MJM と JMAS (= Jātakamālāvadānasūtra) と KP (= Karuṇāpuṇḍarīka) の3作品が最も重要なパラレルらしく思える。しかしKPがパラレルとしてある箇所には常に同時に MJM がパラレルとしてあることに注意したい。つまり KP がソースでなくても MJM がソースとしてあれば、その箇所を説明できる。もし TJAM 15章が KP を直接のソースとして利用したならば、その KP を利用した箇所が、MJM が KP を利用した箇所だけに限られているという、奇妙な現象が起こるはずがない。それ故、ここでは KP は TJAM 15章に直接的に利用され

たパラレルではないと判断できる。その判断から、MJMを残して、KPをこの表3のパラレルから省いてしまうことが可能である。

また TJAM のこのパートのパラレルを考察すると、MJM のほかに JMAS が TJAM 15 章の重要な参考資料になっていると推測できる。そのことはこの表3からすぐに読み取ることが出来ないが、表3の「他の出典」の欄に挙げた複数のパラレル文献をよく眺めてみると、そのことが見えてくる。表3の「他の出典」の欄にある、略号 AJM と HJM と GJM はそれぞれ Āryaśūra と Haribhātṭa と Gopadatta の Jātakamālā を意味するが、TJAM 15章でそれら三つの Jātakamālā がパラレルになっている箇所は、それぞれの Jātakamālā の写本が直接のソースとして利用されたと考えるよりも、むしろそれらの Jātakamālā のネパール伝承の諸章のテキストを一本の写本としてまとめた JMAS の写本がソースとして利用されたと考えるべきであろう。JMAS という作品は、Hahn が明らかにしたように、AJM と HJM と GJM の3種の Jātakamālā の諸章を繋ぎ合わせたという性質を持っているから³⁹⁾、TJAM 15章が3種の Jātakamālā の写本を直接利用しなくても、JMAS を見ていれば、TJAM 15章にある様な記述が可能になるし、しかも AJM と HJM と GJM の本生話を数話ずつ採って混ぜている TJAM のこの箇所の本生話の利用の

39. JMAS は全部で56章から成り、しかも第1章の内部には更に別の三つの章が付加されているので、合計で59章を有する、大きな作品である。JMAS はその第44章から第56章にかけて BJAM の全部の章をそのままの順序で載録している。つまり JMAS は BJAM をソースとして利用したと見てよい。BJAM は13の章から成り、HJM に属する10の章（第2, 4, 5, 6, 11, 19, 20, 22, 12, 32章）の後に HJM 以外の三つの章（Maitrakanyaka, Śākyasiṃha, Karmaṣṭotikāsūtra）が続く構成をもつ写本である。また JMAS はその第1章から第34章にかけて AJM の34の章の全部をそのまま載録している。つまり JMAS というインドの jātakamālā 文学の諸章の集成たる作品は、三つのパートから成ると見なすことが出来る。その第1のパート（第1～34章）に AJM の34の章をすべて収め、また第3のパート（第44～56章）には BJAM にあった合計13の章をすべて収めている。そしてその両パートの間にある第2のパート（第35～43章）には、Hahn によって GJM に帰せられる九つの章がある。全体的にはそのような構成であるが、JMAS の第1章において AJM 第1章のテキストが始まる前に置かれている別の三つの章（第0.1章、0.2章、0.3章）の内容を見ると、その第1章の内部にある第3の章（第0.3章）には GJM に属するらしい Suprabhāsa の章が収められている。また第54章の Maitrakanyaka も（元々 BJAM の中にあった章であるが）、HJM に属する章ではないので、文体から判断して Hahn は GJM に属すると推測する。以上から、JMAS の中に存在する GJM の章は合計11あることになる。このように、JMAS は当時のカトウマンドウ盆地に現存した jātakamālā（AJM と HJM と GJM）の諸章 jātakamālā のテキストを集め、1写本として一括して保存することを目的にして成立した作品と見なすことが出来る。なお JMAS の写本は3写本が現存し、龍大と National Archives と東大に1本ずつある（Sanada 608; BSP tr241 (1-258); Matsunami 139）。その3写本のうち、最も価値が高いのは龍大写本（西暦 1690年 = NS.810; Newarī）であり、National Archives の写本（西暦 1850年 = NS. 1015年; Devanāgarī）がそれに次いで良い。最も新しい東大写本（西暦 1850年 = NS. 1913年; Devanāgarī）は誤写が多い。

仕方は、そのソースに JMAS を使っていることを大いに臭わせる。それ故 JMAS だけを残して、AJM と HJM と GJM をこの表 3 のパラレルから省いてしまうことが可能である。また、もし TJAM の作者がそのように JMAS をソースに使っていると想定するならば、「他の出典」の欄にある、略号 BAKL と DA と ASS、すなわち Bodhisattvāvadānakalpalatā と Divyāvadāna と Avadānasārasamuccaya の 3 作品も使う必要がなくなり、表にある「他の出典」の欄のパラレルから省いてしまうことが可能になる。

つまりこの表 3 から次の推察にたどり着く。TJAM 第 15 章のこの本生活のパートを作るために、MJM と JMAS があれば十分である。つまり MJM と JMAS がソースになっていると考えれば、全部の出典がきれいに、シンプルに説明できる。そこで表 3 から MJM と JMAS の二つ以外の出典を省いて作ったのが、次の表である（表 4）。

表 4

TJAM 15 章	Mahajjātakamālā	JMAS
102-103偈	43章 Brāhmaṇajātakāvadāna	JMAS 1章 Vyāgrī (= AJM 1章)
104偈	44章 Śībirājacakṣuḥpradānāvadāna	JMAS 2章 Śībi (= AJM 2章)
105偈	46章 Maitrībālāvadāna	JMAS 8章 Maitrībala (= AJM 8章)
106偈	47章 Śaśajātakāvadāna	JMAS 6章 Śaśa (= AJM 6章)
107偈		JMAS 9章 Viśvantara (= AJM 9章);
108偈	8章 Soma	JMAS 43章 Śvan (= GJM);
109偈		JMAS 47章 Rūpyāvatī (= HJM 6章)
110偈		JMAS 38章 Jñānavatī (= GJM)
111偈	49章 Śrīmanmahāsattvamaṇicūḍa-rājabodhisattvāvadāna	
112偈	45章 Sarvaṃdadābhīdhānamahārājāvadāna	JMAS 37章 Sarvaṃdada (= GJM)
113偈		JMAS 30章 Hastin (= AJM 30章)
114偈	7章 Suprabhāsa	JMAS 0.3章 Suprabhāsa (= GJM)
115偈	10章 Araṇemino [...]vyākaraṇa; 31章 Samudrareṇu[...]vyākaraṇa; 32章 Samudrareṇu[...]parivarta; 33章 Bhagavatsamudrareṇubrāhma- ṇajanmāvadāna	
116-117偈	34章 Puṇyabalāvadāna	
118偈	35章 Dharmākarāvadāna	
119偈	36章 Durdhanākhyacakravarti-rājāvadāna	
120偈	37章 Pradīpapradīyotacakravarti-nṛpāvadāna	

121偈	38章 Susiddhārthamati-sārthavāhavadāna	
122偈	39章 Sūryamālagandhākhyabrahma-rṣijātakāvadāna	
123-124偈	40章 Ambaracakravartīsarvaṃdadā-vadāna	
125偈	41章 Nāgarājāvadāna	
126-127偈	48章 Candraprabharājāvadāna	JMAS 46章 Candraprabha (= HJM 5章)

上の表 4 を文章のかたちで説明すると、以下のように TJAM のそのパート（第15章 102～127偈）の各偈の本生活のソースを推測することが出来る：

102-103偈は MJM 43 か JMAS 1 を利用した。（ただし MJM 43 < JMAS 1 という関係、つまりそもそも MJM 43 は JMAS 1 を利用して作られた章らしいという、その派生関係にも注意する必要がある。）

104偈は MJM 44 か JMAS 2 を利用（ただし MJM 44 < JMAS 2）。

105偈は MJM 46 か JMAS 8 を利用（ただし MJM 46 < JMAS 8）。

106偈は MJM 47 か JMAS 6 を利用（ただし MJM 47 < JMAS 6）。

107偈は JMAS 9 を利用。

108偈は MJM 8 か JMAS 43 を利用（ただし MJM 8 < JMAS 43）。

109偈は JMAS 47 を利用。 110偈は JMAS 38 を利用。

111偈は MJM 49 を利用。

112偈は MJM 45 か JMAS 37 を利用（ただし MJM 45 < JMAS 37）。

113偈は JMAS 30 を利用。

114偈は MJM 7 か JMAS 0.3 を利用（ただし MJM 7 < JMAS 0.3）。

115偈は MJM 10, 31, 32, 33 を利用。 116-117偈は MJM 34 を利用。

118偈は MJM 35 を利用。 119偈は MJM 36 を利用。

120偈は MJM 37 を利用。 121偈は MJM 38 を利用。

122偈は MJM 39 を利用。 123-124偈は MJM 40 を利用。

125偈は MJM 41 を利用。

126-127偈は MJM 48 か JMAS 46 を利用（ただし MJM 48 < JMAS 46）。

以上、TJAM 第15章のこのパートは MJM と JMAS の二つのソースさえあれば、第102偈～126偈のすべての作成が可能であることを示した。可能であり、しかもそれが最も

現実的であると考えられる。そのため、MJM と JMAS 以外のパラレルはとりあえず無視してよいわけである⁽⁴⁰⁾。

この第102～127偈のパートの作成にあたって、TJAM の作者は Lalitavistara には無いこれらのジャータカの記述を作らないで済ますことも出来たはずである。それなのに、わざわざ作者がこれらのジャータカの記述に取りかかろうと自発的に決意し、このパートを作ったということは、その作者にとって、それらのジャータカはいちいち写本を見て調べなくても既に頭に入っており、容易にこれらのジャータカに関する偈を作ることが出来たからであろう。特に MJM という作品は11,000偈から成る巨大な作品であって、わずか25の偈（第102～127偈）を作るためにわざわざその巨大な作品を通読したというのは現実的ではない。つまり、現実的には TJAM の作者は、もし彼が MJM を過去に数年かかって通読した経験をもつ学者か、MJM を理解しながら筆写した者か⁽⁴¹⁾、MJM を自ら作成した者でなかったとしたら、苦勞してこの25箇の偈を作ろうと

40. 以上の TJAM 15章のソースに関する私の本文での説明について、一つ釈明しておきたい事がある。私はここで JMAS という作品名を挙げる時に、Hahn (2011) が報告した新発見の写本 E8604 については触れないで来た。JMAS を扱う際に、E8604 という古い version の JMAS についても触れると、JMAS に関する説明が細かく複雑になることを恐れたためである。Hahn (2011) が指摘しているように、MJM が作られる時にソースとして利用されたのは、実は1690年筆写の JMAS の最古の写本（龍大 Sanada 608）に代表される version の JMAS ではなく、E8604 の version の JMAS のほうであったと推測すべきであろう。しかし E8604 の写本から知られる version の形（恐らく古い version の JMAS）は現時点で部分的にのみしか判明していない。Hahn に確認されたその写本は筆写年代が不明で、63葉あるが、本来約680葉から成っていたと推測されるその作品の1割弱にあたる葉しか現存していない。その写本から知りうることの多くは推測に留まることもあり、ここでは説明の便宜上、JMAS の両方の version の違いをいちいち区別せずに JMAS として扱った。大まかにその新古両方の version を JMAS と呼ぶならば、今回の TJAM 第15章の釈尊の前生活の分析により、TJAM の作者（グループ）が JMAS を知っていた可能性は高く、Jayamuni の活動年代中にすでに JMAS は存在していた、といえよう。

41. 「MJM を理解しながら筆写した者」とは、まず Jayamuni が考えられるであろう。彼は MJM の最古の写本を筆写した人物である。MJM は Jayamuni が筆写した BJAM の写本を利用して作られているから、MJM は彼の活動期間と重なる17世紀中頃に作られた作品であることがわかる。それ故、彼は MJM の作成に密接に関わっていた可能性がある。TJAM の作者が MJM の内容を熟知しているということと、Jayamuni が MJM と TJAM の両作品の archetype 写本を作った人物であるということは、TJAM の作者が実は Jayamuni 自身か、それとも Jayamuni 配下の製作グループではないか、という憶測に結びつく。Jayamuni が筆写ばかりでなくそれらの avadānamālā 作品の製作に絡んでいるのではないかという推測は、以前にも私が岡野 (2019: 12-13) や岡野 (2020: 147) に記したことであるが、今回の TJAM 第15章第102～127偈のジャータカの内容分析の結果は、その仮説を支持する一つの力強い根拠を与えるものと言える。

は思わなかったに違いない。TJAM の作者の手元には同時代に作られていた作品 MJM と JMAS の 2 写本くらいはあったであろうが、それらを見なくても作者は既にそれらのジャータカを熟知していたので、自発的にこのパートを作ろうと思ったのではない。そこで私は推測をもう一步進めて、「MJM の作者が、MJM の完成の後に、MJM の製作でも利用した JMAS と MJM をソースとして利用しながら、TJAM を作った」と考えてみるべきであると思う。

3. 第15章の写本について

TJAM の写本を校訂する時は、基本的に Michael Hahn が Mahajjātakamālā の梵文テキストの校訂において示したやり方と同じやり方を取るのがよいと思う。TJAM と同様に、Mahajjātakamālā の場合も 1 本の Jayamuni 筆写の紙写本が幸運にも存在し、その写本は他の Mahajjātakamālā の紙写本と比べて格段に優良な写本であるため、Hahn はその Jayamuni 写本を底本に用いて、他の諸写本はその Jayamuni 写本を読むために補佐的に用いた。つまり Jayamuni 写本以外の派生的諸写本は補佐的な役割を果たせばよく、それら他の諸写本に見出される異読についてはいちいちその全部の異読を報告する必要はない。Jayamuni 写本の読みに疑問が生じた箇所だけに絞って、他の派生的諸写本の異読を報告するだけでよい。Jayamuni 写本以外の紙写本は誤りが多いので、それらの誤りを几帳面に全部記録して報告することは、徒に異読情報を繁雑にするだけで、校訂という目的の上ではあまり意味があることではない。TJAM と Mahajjātakamālā はどちらも Jayamuni の生存中に、Jayamuni の近くで作られた作品であるから、Jayamuni 写本よりも古い写本は存在しない可能性が極めて高い。そのため上記の方法で校訂するのがよい。

ただし TJAM の写本の場合、扱う際に注意すべき点がある。現存するその TJAM の Jayamuni 写本は細かく見れば、すべての紙葉が Jayamuni が筆写した葉ではなく、Jayamuni が筆写した紙葉と Jayamuni 以外の 2 人の人物が筆写した紙葉を明確に区別することが出来る。Jayamuni 以外の人物が筆写した紙葉を校訂する場合は、必ずそこに相当数の筆写の誤りが見出されるので、Jayamuni が書いた紙葉のように安心して校訂を進めるのが難しくなり、積極的に他の紙写本を参照することが必要になる。

TJAM の Jayamuni 写本は、その前半部分は Jayamuni が筆写した諸章が大多数を占めるが、写本の後半部分になると、Jayamuni 以外の人物が筆写した章ばかりになる。なぜ写本がそのような状態になっているのかを考えると、これは私の推測であるが、その Jayamuni 写本は、元々 Jayamuni が全部の章のテキストを写した写本であったが、後に写本の後半部分を中心にあちこちひどく紙面が傷むか汚れてしまった出来事があったと考えられる。そこで写本の救済策として、そのダメージを受けて読みづらくなった箇所

だけを別の人物が読んで新しく筆写し直し、その差し替えた紙葉を代わりに入れて、ダメージを受けた古い紙葉を捨ててしまったという事情が考えられる。

さて興味深いことに今回私が扱う TJAM 第15章には、Jayamuni が筆写した第15章の全テキストの紙葉（93～103葉）と、Jayamuni 以外の人物が筆写した第15章のほぼ全テキスト（章の冒頭の第1～9c偈以外の全テキスト）をもつ紙葉（*94～*103葉）の、その両方が同一写本の中に存在している。恐らく初め Jayamuni が第15章を筆写したが、その後、別の人物—— Jayamuni よりかなり後代の人であろう——が何らかの理由により第15章（の9d～350偈つまり94葉～103葉にあたるテキスト）を写し直して、その第15章のコピーをわざわざ Jayamuni 写本の中に挟み込んだため、同じ写本の中に第15章のテキストが二つある状態になったようである。Jayamuni が筆写した第15章は、後に別の人物が筆写した第15章のテキストと比較して、やはり格段に誤りが少ない。二つの第15章のテキストを比べて見ると、別の人物が書いたテキストに特に増広は見られない。普通、章の全体を書き直すという作業が行われた場合は、テキストの内容に不満があってあちこちに追加の文を加えようとして、その章の全体を書き直す場合もあるであろうが、しかし第15章について Jayamuni が書いた古いテキストと別人の書いた新しいテキストを見比べてみると、特に内容的に書き改めようとした形跡は無い。すると、第15章の差し替えが作られた理由は内容を増広することが目的ではなく、汚損などの外的な理由によるものであったとしか考えられない。

TJAM 第15章はこのように同じテキストが同じ写本中に二つ存在するため、今回の私の校訂においては、その Jayamuni が筆写した第15章の紙葉（私は A と記す）を底本に用いて校訂を進めた。別の人物が書いて挟み込んだもう一つの第15章テキストの紙葉（A2 と記す）や、また他の TJAM の若い諸写本（Jayamuni 写本後の派生的な 2 写本 B, D）は、その Jayamuni が筆写した第15章を読むための補佐として私は用いた。

ではどうして、第15章において Jayamuni が書いた紙葉（A）と、その差し替え用に別の人物が書いた紙葉（A2）との同じテキストが、同一写本中に存在するのだろうか。恐らくそのことは次の第16章が別の人が書いた第16章の紙葉にそっくり差し替えられていることと無関係ではないと思われる。現在の Jayamuni 写本の TJAM 第16章は、元の Jayamuni が書いた葉はほとんど捨てられて無くなり、ただし Jayamuni が書いたその第16章の冒頭の1葉だけは捨てられずに残っている。写本の第16章のところにひどい汚損が生じたため、その章を差し替える必要が生じたのであろう。その第16章の差し替えをなした筆写人の筆跡は、第15章の差し替えの筆跡と同じである。ではなぜその人は第16章だけでなく、ダメージが少ない第15章についてもわざわざ差し替え用の紙葉を作ったのだろうか。これは私の想像であるが、その差し替えの筆写を行った筆写人は、その

15章の箇所では紙葉がまるごと欠落していると考えて、わざわざ他の TJAM の写本を探して⁽⁴²⁾、その派生的な写本に基づき、第15章の 9d の箇所から差し替え用の新しい紙葉 (A2) を作る作業を行ったが、恐らくその後、紛失したと思っていた15章の古い紙葉 (A) が出て来たため、自分は第15章の書き直しをする必要がなかったことに気づいたのではないかと。しかしせっかく自分が差し替え用に書いた第15章のほぼ全体の紙葉 (A2, *94~103葉) を捨てるに忍びず、その人は Jayamuni が書いた第15章の紙葉 (A, 94~103葉) の前の位置に自分が書いた第15章の新しい紙葉 (A2) を差し込んだのではないかと。

このようにその筆写人は第15章については何らかの事情で Jayamuni が書いた古い紙葉と自分が書いた差し替え用の紙葉の両方を残したが、次の第16章については基本的に全部の葉の差し替えを行い、Jayamuni が書いた古い第16章の紙葉を、その章が始まる箇所の一葉以外、捨ててしまった。Jayamuni が書いたその第16章の所は、捨ててかまわないと思うほどに汚れか傷みが激しいと判断されたのではないかと。第16章はこうして全体的に新しい紙に差し替えられているが、その章の冒頭の古い 1 葉 (第104葉) を見てみると、その葉の裏側はひどく汚れていて読みにくいことに気づく。その古い第104葉裏面に見られる紙面の汚れ・黒ずみの原因は何であったかは、写本の現物を見てみないとわからないが、そのような種類の汚れが TJAM の Jayamuni が筆写した紙葉のあちこちに見られる。その汚れが、特に Jayamuni の TJAM 写本の後半部分において、後の時代に大規模な差し替えが必要になった原因ではないだろうか。第16章はそうして別の筆写人によって書かれた紙によって第16章の全体が交換されたが、しかし次の第17章は、差し替えを免れており、Jayamuni が書いた古い葉のままである。

42. 私がこのように想像するのは、15章の差し替え用のテキスト (A2) すなわち*94~*103葉には、Jayamuni 写本 (A) を直接見ながら書いたならば到底起こりえないような誤った読みがあちこちに存在するからである。例えば15章 173a や 249c の箇所の如く。また A2, B, D の 3 写本には同じ箇所でも、共通したテキストの欠落が見られることも、A2 が後の時代の或る派生的な写本を利用して15章を写した証拠となる。つまり15章 83d から85c までのテキストや、また 183, 184 の2つの偈、また 296 偈の一部のテキストは、それら 3 写本において共通して欠落しているのが確認される。それ故、それらの欠落を共有するそれらの 3 写本は、一つの family と見なしうる。更に、その 3 写本の間の関係を考察してみると、例えば A2 の写本では15章 179cd, 180ab のテキストと 190, 191ab のテキストが欠けているが、その同じテキストは B, D の 2 写本のほうには存在するので、A2 から B, D が派生したことはありえない。これらのことを考えると、少なくともこの15章においては、A2 は A から直接写されたものではなく、後の時代の、B, D と共通の親をもつ別の写本から写された可能性が高いといえる。

Jayamuni 写本 TJAM は全体的に、三人の筆写人によって書かれている。略号として Jayamuni を「X」、他の二人の筆写人をそれぞれ「Y」「Z」と記するなら、写本全体は次の様に X と Y と Z の書いた葉を区別できる⁽⁴³⁾：まず **1葉～62葉**は X の筆写。次の **63葉～77葉**（第9章の続きから第12章にあたる）は Y が筆写した新しい差し替えの紙葉であり、本来そこにあったはずの X が筆写した63～77葉は無い。次の**78葉～93葉**は X の筆写。93葉で第14章が終わり、第15章の冒頭（15章1～9c）が記される。次に第15章の大部分として Y が差し替え用に筆写した新しい***94葉～*103葉**が挿入されており⁽⁴⁴⁾、その後に X が筆写した本来の第15章の**94葉～104葉**がある。その94葉は第15章の途中（15章9d）から始まり、104葉は第16章の冒頭（16章1～9a）も含む。第16章には Y が差し替え用に筆写した***104葉と105葉～107葉**があり、本来そこにあったはずの第16章の X の古い葉たる105葉～107葉は失われた。次の第17章の**108葉～148葉**は X の筆写である。その108葉の冒頭には第16章の最後の文（16章123, 124）も記される。**149葉～151葉**は第三の筆写人である Z が書いた新しい葉である（それで第21章が終わる）。その後の**152葉と*152葉**（同じ葉番号が重複するが文は異なる）の2枚は Y の筆写であり、**153葉～165葉**は X の筆写である。続く**166葉**の1枚は Y の筆写であり、その後**167葉～185葉**は X の筆写である。X の筆写した葉はここまでで、それ以降の**186葉～303葉**はすべて Y の筆写である⁽⁴⁵⁾。このように、185葉までの前半部分は Jayamuni (= X) が書いた葉が多いが、186葉以降の後半部分はすべて第二の筆写人 Y が書いた葉となる。X が書いた紙は古く、Y と Z の書いた紙はすべて新しい。Z が関与した箇所はごくわずかで、TJAM の大部分は X と Y が書いた葉で占められる。TJAM の15章のみは、X と Y の両者が書いた葉が94葉～104葉において無駄に重なってしまっているが、それ以外の章では Y が差し替え用の葉を作った時に X の古い葉が捨てられたと見られる。

表にまとめてみると次のようになる（表5）。

43. 私は先の論文、岡野 (2013)、324頁の注4で次の様に記した：「X が筆写した所は A 写本の 1a-62b, 78a-104b, **94a-107b**, 108a-148b, 153a-165b, 167a-185b である。Y が筆写した所は A 写本の 63a-77b, *94a-*104b, 105a-107b, 152a-152(sic!)b, 166a-b, 186a-303b である。Z が筆写した所は A 写本の 149a-151b である。」この文の黒字の箇所、「**94a-107b**,」を削除し、「X が筆写した所は A 写本の 1a-62b, 78a-104b, 108a-148b, 153a-165b, 167a-185b である」と文を修正したい。

44. 数字の前にアステリスク (*) が付けられた葉番号の数字は、古い紙と差し替え用の新しい紙の間で同じ葉番号の重複があることを示す。

45. 筆写人 Y が書いた303葉の最後のコロフォンには *śrīlālitavistare sugatajanmāvadānamālāyām* [...] と記され、作品名が *śrīlālitavistara, sugatajanmāvadānamālā* となっているが、Jayamuni (= X) が第1章から第3章までの章末に書いた作品名 *Tathāgatajanmāvadānamālā* や、第5章の章末に書いた作品名 *Buddhajanmāvadāna* と違っている。

表 5

筆写人 X (古い紙)	筆写人 Y / Z (新しい紙)	葉	章
X		1葉～62葉	1章～9章 (途中)
	Y	63葉～77葉	9章 (途中) ～12章
X		78葉～93葉	13章～15章 (冒頭)
	Y	*94葉～*103葉	15章 (途中)
X		94葉～104葉	15章 (途中) ～16章 (冒頭)
	Y	*104葉, 105葉～107葉	15章 (末尾) ～16章 (途中)
X		108葉～148葉	16章 (末尾) ～21章 (途中)
	Z	149葉～151葉	21章 (末尾)
	Y	152葉, *152葉	22章 (冒頭)
X		153葉～165葉	22章 (途中) ～23章 (冒頭)
	Y	166葉	23章 (途中)
X		167葉～185葉	23章 (途中) ～26章 (冒頭)
	Y	186葉～303葉	26章 (途中) ～37章

TJAM の Jayamuni 写本の最後のコロフォンは、Y によって書かれている。そこに saṃvat 104 と記してあり、これをネパール暦 1004年と解すると、西暦1889年にあたる。この年号は、Y によって Jayamuni 写本の補修としての大規模な差し替えが行われた年号を示すと思われる。すると Y による写本の差し替えは Jayamuni より200年弱の時が経った頃に行われたことになる。

4. 第15章の校訂テキスト

略号 A = a ms. of TJAM, NGMPP A 123/5. (The chapter 15: 93b～104a, written by the scribe X)

A2 = *94～*103 of A (additional new folios to A 93b～104a, written by the scribe Y)

B = a ms. of TJAM, NGMPP B100/2

D = a ms. of TJAM, NGMPP D43/4-44/1 (rephoto = E1321/2)

JMAS = Jātakamālāvadānasūtra

H = HOKAZONO's Lalitavistara edition, 1994

L = LEFMANN's Lalitavistara edition, 1902

MJM = Mahājātakamālā

TJAM = Tathāgatajanmāvadānamālā (= Padya-Lalitavistara)

Tathāgatajanmāvadānamālā 第15章
後宮の歡樂の中にある菩薩への出離の勸発という品

以下に TJAM 第15章の校定梵文テキストを挙げ、続いてその全訳を挙げたい。

以下のテキスト中の [] の数字は A 写本の葉を示し、例えば [94b] は A の第20葉の裏面であることを示す。またテキスト中で Lalitavistara と密接に関係する箇所では、その詩節の右側に ≈ という「類似」を意味する記号を使って、Lefmann（略号 L）と外蘭幸一（略号 H）⁽⁴⁶⁾の両方の Lalitavistara 出版本の参照すべき箇所を示した。

15 Antaḥpurābhiratibodhisattvaṇiṣkramaṇasaṃcodanāparivarta

[93b4] atha so 'rhan mahābhijña upagupto yatih sudhīḥ /
aśokaṃ taṃ samāmantrya punar evaṃ samādiśat // 1
tataḥ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvo jagaddhite /
saṃvṛtidharmam ādhāya samācaritum aicchata // 2
tataḥ so 'ntaḥpure sthitvā saṃvṛtidharmasādhane /
caturaśītisāhasrakāntābhir anvito 'ramat // 3
tāsāṃ strīṇāṃ pradhānā sā gopā kāntā yaśodharā /
maḥiṣī sarvārthasiddhasya kumārasya priyā satī // 4
tayā sārddhaṃ yathākāmaṃ bhuktvā saukhyaṃ pramoditaḥ /
saṃvṛttidharmasaṃrakto ramamāṇaḥ samācarat // 5
tatraivaṃ ramamāṇasya saṃvṛttidharmasādhinaḥ /
tasya sarvārthasiddhasya kuladharmānucāriṇaḥ // 6
brahmaśakrādayo devāḥ sarve lokādhipā api /
dānavā garuḍā nāgā yakṣagandharvakinnarāḥ // 7 ≈ L 159.20-160.1; H 600.4-5.
sahāpsarogaṇaiḥ siddhāḥ sādhyavidyādhārā api /
pūjākarmasamautsukyasaṃpannāḥ pracerire // 8 ≈ L 160.1-2; H 600.5-6.

46. TJAM 第15章の校訂にあたって外蘭幸一博士の Lalitavistara 校訂テキストと正確な和訳に大いに助けられた。対応する Lalitavistara の第13章は芸術的な韻文が連続する難しい章であり、もしこの新校定本が先に出版されていなかったら、TJAM を読むのに難渋したに違いない。

tatra sarve 'pi te lokā brahmaśakrādayaḥ surāḥ /
 āgamyā taṃ mahāsattvaṃ [94a] samabhyarcya mudācaran // 9
 tatas te lokapālās taṃ kāntānurāgabandhitam /
 kāmabhogābhisamśaktam samīkṣyaivaṃ vyacintayan // 10
 batāyaṃ śrīśukhāsakto bodhisattvo yathepsitam /
 sukhaṃ bhuktvā ramann antaḥpure ciraṃ vilambate // 11 ≈ L 160.4-5; H 600.8-9.
 ye cānena purā lokāś catuḥsaṃgrahavastubhiḥ /
 bodhayitvā prayatnena saddharmasaṃniyojitāḥ // 12 ≈ L 160.5-7; H 600.9-11.
 tasya saṃbodhiprāptasya saddharmadīśato mudā /
 śrutvā śraddhābhisampannāś carīṣyanti prabodhitāḥ // 13
 te dharmabhājanāḥ sarve mā haivāntarhitā bhava /
 paścād ayaṃ mahāsattvo niṣkramya pravrajan vane // 14 ≈ L 160.8-9; H 600.12-14.
 tapo 'tiduṣkaraṃ taptvā jītvā sarvāṃś ca tāpasān /
 arthan mārān vinirjitya sambodhim abhibhotsyate // 15 ≈ L 160.9; H 600.13-14.
 iti saṃcintamāṇās te sarve lokādhipā api /
 kṛtāñjalipuṭā natvā taṃ vīkṣya samupasthitāḥ // 16 ≈ L 160.10-11; H 600.15-16.
 yad ayaṃ pariśuddhātmā tyaktvā rājyaparigrahān /
 pravrajitvā tapas taptvā jītvā sarvāṃś tapasvinaḥ // 17 ≈ L 160.11-13; H 600.16-18.
 bodhivīkṣatalāsīno jītvā mārāgaṇān api /
 arhan sambodhim āśādy saṃbuddho bhagavān jinaḥ // 18 ≈ L 160.13-14; H 600.18-19.
 daśabalo mahābhijño vaiśāradyaguṇānvitaḥ /
 sarvaiś cāveṇikair dharmaiḥ samanvito muniśvaraḥ // 19 ≈ L 160.14-15; H 600.19-21.
 bhagavāṃś trijagacchāstā dharmacakraṃ pravartayan /
 yathābhimuktisaddharme sarvāṃl lokān niyojayet // 20 ≈ L 160.15-16; H 600.21-22.
 tat kadā vāyam ālokya śrutvā cāsyā subhāṣitam /
 pītvā dharmāmṛtaṃ cāpi labhyāmahe sunirvṛtim // 21 ≈ L 160.16-17; H 600.22-24.
 ity evaṃ manasā dhyātvā sarve te lokapālakāḥ /
 tad eva samudīkṣantas tasthus tadgatamānasāḥ // 22
 tan matvā sa mahābhijño bodhisattvo vicakṣaṇaḥ /
 sarvadharmādhipaḥ śāstā sarvasattvahitārthabhṛt // 23
 kālajñāḥ samayaṃ paśyan pravrajyāvratasādhane /
 saṃvṛtidharmasaṃrakto rarāmāntaḥpure śubhe // 24
 evaṃ kāmāguṇāsaktam bodhisattvaṃ samīkṣya tam /
 daśadikṣaṃsthitā buddhā sarve 'py evaṃ acodayan // 25 ≈ L 161.11-15; H 602.17-20.
 tadadhi[94b]ṣṭhānatas tatra saṃgītītūryanisvanāt /

saṃcodanā imā gāthā bodhisattvasya nirayauḥ // 26	≈ L 161.17-18; H 604(vs.)1.
purā tvayā mahāsattva praṇidhānaṃ yathā kṛtaṃ /	
tathā smṛtvā samādhāya saṃpūrayatu sāmpratam // 27	≈ L 161.19-20; H 604(vs.)2.
dr̥ṣṭvā sattvān bhavāraktān kleśavyākulamānasān /	
kāruṇyākṛāntacittas tvam evaṃ praṇidadhātha hi // 28	
trāṇasūnye jagallope bhaveyaṃ trāṇatatparaḥ /	
bodhimārge pratiṣṭhāpya cārayeyaṃ śubhe jagat // 29	
iti te praṇidhānasya pūraṇasamayo 'dhunā /	
tan niṣkramya bodhim āsādy kuru dharmamayam jagat // 30	≈ L 161.21-22; H 604(vs.)3.
yasyārthe bhavatā pūrvaṃ sarvārthibhyo yathepsitam /	
sarvadravyāṇi bhogyāṇi saṃpradattāny anekāśaḥ // 31	≈ L 162.1-2; H 604(vs.)4.
bhāryāḥ putrāḥ sutās cāpi rājyakṣetragr̥hādayaḥ /	
svadeharaktamāṃsādiśirodṛgrasanā api // 32	
gr̥tvāś ca nāsikāḥ karṇahr̥dayāntraguṇā api /	
hastorucaraṇās cāpi saṃpradattā yathepsitam // 33	
yasyārthe ca viśuddhātmā jitendriyāśrayaḥ sudhīḥ /	
suśīlavrataṣaṃraktaḥ prācaraḥ sarvadā śubhe // 34	≈ L 162.3-4; H 604(vs.)5.
yadarthe ca mahāsattva kṣamāmbukṣālītāśayaḥ /	
sarvasattvahitādhānaṃ prācaro maitrasaṃvaram // 35	
yadarthe ca mahāvīryanāvam āruhya dustaram /	
bhavodadhiṃ samuttīrya pracakartha jagaddhite // 36	
yadarthe kleśaduṣṭārīṇ jītvā saṃdamitendriyaḥ /	
samādhidhyānaṣaṃraktaḥ samātiṣṭhaḥ samāhitaḥ // 37	
yac ca prajñāmahāmbhodhipāram āsādy sanmateḥ /	
paramajñānasadratnaṃ rabdhvā*karor jagaddhite // 38	
yadarthe ca viśuddhātmā caturbrahmavihārikaḥ /	
sarvasattvahiṭam kṛtvā prācaro bodhisamvaram // 39	
etatpūṇyaviśuddhātmā pariśuddhatrimaṇḍalaḥ /	
meghamukto yathā candro virājase sunirmalaḥ // 40	≈ L 162.7-8; H 606(vs.)7.
etadartamaṃ mahāsattva sarvaṃ sidhyeta te 'dhunā /	
tan niṣkramya vrajan bodhidrumamūlasamāśritaḥ // 41	
jītvā mārāgaṇān sarvān dhyātvā sarvān munīśvarān /	
bodhim āsādy saṃbuddhaḥ kuru dharmamayam jagat // 42	
evaṃ saṅgītītūryotthāḥ sambuddha*ravitāḥ svanāḥ /	
taṃ kumāraṃ mahāsattvaṃ bodhisattvam acodayan // 43	≈ L 162.9-10; H 606(vs.)8.

tac chrutvā sa mahāsattvaḥ pūrvavṛttim anusmaran /	
niṣkramaṇa[95a]samutsāhamanās tasthau vicintayan // 44	
punas tasya kumārasya bodhisattvasya sanmateḥ /	
prāsāde 'ntaḥpure ramye sarvalakṣaṇasaṃyute // 45	≈ L 162.11-13; H 606.9-11.
nānāratnasamudbhāsarvālaṃkāramaṇḍite /	
chatradhvajapatākādikiṃkinījālamaṇḍite // 46	≈ L 162.13-15; H 606.12-13.
dūṣyapaṭṭādisadvāsomuktāhārābhilambite /	
nānāratnamayoddīptavitānapariśobhite // 47	≈ L 162.15-17; H 606.13-15.
śrīsamṛddhisamāpanne sarvopakaraṇānvite /	
sarvartuṣṣaṃchanne saurabhyagandhapūrite // 48	≈ L 162.17-18; H 606.15-16.
aṣṭāṅgaguṇasampannajalapūrṇaiḥ sarovaraiḥ /	
padmotpalādisaṃchannair nānāpakṣisaṃākulaiḥ // 49	≈ L 162.18-20; H 606.17-19.
bhramadbhir madhupaiḥ kīrṇair nānāpuṣpaphaladrumaiḥ /	
tīraruhair samāpannair mahodyānaiḥ samanvite // 50	
vaidūryamaṇisaṃkāśakomaladharaṇītale /	
sarvartusukhasaṃpanne divyabhavanasaṃnibhe // 51	≈ L 162.20-22; H 606.19-21.
yathābhilaṣitaṃ bhuktvādhyāvasato 'nurāgīnaḥ /	
sugandhiliptaḡātrasya dūṣyapaṭṭasuvāsasaḥ // 52	≈ L 162.22-163.3; H 606.21-24.
nānāratnamayoddīptasarvālaṃkāramaṇḍanaiḥ /	
paribhūṣitadehasya saurabhyapuṣpamālīnaḥ // 53	
khaṭṭātūlāsane paṭṭadūṣyachanne sukomale /	
abhirūḍhasya kāntābhiḥ śubhopabhogacāraṇaiḥ // 54	≈ L 163.3-5; H 606.24-608.2.
samupacāryamāṇasya svāntaḥpure 'dhitiṣṭhataḥ /	
tadā nārīgaṇāḥ sarvāḥ kāntā ramābhimaṇḍitāḥ // 55	≈ L 163.7-8; H 608.4.
divyarūpāḥ subhadrāṅgāḥ sneharāgānubandhitāḥ /	
saṃgītinṛtyasaṃcārair manāḥ samudasāhayan // 56	
tadā sarvamunīndrāṇām adhiṣṭhānānubhāvataḥ /	
veṇubhyaś codanāgāthā bodhisattvasya nirayauḥ // 57	≈ L 163.9-15; H 608.5-7, (vs.)9.
sādhō yad bhavatā pūrvam dṛṣṭvā lokān suduḥkhīnaḥ /	
kṛpākāruṇyacittena praṇidhānam svayam kṛtam // 58	≈ L 163.16-17; H 608(vs.)10ab.
tat saṃsmṛtvā mahāsattva niṣkramya trijagaddhite /	
sāṃpratam bodhim āsādyā dharmāmṛtam pravarṣaya // 59	≈ L 163.18-19; H 608(vs.)10cd.
kiṃ tvayā na parityaktaṃ sarvārthibhyo yathepsitam /	
tadbijāṅkurodbhūtapalaṃ sidhyeta te 'dhunā // 60	≈ L 164.1-2; H 608(vs.)12.
kiṃ tvayā na kṛtam sādho vrataṃ tapo 'pi duṣkaram /	

kutra na prakṛtā kṣāntiḥ tvayā sambodhicetasā // 61	≈ L 164.3-10; H 610(vss.)13-16.
kiyan na sādhi[95b]taṃ vīryaṃ sarvalokahite tvayā /	
dhyātvā kiṃ na sukhaṃ kasya labdhaṃ sambhāvitam tvayā // 62	
prajñodadhiṃ samuttīrya jñānaratnaṃ prabhāsvaraṃ /	
labdhvā kasya sukhaṃ bhadrāṃ na pradattaṃ kṛtaṃ na ca // 63	
yac caivaṃ bhavatā sādho praṇidhānaṃ kṛtaṃ tvayā /	
jagat kleśāgnisamtāpaṃ śamayeyaṃ vṛṣāmbubhiḥ // 64	≈ L 164.11-12; H 610(vs.)17.
tadanusmṛtim ādhāya prāpya sambodhiṃ uttamām /	
bodhimārge niyuḥyātra pracārāya śubhe jagat // 65	≈ L 164.13-14; H 610(vs.)18.
yadarthe ca bhavān sādho caturbrahmavihārikaḥ /	
sarvasattvahitādhānaṃ prācarat saṃvaraṃ sadā // 66	≈ L 164.15-16; H 612(vs.)19.
tad atra bhavato dhīra saṃsidhyet sāmprataṃ khalu /	
tanmātraviṣaye 'raktaḥ saṃramasvābhiniṣkramam // 67	
yatrāśritya purā buddhaiḥ saṃprāptaṃ jñānam uttamam /	
tatpradeśaṃ samāśritya sambuddhajñānam arjaya // 68	
bhūyo 'pi pramadā anyā vīṇāmadhuraniḥsvanaiḥ /	
kumāraṃ śayanāsīnaṃ saṃvīkṣyaivam abodhayan // 69	≈ L 164.17-18; H 612(vs.)20.
tadā tābhyo 'pi vīṇābhyaḥ sarvabuddhānubhāvataḥ /	
saṃcodanā imāḥ śabdā bodhisattvasya nīryayuḥ // 70	≈ L 164.19-22; H 612(vs.)21.
sādho purā tvayālokyā jagat kleśāgnidīpitaṃ /	
sambodhipraṇidhiṃ dhṛtvā pratijñātaṃ yathā svayam // 71	≈ L 165.1-4; H 612(vs.)22.
tatsamayo 'dhunāyātaḥ praṇidhisiddhaye tava /	
tat saṃsmṛtvābhiniṣkramya pravrajitvā vrate caran // 72	
drumendramūlam āśritya dhyātvā mārān vinirjayan /	
sambodhijñānam āsādyā sambuddhapadam āpnuhi // 73	
tato drṣtvā jagallokaṃ kleśāgnitāpitāśrayam /	
dharmāmṛtaṃ pravarṣitvā prahlādaya prabodhaya // 74	
purā yadā narendrasya putro 'bhūd dānalālasaḥ /	
tadā te pura āgatya brāhmaṇa evam abravīt // 75	≈ L 165.13-14; H 614(vs.)25ab.
dehi me nṛpate rājyaṃ sarvaṃ śraddhāsti te yadi /	
tac chrutvā sa mahādātā rājyaṃ tasmai dadau mudā // 76	≈ L 165.15-16; H 614(vs.)25cd.
yadā tvaṃ nṛpateḥ śāstā brāhmaṇo 'bhūt suśīlabhṛt /	
nākārṣiḥ kasya cid drohaṃ caturbrahmavihārikaḥ // 77	≈ L 165.17-20; H 614(vs.)26.
vratācāraviśuddhātmā saddharmagurusevakaḥ / [96a]	
bodhimārge pratiṣṭhāpya sarvān sattvān apālayaḥ // 78	

etatpūṇyābhiśuddhātmā cyutvā dehaṃ divaṃ gataḥ /
 tatrāpi suciraṃ sthitvā carasi sma śubhe sadā // 79
 tataś ca tvaṃ mahīndrasya nandano 'bhūr vicakṣaṇaḥ /
 tadā rājyaṃ parityajya vane sthitvā tapo 'caraḥ // 80 ≈ L 165.21; H 614(vs.)27a.
 tatra duṣṭena rājñā te chinnau hastau praroṣiṇā /
 tatrāpi prakṛtā kṣāntis tvayā sambodhicetasā // 81 ≈ L 165.22-166.2; H 614(vs.)27bcd.
 yadā carṣisuto 'bhūs tvaṃ pravrajyāvratam ācaraḥ /
 tatra te dalitaṃ dehaṃ nṛpeṇa duṣṭacetasā // 82 ≈ L 166.3; H 614(vs.)28a.
 tatrāpi prakṛtā kṣāntis tvayā sambodhibhāvinā /
 na tu te mānaśaṃ kṣubdhaṃ kiñcid api sumeruvat // 83 ≈ L 166.4-6; H 614(vs.)28bcd.
 yadā ca mṛganātho 'bhūs tadā nadyā pravāhitaḥ /
 naro dṛṣṭvā tvayāvāhya saṃsthāpitaḥ sthale drutam // 84 ≈ L 166.7-10; H 614(vs.)29.
 yadā cābhūḥ suto rājñas tadābdhau patitaṃ maṇi /
 śoṣayitvā jalaṃ labdhaṃ tvayā vīryānubhāvinā // 85 ≈ L 166.11-14; H 614(vs.)30.
 yadābhūs ca maharṣis tvaṃ tadā dvijo ripor bhayāt /
 śaraṇaṃ te samāgatya prārthayann evaṃ ānataḥ // 86 ≈ L 166.15-18; H 616(vs.)31.
 maharṣe 'nusatya eṣa ripur me hartum udyataḥ /
 tat te 'haṃ śaraṇaṃ yāmi bhavān māṃ trātum arhasi // 87
 tadā tasya ripus tatra maharṣeḥ pura āgataḥ /
 taṃ dvijaṃ hantum ābadhya prākaraṣat krūramānasaḥ // 88
 taṃ duṣṭaṃ nirdayaṃ krūraṃ vīkṣya dayārditāśayaḥ /
 tasmai tvaṃ svatanuṃ tyaktvā taṃ dvijaṃ abhyarakṣayaḥ // 89
 *syamu ṛṣir upāgatya vasatas te drumālaye /
 kati hy asmin drume santi palāśā ity aprcchat // 90 ≈ L 166.19-22; H 616(vs.)32.
 tac chrutvā tvaṃ samālokya palāśās taddrume yati /
 tati sarvāṇi saṃkhyāya tasyarṣeḥ samupādiśaḥ // 91
 yadā ca viśayārakto nyuṣitas tvaṃ drumālayam /
 tatphalāny eva prābhuja prācārīḥ suciraṃ tapaḥ // 92 ≈ L 167.1-4; H 616(vs.)33.
 yadācirād asau vīkṣaḥ pariśuṣkaḥ kṣayaṃ gataḥ /
 tathāpi tadguṇān smṛtvā tatraiva samupāśrayaḥ // 93
 tat samālokya devendro mudā tatra samāgataḥ /
 taṃ drumam supalāśādhyam punaḥ saṃśobhitaṃ vyadhāt // 94
 ity evaṃ tvaṃ mahāsattva sa[96b]mbodhijñānalālasaḥ /
 mahāvīryasamutsāhatapovrataṃ samācaraḥ // 95 ≈ L 167.5-8; H 616(vs.)34.
 evaṃ sarvam anusmṛtvā niṣkramya nagarād itaḥ /

gatvā bodhidrumasyādhaḥ paryāṅkasamupāśritaḥ // 96	
dhyātvāryasatyam āsādyā jītvā mārān sudurjayān /	
saṃbodhijñānam āsādyā dharmāmṛtaṃ pravarṣaya // 97	
ity etacchabdān ākarṇya bodhisattvaḥ sa sanmatīḥ /	
sarvāḥ pūrvacarīḥ smṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 98	
tathānyāḥ pramadāḥ kāntāḥ saṃgītītūryaniḥsvanaiḥ /	
śayyāśritaṃ mahāsattvaṃ prātar evaṃ abodhayan // 99	≈ L 167.9-10; H 616(vs.)35ab.
tattūryaniḥsvanebhyo 'pi sarvabuddhānubhāvataḥ /	
saṃcodanā imā gāthā bodhisattasya niḥśṛtāḥ // 100	≈ L 167.11-12; H 616(vs.)35cd.
janmakalpasahasreṣu bodhicaryāvrataṃ caran /	
prañidhānaṃ yathākārṣīs tathā smṛtvādhunā kuru // 101	≈ L 167.13-16; H 618(vs.)36.
yadā vijño dvijo 'bhūs tvaṃ tyaktvā sarvān parigrahān /	Cf. MJM ch.43; JMAS ch.1.
vivikte vana āśritya dhyātvāsthā bodhimānasah // 102	≈ L 167.17-20; H 618(vs.)37.
tadā vyāghrīm kṣudhā taptāṃ dṛṣtvā ghrṇākulāśayaḥ /	
svadehaṃ samupotsrjya sāpatyāṃ tām apālayaḥ // 103	Cf. MJM ch.43; JMAS ch.1.
yadā ca śibirājābhūr dṛṣtvāndhaṃ dvijaṃ āgatam /	Cf. MJM ch.44; JMAS ch.2.
svacakṣurbhyaṃ tam āyujya saṃdarśinaṃ akārayaḥ // 104	≈ L 167.21; H 618(vs.)38a.
yadā maitrībalo 'bhūs tvaṃ rājā sarvāhitārthabhṛt /	
svaraktapiśitair yakṣān akārṣīḥ saṃpratoṣitān // 105	Cf. MJM ch.46; JMAS ch.8.
yadā cābhūḥ śāso 'raṇye viprāya bhojanārthine /	
svakalpe svatanuṃ vahnau patitvādāḥ svayaṃ mudā // 106	Cf. MJM ch.47; JMAS ch.6.
yadā viśvantaro 'bhūs tvaṃ sarvārthivāñchitārthabhṛt /	
putraṃ putrīm satīm bhāryāṃ prādo viprebhya ātmanaḥ // 107	Cf. JMAS ch.9.
yadā devādhipo 'bhūs tvaṃ dṛṣtvā martyān kṣudhātūrān /	
somo bhūtvā svamāṃsais tān saraktair nīrujān vyadhāḥ // 108	Cf. MJM ch.8; JMAS ch.43.
yadā rūpyāvatī cābhūḥ prasūtikṣuttṛṣārditām /	
nārīm dṛṣtvā svayaṃ chittvā svastanau samabhojayaḥ // 109	Cf. JMAS ch.47.
yadā jñānavatī cābhūḥ dṛṣtvā guruṃ vraṇāturaṃ /	
svoruraktaiḥ samāṃsais taṃ nirvraṇasvasthī[97a]taṃ vyadhāḥ // 110	Cf. JMAS ch.38.
maṇicūḍo yadābhūs tvaṃ sarvārthīcchābhipūrakaḥ /	
svāśṛgmāṃsaṃ sutaṃ bhāryāṃ prādās ca cintāmaṇimkajam // 111	Cf. MJM ch.49.
sarvaṃdado yadābhūs tvaṃ sarvasattvāhitārthabhṛt /	
dattvā sarvāṅgamāṃsāni pārāvataṃ vyamuñcayaḥ // 112	Cf. MJM ch.45; JMAS ch.37.
gajarājā mahān bhūtvā sarvān martyān kṣudhānvitān /	
svamāṃsai rudhiraiś cāpi tān svasthān sukhino vyadhāḥ // 113	Cf. JMAS ch.30.

suprabhāso yadā 'bhūs tvaṃ mahāmātropadeśataḥ /
saṃbodhipraṇidhiṃ prāpya prācārī bodhisamvaram // 114 Cf. MJM ch.7; JMAS chap. 0.3.
samudrareṇur abhūr vipro yadā saṃbodhisādhane /
saddharṃe mānavān sarvān bodhayan saṃnyojayaḥ // 115 Cf. MJM chs.10, 31, 32, 33.
caṇḍālo 'pi yadābhūs tvaṃ nṛpaḥ puṇyabalābhidhaḥ /
sarvasattvahiṭādhānaṃ bodhicaryāvrataṃ caran // 116 Cf. MJM ch.34.
yathābhivāñchitaṃ dattvā sarvān sattvān pramodayan /
sacarmaṃ piśitaṃ netre dattvārthino 'bhyatoṣayaḥ // 117 Cf. MJM ch.34.
dharmākaro nṛpo 'bhūś ca sarvasattvahiṭārthabhṛt /
jihvāṃ karṇau pradattvāpi sarvārthino 'bhyamodayaḥ // 118 Cf. MJM ch.35.
durdharo 'bhūr yadā rājā sarvāṅgāyavāny api /
dattvā sadā rujārtānāṃ sattvānāṃ svasthataṃ vyadhāḥ // 119 Cf. MJM ch.36.
abhūḥ pradīpapadyoto rājarṣir vaṇijo 'mbudhau /
duṣṭārigrasitān prekṣya saddharṃe saṃnyojayaḥ // 120 Cf. MJM ch.37.
susiddhārthamatiḥ śreṣṭhaḥ sarvadravyāni varṣayan /
bhadrāśrīśukhasaṃpannaṃ jagat kṛtvā śubhe 'caraḥ // 121 Cf. MJM ch.38.
tvaṃ sūryamālagandharṣiḥ sarvotpātaṃ praśāntayat /
sarvatra śrīśubhotsāhaṃ kṛtvācārīḥ sadā śubhe // 122 Cf. MJM ch.39.
yadā rājāmbaro 'bhūs tvaṃ dattvā bhāryāṃ sutān sutāḥ /
sarvān parigrahān rājyaṃ sarvāṅgāyavāny api // 123 Cf. MJM ch.40.
bhūyo bhūyaḥ pravṛddhāṅgo dattvā sarvendriyāny api /
sarvāṅgaraktamāṃsaiś ca sarvāṃl lokān atoṣayaḥ // 124 Cf. MJM ch.40.
saptadhā tvaṃ ahīndro 'bhūr nidhīḥ saṃdarśayan bhuvi /
sarvāṃl lokāṃs triyāṇeṣu nyojayaḥ prabodhayan // 125 Cf. MJM ch.41.
rājā candraprabho 'bhūs tvaṃ sarvasattvahiṭārthabhṛt /
śīro 'pi śraddhayā dattvā sarvārthino 'bhyanandayaḥ // 126 Cf. MJM ch.48; JMAS ch.46.
evaṃ sahasradhā śīrṣaṃ prādāḥ saṃbodhimānasaḥ /
sarva[97b]sattvahiṭādhānaṃ bodhicaryāvrataṃ caran // 127 Cf. MJM ch.48; JMAS ch.46.
evaṃ janmasahasreṣu kalpakotīśateṣv api /
saṃbodhipraṇidhānena sarvadānam adā mudā // 128 ≈ L 167.17-20; H 618(vs.)37.
etat sarvam anusmṛtvā niṣkramātra jagaddhite /
saṃbodhijñānasamprāptyai samayo te 'dhunā khalu // 129
evaṃ tacchabdān ākarṇya bodhisattvaḥ sa sanmatīḥ /
etat sarvam anusmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 130
bhūyo 'nyāḥ pramadāḥ kāntās tūryasaṃgītvādanaiḥ /

śāyāgataṃ mahāsattvaṃ tam evaṃ paryabodhayat // 131
 tadā tattūryanirghoṣāt sarvabuddhānubhāvataḥ /
 saṃcodanā imā gāthā bodhisattvasya niḥsṛtāḥ // 132
 yadarthe 'nekakalpāni pariśuddhendriyaḥ sudhīḥ /
 poṣadhādivratam dhṛtvā prācārīs tvam samāhitaḥ // 133
 kalpakotīśahasrāṇi śuddhaśīlo jītenndriyaḥ /
 ṛṣicaryāvrataṃ dhṛtvā samācārī jagaddhite // 134 ≈ L 168.3-6; H 618(vs.)39.
 pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā brahmacārīḥ samāhitaḥ /
 niḥkleśo 'rhan viśuddhātmā prācaraḥ saugataṃ vrataṃ // 135
 anekajanmasāhasraṃ caturbrahmavihārikaḥ /
 kṣamāvrataṃ samādhāya prācārīs trijagaddhite // 136 ≈ L 168.11-14; H 620(vs.)41.
 rājyādisarvasampattihṛte 'rinṛpataskaraiḥ /
 prahateṣuśarīre te kiṃcin na kṣubhitaṃ manaḥ // 137
 kṣāntir eva sadā teṣu tavāpakārivairiṣu /
 kṣubhitā muditā naiva cetasi te kadācana // 138
 mahadvīrye jagatsattvabhadrārthasādhane tava /
 acālyas tvam mahāsattvaḥ sarvamāraṇair api // 139 ≈ L 168.19-22; H 620(vs.)43.
 janmakoṭīśahasrāṇi vīracaryāvrataṃ caran /
 sarvasattvahitaṃ kṛtvā prācārīḥ sadvṛṣe sadā // 140
 durjanān api pāpiṣṭhān trāsayan api yatnataḥ /
 bodhayitvāpi saddharṃe niyuḥyābhyānvacārayaḥ // 141
 narakād api samuddhṛtya pāpiṣṭhān api śodhayan /
 bodhimārga samāyujya prācārayo jagaddhite // 142
 evaṃ sarvān vinirjitya duṣṭārīn api bodhayan /
 sarvasattvahitādhāne bodhimārga nyayojayaḥ // 143
 kiṃ tva[98a]yā na kṛtaṃ dānaṃ kiṃ na saṃcaritaṃ vrataṃ /
 kutra na prakṛtā kṣāntiḥ kasya na suhitaṃ kṛtaṃ // 144
 evaṃ dhyātvā mahābhijñāḥ kleśārīn durmatīn jayan /
 samādhinihitātmāpi sarvasattvahitaṃ vyadhāḥ // 145 ≈ L 169.5-8; H 622(vs.)45.
 nānārūpeṇa sarvatra lokadhātuṣu saṃcaran /
 trāsayan bodhayan sarvān sattvān dharme nyayojayaḥ // 146
 meghavat sarvalokeṣu dharmāmṛtaṃ pravarṣayan /
 sambodhisādhane dharme sarvān sattvān acārayaḥ // 147
 sarvavidyāguṇāmbhodhīn samuttīrya jagaddhite /
 prajñājñānaṃ mahāratnaṃ samāsādyā prabhāsayan // 148 ≈ L 169.13-16; H 622(vs.)47.

avidyātāmasaṃ hatvā dharmolkām udadīpayah /	
dharmamārge pratiṣṭhāpya sarvāṃl lokān acārayah // 149	
evaṃ sarvatra lokeṣu bhānuvat saṃprabhāsayan /	
saṃśodhayaṇ jagallokaṃ dharme 'nudyotyā cārayah // 150	
evaṃ yatpraṇidhiṃ dhṛtvā bodhicaryāṃ mudācaraḥ /	
tat te 'dhunābhisidhyeta niṣkrama trijagaddhite // 151	≈ L 169.21-170.2; H 622(vs.)49.
etat sarvaṃ samākarnya bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /	
pūrvavṛttim anusmṛtvā tasthau dhyātvā hi bodhitaḥ // 152	
bhūyo 'nyāḥ pramadā*nārīḥ saṅgītimadhurasvaraiḥ /	
śayyāsīnaṃ tam ātmajñāṃ bodhisattvaṃ abodhayan // 153	≈ L 170.3-6; H 624(vs.)50.
tatsaṅgītisunādāc ca sarvabuddhānubhāvataḥ /	
saṃcodanā imā gāthā bodhisattvasya nirayayuh // 154	
buddhakṣetreṣu sarveṣu sarve buddhā api tvayā /	
saṃbodhipraṇidhānena samabhyarcyābhinanditaḥ // 155	≈ L 171.5-8; H 626(vs.)56.
prathamam prathamē kalpe 'moghadarśī munīśvaraḥ /	
drṣṭvā prasannacittena śālapuṣpais tvayārcitaḥ // 156	≈ L 171.9; H 626(vs.)57a.
tato vairocanaḥ śāstā drṣṭvā tvayā prasādinā /	
paśyan prasannacittena saṃpūjya samupasthitaḥ // 157	≈ L 171.10; H 626(vs.)57b.
dattvā harītakīm ekāṃ toṣito dundubhisvaraḥ /	
candano nagare mārge tṛṇolkayā praveśitaḥ // 158	≈ L 171.11-12; H 626(vs.)57cd.
reṇuṃ drṣṭvā prasannena hemacūrṇena pūjitaḥ /	
dharmeśvaras tvayā drṣṭvā sādhuḥkāreṇa bhāṣitaḥ // 159	≈ L 171.13-14; H 626(vs.)58ab.
drṣṭvā samantadarśī ca namaskāreṇa toṣitaḥ /	
mahārciskandhir ālokya suvarṇamālayārcitaḥ // 160	≈ L 171.15-16; H 626(vs.)58cd.
dharmadhvaḥ saśādānāi rodhur muṅgamuṣṭinā /	
aśokakusumair jñānaketur nā[98b]mārcitas tvayā // 161	≈ L 171.17-18; H 626(vs.)59ab.
sārathir yvāgupānena dīpai ratnaśikhī mudā /	
padmayonir mahauśadhyais tvayā samarcitā mudā // 162	≈ L 171.18-19; H 626(vs.)59bc.
sarvābhibhūr munīndraś ca muktāsraḥ tvayārcitaḥ /	
sāgaraḥ padmamālābhiḥ sadā samarcito mudā // 163	≈ L 171.20; H 626(vs.)59d.
padmagarbho vitānena sīhaḥ sudūṣyasamstaraiḥ /	
sarvaiḥ sārendrarājākyah kṣīreṇa puṣpito 'rcitaḥ // 164	≈ L 171.21-22; H 628(vs.)60ab.
kurunṭhakusumaiś cāpi yaśodattas tvayārcitaḥ /	
bhojanaiḥ satyadarśī ca jñānameruḥ praṇāmakaiḥ // 165	≈ L 172.1-2; H 628(vs.)60cd.
cīvarair nāgadattākhyo munīndraḥ pūjito mudā /	

sambuddho 'tyuccagāmī ca candanena samarcitaḥ // 166	≈ L 172.2-3; H 628(vs.)60d-61a.
lavaṇamuṣṭinā *tiṣyaḥ padmair mahāvīyūhakaḥ /	
suratnai raśmirājaś ca śākyamuniḥ sukāñcanaiḥ // 167	≈ L 172.3-5; H 628(vs.)61abc.
indraketuḥ *sustotraiś ca sūryānana 'vatamsakaiḥ /	
sumatiḥ svarṇapaṭṭena nāgābhibhūś ca maṇibhiḥ // 168	≈ L 172.5-7; H 628(vss.)61cd, 62a.
duṣyāsanena puṣyākhyo munīndraḥ pūjitas tvayā /	
ratnachattreṇa bhaiṣajyarājo nāmābhipūjitaḥ // 169	≈ L 172.7-8; H 628(vs.)62ab.
tataś ca siṃhaketvākhyā āsanena samarcitaḥ /	
tato guṇāgradhārī ca ratnāñjalisamarcitaḥ // 170	≈ L 172.8-9; H 628(vs.)62bc.
kāśyapaḥ sarvavādyaiś ca gandhāgrīś cūrṇamuktibhiḥ /	
arciḥketur munīndro 'pi puṣpacaityena sevitaḥ // 171	≈ L 172.9-10; H 628(vs.)62cd.
tato 'kṣobhyarājaś ca kūṭāgāreṇa mānitaḥ /	
sugandhipuṣpamālyaiś ca maṇḍito lokapūjitaḥ // 172	≈ L 172.11; H 628(vs.)63a.
tatas tagaraśikhyākhyāḥ svarājyenābhisatkr̥taḥ /	
sarvagandhair jayo nāma mahāpradīpa ātmanā // 173	≈ L 172.12-13; H 628(vs.)63bc.
padmottaro 'bhyalaṃkāraiḥ sarvaratnābhimaṇḍitaiḥ /	
dharmaketuḥ supuṣpaiś ca sugandhibhiḥ praśobhitaiḥ /	
tathā samarcito bhaktyā dīpakārī mahotpalaiḥ // 174	≈ L 172.13-14; H 628(vs.)63cd.
etatprabhṛtayo buddhā yadārthena tvayārcitaḥ /	
tadartamaṃ sāmpratamaṃ smṛtvā niṣkrama trijagaddhite // 175	
ādikalpe sahasrāṇi buddhānāṃ pañcasaptatiḥ /	
śākyamunimukhā yāvad dhṛtarāṣṭrābhido jinaḥ // 176	
eteṣāṃ api buddhānāṃ bhajataḥ śraddhayā sadā /	
naiva te kheditaṃ cittaṃ kiñcid api kadācana // 177	
dvitīye dīpaṃkaro yāvad yāvad candra[99a]dhvajo muniḥ /	
ṣaṭsapatisahasrāś ca sambuddhāḥ pūjitās tvayā // 178	
eteṣāṃ api buddhānāṃ bhajatas te nirantaram /	
naiva hi kheditaṃ cittaṃ kiñcid api kadācana // 179	
tataḥ kalpe tṛtīye ca yāvat kṣemaṃkaro jinaḥ /	
sambuddhaḥ kāśyapo yāvad atrāntare nirantaram // 180	
saptasaptatisāhasrasambuddhāḥ pūjitās tvayā /	
naiva te kheditaṃ cittaṃ kiñcid api kadāpi hi // 181	
iyatas trijagannāthāṇāṃ charaṇaṃ samupāśrayan /	
sambodhiprañidhānena prābhajas trijagaddhite // 182	≈ L 172.21-22; H 630(vs.)65cd.
etat sarvam anusmṛtvā dṛṣṭvā kleśākulaṃ jagat /	

yathā tvayā pratijñātaṃ tathā saṃpūrayādhunā // 183	≈ L 172.15-18; H 628(vs.)64.
sarve te nivṛtāvasthā ye tvayā pūjitā mudā /	
tavāpi samupāyāto nirvāṇasamayo 'dhunā // 184	≈ L 173.1; H 630(vs.)66a.
iyatsarvātmabhāvās ca kva gatās te vicintyatām /	
kṣayāntadharmisaṃsāraṃ saṃskṛtau na hi nityatā // 185	≈ L 173.2-3; H 630(vs.)66bc.
rājyakāmasukhābhogam anityaṃ kṣaṇasaṃsthiti /	
jarārogāntakā ete sarveṣāṃ sarvadā puraḥ // 186	≈ L 173.4-6; H 630(vss.)66d, 67ab.
kleśās cāpi mahāduṣṭāḥ sarvadharmasukhāntakāḥ /	
kṣaṇikā bhaṃgurāḥ kāyāḥ prāṇās tṛṇāmbubinduvat // 187	≈ L 173.7-8; H 630(vs.)67cd.
iti mātṛvā mahāsattva praṇidhānam anusmaran /	
niṣkramya bodhim āsādy kuruṣva trijagaddhitam // 188	
etat sarvaṃ samākarma bodhisattvo 'bhībodhitaḥ /	
smṛtvā sarvaṃ purāvṛttaṃ tasthau dhyānasamāhitaḥ // 189	
tato 'nyāḥ pramadānāryo veṇusaṃgītiniḥsvanaiḥ /	
śayyāsane samāsīnaṃ taṃ nṛpajam abodhayan // 190	≈ L 173.9-10; H 630(vs.)68.
tadā tadveṇusaṃnādāt sarvabuddhānubhāvataḥ /	
saṃcodanā imā gāthā viniścera jagadguroḥ // 191	
anityaṃ trijagallokaṃ kleśāgniparitāpitaṃ /	
jarāvyaḍhivināśāgnisaṃtāpapaṇḍitaḥ // 192	≈ L 173.11; H 630(vs.)69ab.
bhramanti tribhave lokāḥ kāmabhogānurāginam /	
madhukumbhagatā mūḍhā madhulubdhā yathālayaḥ // 193	≈ L 173.12; H 630(vs.)69cd.
tribhavam adhruvaṃ bhaṅgi śaradabhavad asthiram /	
naṭa*raṅgasamaṃ vidyudgirinadījalormivat // 194	≈ L 173.13-14; H 632(vs.)70.
bhuvi devapure [99b] 'pāye bhramanti śaḍgatau sadā /	
avidyāvaśagāḥ sarvatṛṣṇābhībandhitāśayāḥ // 195	≈ L 173.15-16; H 632(vs.)71abc.
babhrāmyate jagat sarvaṃ kumbhakārasya cakravat /	
naiva viśrāmyate kvāpi prapātanadīvegavat // 196	≈ L 173.16; H 632(vs.)71d.
priyasaṃdarśanai rūpaiḥ sadā snigdhanīḥsvanaiḥ /	
śubhagandhai rasair bhogair varasparśasukhair jagat // 197	≈ L 173.17; H 632(vs.)72ab.
parīṣiktaṃ idaṃ sarvaṃ kalipāśābhiveṣṭitaṃ /	
mṛgo lubdhakapāśena yathā baddhas tu vānaraḥ // 198	≈ L 173.18; H 632(vs.)72cd.
sabhaṃyāḥ saraṇāḥ kāmagaṇāḥ sadā saśatravaḥ /	
asidhārānibhās tīkṣṇā apathyā viṣapattravat /	
āryair vigarhitāḥ kāmagaṇā mīḍhaghaṭā yathā // 199	≈ L 173.19-20; H 632(vs.)73.
smṛtīśoṣakāḥ dhvāntakaraṇā bhayaḥhetavaḥ /	

duḥkhamūlā lobhaṭṣṇālatāvivṛddhikāṛakāḥ // 200	≈ L 173.21-22; H 632(vs.)74.
jvalitāgnikhadākārā mahāpaṅkātidustarāḥ /	
viṣalīptaśarākārā madhudigdhāḥ kṣurā iva // 201	≈ L 174.1-2; H 632(vs.)75.
yathā sarpiśīroratnaṃ mahāviśāśrayāsthitaṃ /	
tathā kāmaguṇāḥ sadbhīṛ vijñāya parivarjitāḥ // 202	≈ L 174.3; H 632(vs.)76ab.
bhadraśrīguṇasatkīrtisaddharmārthavighātinaḥ /	
duḥkhakarā yathā *śūlā dvijapeśisamānikāḥ // 203	≈ L 174.4; H 634(vs.)76c.
kalankeṣu yathā śunāṃ mahāvidveṣavighrahāḥ /	
udakendusamā *dṛśyāḥ pratibimbavarūpikāḥ // 204	≈ L 174.4-5; H 634(vss.)76d, 77ab.
pratighoṣasamāḥ svapnasamā naṭasamānikāḥ /	
pratibhāsasamālikā māyāmarīcisamānibhāḥ // 205	≈ L 174.5-7; H 634(vss.)77bcd, 78b.
kṣaṇikā vaśīkāḥ śūnyā parikalpasamutthitāḥ /	
alīkodakakallolabudbudaphenasamānibhāḥ // 206	≈ L 174.7-8; H 634(vs.)78.
kāmā anarthajanakā matvāryair iti garhitāḥ /	
bālyebhīṛ alīkāḥ kāntāḥ subhāṣīṣṭo manoharaḥ // 207	≈ L 174.9; H 634(vs.)79ab.
yuvāpīṣṭo manohārīsupriyo 'rthakaraḥ suhṛt /	
jarāvyaḍhiparākrāntaṃ durbalaṃ vihatendriyam /	
samīkṣya nirdayāḥ sarve tyajanti svajanā api // 208	≈ L 174.10; H 634(vs.)79cd.
yāvac chrīmān mahābhogas tāvat sarvapriyaḥ suhṛt /	
yadā so 'ramanībhūtas tyajyate svātmajair api // 209	≈ L 174.11-12; H 634(vs.)80.
yāvat sampadgrhe pūrṇas tāvat sarvapriyo 'rthakṛt /	
yadā ca kṣīṇitā [100a] sampat tadā syād durjanārivat // 210	
yāvac chrīguṇasampanno dātā sarvārthasādhakaḥ /	
tāvat puṣpaphalācchanno druma ivārthisupriyaḥ // 211	≈ L 174.13; H 634(vs.)81ab.
yadā kṣīṇadhano 'dātā guṇavān api yācakaḥ /	
apriyo bhayakṛd duṣṭagrādhra iva vihaṃgamaḥ // 212	≈ L 174.14; H 634(vs.)81cd.
prabhur dravyabalī yāvat sarvalokahitārthabhṛt /	
satsaṃgamanasamraktaḥ prītikaraḥ suhṛt kṛtī // 213	≈ L 174.15; H 634(vs.)82ab.
yadā dravyabalaiḥ hīnaḥ sarvakāryanirutsukaḥ /	
tadā syād apriyaḥ so 'pi duṣṭārisarpamṛtyuvat // 214	≈ L 174.16; H 634(vs.)82cd.
yāvad yuvā mahotsāhī dharmāśrīguṇasādhane /	
tāvat sarvapriyo bhartā svāmīṣṭamitrabandhuvāt // 215	
yadā jarāsamākrāntaśarīro jīṇitendriyaḥ /	
tadā sa tyajyate sarvavihagaiḥ śuṣkasaro yathā // 216	≈ L 174.17-18; H 636(vs.)83.
jarasā śuṣyate sarvaṃ bhavasamcāraṇaṃ jagat /	

ghanaśāla*vanaṃ sarvaṃ ekā mālulatā yathā // 217	≈ L 174.19-20; H 636(vs.)84.
jarā rūpaharī vīryabalotsāhaviḡhātini /	
sthāmaujaḡsukhasaṃhartrī vyādhimṛtyukarī jarā // 218	≈ L 174.21-22; H 636(vs.)85.
vyādhayo vividhākhyātā sarve te mṛtyudūtikāḡ /	
rogair na pīḡyate ko hi tṛṇavṛkṡā yathā himaiḡ // 219	≈ L 175.3-4; H 636(vs.)87.
rogo hi balavān *vairī sarvendriyaviḡhātikāḡ /	
guṇavīryabalasthāmaharī sarvārthanāśakṛt // 220	≈ L 175.5-6; H 636(vs.)88abc.
rogaḡ sarvāṅgasamṡtāpaparidāhakaro 'gnivat /	
saṃsmṛti haraṇo duṡṡa unmattabhūtapretavat // 221	≈ L 175.6; H 636(vs.)88d.
kuladharmasamācāraniyamavratanaśakaḡ /	
śrutismṛtisamādhānadhvaṃsakaḡ prāṇahāraḡ // 222	
marāṇaṃ cyavanaṃ prāṇasarvendriyavimocanam /	
priyabhāryātmajajñātibandhumitraviyogakṛt // 223	≈ L 175.7; H 636(vs.)89ab.
apunāgatisaṃyogaṃ drumacyutapalāśavat /	
avaśīcaraṇaṃ mṛtyur nadīśrotaḡpravāhavat // 224	≈ L 175.8; H 638(vs.)89cd.
marāṇaṃ harate sarvaṃ jagad dāru yathā nadī /	
naraḡ kālagato yāti svayam evādvitīyakaḡ // 225	≈ L 175.9-10; H 638(vs.)90abc.
daivadarśitamārgena carate karmasahāyakaḡ /	
svakarmaphalabhuñjāno bhramate ṡaḡgatiṡv api // 226	≈ L 175.10; H 638(vs.)90d.
marāṇaṃ grasate sarvaṃ ga[100b]ruḡḡḡḡ pannagaṃ yathā /	
mṛtyur bhūtagaṇaṃ sarvaṃ śoṡayati yathānalaḡ // 227	≈ L 175.11-12; H 638(vs.)91.
etadduḡkhair jagat sarvaṃ sakleśair abhitāpitam /	
drṡṡṡvā yathā pratijñātaṃ tathā pūraya sāmpratam // 228	≈ L 175.13; H 638(vs.)92ab.
daśapāramitāḡ sarvā yadarthe pūritāḡ tvayā /	
tadanusmṛtim ādhāya niṡkrama sahasādhunā // 229	≈ L 175.14; H 638(vs.)92cd.
etacchabdaṃ samākarṇya bodhisattvo 'bhibodhitaḡ /	
etat sarvaṃ anusmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḡ // 230	
tato 'nyāḡ pramadārāmā vīṇāvādananiḡsvaraḡ /	
śāyāsanasamāsīnaṃ bodhisattvaṃ vyanodayan // 231	≈ L 175.15; H 638(vs.)93ab.
tadvīṇāgītasamṡrāvāt sarvabuddhānubhāvataḡ /	
saṃcodanā ime nādā bodhisattvasya nirayauḡ // 232	≈ L 175.16; H 638(vs.)93cd.
tad bhavān api jānīta yat saṃsāraparivartanam /	
saṃskāram acirasthāyi yathākāśe kṡaṇa*prabhā // 233	≈ L 175.17-18; H 638(vs.)94.
yadarthe sugatāḡ sarve satkārair bhajitās tvayā /	
tat sarvaṃ te prasidhyeta tad vijñāyābhiniṡkrama // 234	

anityāḥ kila saṃskārā bhedina āmakumbhavat /	
bālakrīḍācitā ramyāḥ pāṃsunagarasaṃnibhāḥ // 235	≈ L 175.19-20; H 638(vs.)95.
pralopadharṃi saṃskāraṃ varṣikāle ghaṇaṃ yathā /	
savālukaṃ nadīkūlaṃ manaḥsthāyi saṃskṛtaṃ // 236	≈ L 175.21-22; H 640(vs.)96.
saṃskāraṃ pratyayādhīnaṃ pradīpaṃ iva durbalam /	
samīreṇa ivākāśe kṣiprotpattinirodhikaḥ // 237	≈ L 176.1-2; H 640(vs.)97abc.
phenapiṇḍam ivāsāraṃ kadarīskandhasaṃnibham /	
nirīhaśūnyakaṃ māyopamaṃ cittābhīmohanam // 238	≈ L 176.2-4; H 640(vss.)97d, 98abc.
bālollāpanasaṃkāśam anarthaṃ riktamuṣṭivat /	
hetubhiḥ pratyayaś caiva saṃskāraṃ saṃpravartate // 239	≈ L 176.4-5; H 640(vss.)98d, 99ab.
mithaḥ pratītya saṃjātaṃ idaṃ bālair na budhyate /	
yathā muñjaṃ pratītyaiva rajjuvṛttiḥ pravartate // 240	≈ L 176.6-7; H 640(vss.)99cd, 100ab.
yathā cakraghaṭaṃ yantram ekaikaśo na vartate /	
tathā sarve bhavāṅgā hi parasparābhiniḥśritāḥ // 241	≈ L 176.8-9; H 640(vss.)100cd, 101ab.
ekaikaśo na vartante nāpi pūrvāparāntatā /	
bījato 'py aṅkuro jāto bījo 'pi cāṅkurodbhavaḥ // 242	≈ L 176.10-11; H 640(vss.)101cd, 102ab.
na tato 'nyonyataś caivam anucchedam aśāśvatam /	≈ L 176.12-13;
avidyāpratyayā jātā [101a] saṃskārās tattvato na hi // 243	H 642(vss.)102cd, 103ab.
avidyaivāpi śūnyā hi saṃskārāḥ kuta udbhavāḥ /	≈ L 176.14-16;
pratimudrā yathāmudrās tatsaṃkrāntir nopalabhyate // 244	H 642(vss.)103cd, 104abc.
na tatra śāśvatāchedau saṃskāre 'pi ca *tau tathā /	
nairātmyaṃ sūnyataivaṃ ca nātmeti parikalpyate // 245	≈ L 176.16; H 642(vs.)104d.
cakṣurūpaṃ pratītyaiva vijñānaṃ upalabhyate /	
na cakṣur nīśritaṃ rūpe na rūpaṃ cakṣurnīśritaṃ // 246	≈ L 176.17-18; H 642(vs.)105.
vijñānaṃ tiṣṭhate kutra tadutpādavyayaṃ katham /	
tad āgataṃ kutaḥ kutra gataṃ māyodbhavaṃ yathā // 247	≈ L 176.21-22; H 642(vs.)107.
yathāgnir jāyate hastād araṇer uttarāraṇeḥ /	
saṃskāro 'pi tathā yogāt trīṇām eva na caikataḥ // 248	≈ L 177.1-2; H 644(vs.)108abc.
jāto vidhāya kāryāṇi gataḥ kutra nirūpyatām /	
nāgatir na gatiś cāsyā saṃskārasyopalabhyate // 249	≈ L 177.2-4; H 644(vss.)108d, 109.
skandhadhātuvāyatanāny avidyābhṛtkarmayogataḥ /	
sattvaḥ sāmagra to jātāḥ paramārthe na so 'sti hi // 250	≈ L 177.5-6; H 644(vs.)110.
kaṇṭhoṣṭhatālujihvātaḥ pravartante 'kṣarāṇy api /	
tāni sāmagrajātāni nopalabhyanta ekataḥ // 251	≈ L 177.7-8; H 644(vs.)111.
manobuddhivaśair eva vāṇī nīscarate mukhāt /	

sādṛśyā nopalabhyante bāhyābhyantarato 'pi hi // 252	≈ L 177.9-10; H 644(vs.)112.
pratītya dāru tantrīś ca hastavyāyāmasaṃgateḥ /	
vīṇāmanojñānirghoṣā niścarate tathā bhavaḥ // 253	≈ L 177.13-14; H 646(vs.)114.
tannādaḥ kuta āyātaḥ kutra gataḥ sthito 'pi ca /	
tasyāgatigatī cāpi sthitiś ca nopalabhyate // 254	≈ L 177.15-16; H 646(vs.)115.
hetupratyayasamīyogād eva saṃskārasambhavaḥ /	
yogī bhūtavidarśī hi śūnyaṃ paśyati saṃskṛtau // 255	≈ L 177.17-18; H 646(vs.)116.
adhyātmabāhyakāḥ śūnyāḥ sattvā ākāśadharmikāḥ /	
anālayā viviktāṃśāḥ saṃskāradharmalakṣaṇāḥ // 256	≈ L 177.19-20; H 646(vs.)117.
dīpaṃkaraprasādāt tvam anubuddhaḥ svayaṃ yathā /	
tathā sarvajagallokaṃ prabodhaya prasādayan // 257	≈ L 177.21-22; H 646(vs.)118.
vikalpakleśasaṃtāpapradaḥ hitam idaṃ jagat /	
dr̥ṣṭvā dharmāmṛtaṃ varṣan prahlādaya yathāmbudaḥ // 258	≈ L 178.1-2; H 646(vs.)119.
tvayā hi prakṛtaṃ dānaṃ sarvabhadrārthasiddhaye /	
prāpya saddharmasampattiṃ vibhajasva jagatsv api // 259	≈ L 178.3-6; H 648(vss.)120-121.
suśīlasaṃvaraṃ dhṛtvā saṃcāritaṃ sadā śubhe /	
susaṃvare tathā sarvaṃ idaṃ jagat pracāraya // 260	≈ L 178.7-10; H 648(vss.)122-123.
sadā kṣāntivrataṃ dhṛtvā saṃsādhitaṃ mahadvṛṣam /	
tathā kṣāntivrate sarvaṃ cārayedaṃ jagat sadā // 261	≈ L 178.11-14; H 648(vss.)124-125.
tvayā vīryamahotsāhaiḥ prakṛtaṃ bhadrārthasāadhanam /	
tathā vīryamahotsāhaiḥ pracāraya jagac chube // 262	≈ L 178.15-18; H 650(vss.)126-127.
tvayā dhyātvā jinān smṛtvā prāptāḥ sarve samādhayaḥ /	
tathā sarvaṃ jagad dhyānasamādhau saṃniyojaya // 263	≈ L 178.19-22; H 650(vss.)128-129.
prajñodadhiṃ samuttīrya jñānaratnaṃ tvayāpyate /	
tadratnasuprabhādīpair jaganmohatamo hara // 264	≈ L 178.1-2; H 650(vs.)130.
etatpūrvacarīṃ smṛtvā praṇihitaṃ yathā tvayā /	
tathā kartuṃ jagadbhadraṃ niṣkrama mā bhava rama // 265	≈ L 178.3-4; H 650(vs.)131.
jagat sarvaṃ samālokya kleśāgnitāpadāhitam /	
niṣkramya bodhim āsādhya jivtvā mārān sudurjanān // 266	
āryadharmam samādiśya jagad bhadre pracārayan /	
kleśāgnipraśamīkartuṃ dharmāmṛtaṃ pravarṣaya // 267	
mopekṣa trijagat paśyan mārācaryāsamāratam /	
niṣkramya bodhim āsādy bodhicaryāḥ prakāśaya // 268	
etacchabdaṃ samākarṇya bodhisattvaḥ sasanmatīḥ /	
sarvaṃ pūrvacarīṃ smṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 269	≈ L 178.5-6; H 652(vs.)132.

evam antaḥpurastho 'pi bodhisattvo divāniśam /	
buddhadharmāmṛtaṃ pītvā saṃvṛttisurato 'ramat // 270	≈ L 179.7-8; H 652.5-6.
purāpy asau mahāsattvaḥ sadā saddharmalālasaḥ /	
reme śrutvā mudā dharmam prābhajan dharmabhāṇakān // 271	≈ L 179.9-10; H 652.7-9.
saddharmaśravaṇātripto dharmaparyeṣaṇodyataḥ /	
lokān niśāmayan dharmam prācārayan samantataḥ // 272	≈ L 179.11; H 652.9.
dharmadānapatir dhīra ācāryaḥ sadguṇārthadaḥ /	
dharmārthī dharmanidhyāptiḥ sarvadharmārthavit sudhīḥ // 273	≈ L 179.11-14; H 652.9-13.
prajñājñānamahopāyakausalyavidhivit kṛtī /	
saddharmakṣāntiniryātaḥ sarvajñadharmadeśakaḥ // 274	≈ L 179.14-15; H 652.13.
pūrveṣāṃ bodhisattvānāṃ dharmānuvṛttim ācaran /	
saṃvṛttikāmasaṃbhogaṃ bhuñjānāḥ prāraman mudā // 275	≈ L 179.16-21; H 652.14-19.
viśuddhaviṣayān bhuktivā ramamāṇo mahāsukham /	
pūrvacaryāṃ anusmṛtvā pracacāra samāhitaḥ // 276	≈ L 179.21-180.2; H 652.19-654.3.
evam antaḥpurastho 'pi so 'parikliṣṭitendriyaḥ /	
buddhadharmāmu[102a]khīcakre pūrvacaryāṃ anusmaran // 277	≈ L 180.2-6; H 654.3-7.
mahākāruṇacittena sarvasattvapramokṣaṇe /	
mārapāśān samucchidya nirvāṇābhiraṭim *dadhyau // 278	≈ L 180.6-10; H 654.7-11.
viditabhavadoṣo 'sau saṃskāragatiniḥsṛhaḥ /	
pravrajyācaraṇotsāhī brahmacaryāvratotsukaḥ // 279	≈ L 180.11-15; H 654.12-17.
viviktāśramasaṃvāsaśāntaviharaṇāśayaḥ /	
svaparātmahitākāṅkṣī dharmavinayakauśalaḥ // 280	≈ L 180.16-20; H 654.17-21.
yogadhyānasukhāraktaḥ sarvasattvānukāṃpakaḥ /	
nirapekṣamahātyāgī niḥkleśavimalendriyaḥ // 281	≈ L 180.20-22; H 654.22-23.
śuddhaśīlābhiśuddhātmā māracyāparāṇmukhaḥ /	
triratnabhajanotsāhabodhicaryāsamāhitaḥ // 282	≈ L 181.9-11; H 656.9-11.
kṣāntisaddharmasaurabhyavisaratkīrtisuprabhaḥ /	
avyāpannāśayādhāraḥ sarvasattvahitārthabhṛt // 283	≈ L 181.11-14; H 656.11-14.
saddharmacāraṇodyogī dṛḍhavīryabalodgataḥ /	
anivartī mahāvīraḥ sarvahitārthasādhakaḥ // 284	≈ L 181.14-15; H 656.14-15.
smṛtimān dhyānasamraktaḥ susamāhitamānasaḥ /	
sarvavidyāmahābhijñāḥ sarvasiddhisamṛddhimān // 285	≈ L 181.15-16; H 656.15-17.
samādhiguṇasaṃpattibhadraśrīasukhabhṛt kṛtī /	
prajñāratnaprabhāvidyātamohantā prabhāsvaraḥ // 286	≈ L 181.16-21; H 656.17-658.3.
māyāsvapnamarīcyābhapratīśrutkopamaṃ bhavam /	

matvā sarvajñasaddharmasāadhanābhirato babhau // 287	≈ L 181.21-182.2; H 658.3-7.
tataḥ sa bodhisattvānāṃ caramabhavacāriṇām /	
anuvṛttiṃ caramṣ turyadharmāṇi samasādhayat // 288	≈ L 182.2-5; H 658.7-10.
catuḥsaṃgrahavastūni triratnasamprakāśanam /	
sarvasattvāparityāgaṃ dharmam sambodhipākṣikam // 289	≈ L 182.5-12; H 658.10-17.
etāny antaḥpurasthaḥ sa āmukhīkṛtya sasudhīḥ /	
antaḥpurikapākārthaṃ prātihāryam adarśayat // 290	≈ L 182.12-14; H 658.18-20.
tadā tasyānubhāveṇa bodhisattvasya sarvataḥ /	
saṃgītītūryanādebhya evaṃ śabdā viniryayuḥ // 291	≈ L 182.15-17; H 658.20-22.
ye 'bhivāñchanti saṃsāre bhadrāśrīguṇasatsukham /	
saṃbodhisādhanam dharmam prānte nirvṛtisatsukham // 292	
te dadantu sadārthibhyaḥ śraddhayā dānam ādarāt /	
suśīlasaṃvaram dhṛtvā saṃcarantāṃ sadā śubhe // 293	
kṣāntivratam sadā dhṛtvā careyus *tat samāhitāḥ /	
vīracaryāvratam dhṛtvā saṃprakuryur jagaddhitam // 294	
jītvā kleśān samādhāya bhokṣa[102b]nti dhyānasatsukham /	
prajñāratnaprabhādīpair nihanyuḥ kleśatāmasam // 295	
dhṛtvā brahmavihārāṇi pracareyuḥ sadā śubhe /	
sarvāṃl lokān upāyena cārayeyuḥ susaṃvare // 296	
saṃbodhipraṇidhiṃ dhṛtvā triratnaśaraṇam gatāḥ /	
bodhicaryāvratam dhṛtvā cariṣyanti jagaddhitam // 297	
etatpuṇyabalair jītvā mārān duṣṭān satīrthikān /	
mahāvijñā mahāsattvā bhaveyuḥ sugatātmajāḥ // 298	
tataḥ sarvān bodhipakṣān dharmān saṃbodhisādhānān /	
dhṛtvā bhadraakarīm caryāṃ cariṣyanti jināśrame // 299	
tatra buddhānubhāvena prāpya jñānam samantataḥ /	
dharmāmṛtam pravarṣantaḥ kariṣyanti jagacchubham // 300	
tato vīkṣya bhavam śūnyam anityam kṣaṇasaṃpadam /	
bhavasamcāranirmuktā vītakleśā jīten driyāḥ // 301	
nirodhajñānam āsādyā nirvāṇapadavāñchinaḥ /	
bodhivīkṣatalāsīnāḥ sthitvā dhyānasamāhitāḥ // 302	
saṃbodhijñānam āsādyā kṛtvā dharmamayam jagat /	
samāpya saugataṃ kāyam saṃyāsyanti jinālayam // 303	
iti tūryaravam śrutvā sarvās tāḥ pramadā api /	
bodhicittam samāsādyā babhūvur anuśikṣitāḥ // 304	≈ L 183.11-12; H 662(vs.)140abc.

tatas tāḥ pramadāḥ sarvāḥ saṃvṛttidharmacārikāḥ / saṃbodhipraṇidhiṃ dhṛtvā pracerur bodhisamvaram // 305	≈ L 183.12; H 662(vs.)140d.
evam antaḥpurasthena bodhisattvena tena tāḥ / sarvā nāryo 'pi saṃbodhau babhūvuḥ samniyojitāḥ // 306	≈ L 183.13-14; H 662.9-10.
evam anye 'pi devās ca ye tatra samupasthitāḥ / te 'pi sarve 'nubodhitvā babhūvur bodhimānasāḥ // 307	≈ L 183.14-15; H 662.10-11.
atha hrīnāmadevaḥ saṃtuṣṭitakāyiko niśi / dvātriṃśadevasāhasraiḥ samanvito mudāgataḥ // 308	≈ L 183.16-18; H 662.12-14.
prāsādāntaḥpure rātrau śayyāsanasamāśritam / bodhisattvaṃ tam ālokyā khāśrita evam abravīt // 309	≈ L 183.18-20; H 662.15-16.
atiyaśā mahāsattva bhavatā saṃdarśitā cyutiḥ / saṃdarśitaṃ ca janmāpi sarvavidyāḥ pradarśitāḥ // 310	≈ L 183.21-22; H 662(vs.)141.
lokānuvṛttisaṃvṛttir antaḥpure pradarśitā / mānujā [103a] api devās ca bodhimārge 'bhiyojitāḥ // 311	≈ L 184.1; H 662(vs.)142ab.
etās ca pramadā nāryaḥ sarvā api prabodhitāḥ / bodhimārge niyojitvā saṃvṛttau saṃpracāritāḥ // 312	
yat tava samupāyāto niṣkramasamayo 'dhunā / tat pratijñām anusmṛtvā niṣkrama trijagaddhite // 313	≈ L 184.2; H 662(vs.)142cd.
sarve buddhā na muñcanti svapratijñāṃ jagaddhite / tadanuvṛttim ādhāya pratijñāṃ paripūraya // 314	
pañcacaḥṣuṃṣi saṃprāpya dharmamārge 'bhidaśāyan / andhībhūtaṃ jagat sarvaṃ pracāraya prabodhayan // 315	≈ L 184.3-4; H 664(vs.)143abd.
mārapāśāt svayaṃ mukto jagad api vimocaya / bhavadadheḥ svayaṃ tūrṇo jagad api samuddhara // 316	≈ L 184.4; H 664(vs.)143c.
kāmādāsā gr̥hasthā ye bhavantaṃ vīkṣya nirgatam / te 'pi niṣkramaṇe kuryuḥ saddharmasādhane spr̥hām // 317	≈ L 184.5-6; H 664(vs.)144.
māheśvaryaṃ caturdvīpān saptaratnāni supriyāḥ / tyaktvā niṣkrāntam ālokyā niṣkrameyuḥ surā api // 318	≈ L 184.7-8; H 664(vs.)145.
kiñ cāpi dhyānasaukhyais tvaṃ viharasi samāhitaḥ / jagad api tathā dhyāne prabodhayan niyojaya // 319	≈ L 184.9; H 664(vs.)146ab.
cirasuptān imān sarvān sadevāsurasamānuṣān / bodhayitvā prayatnena cāraya bodhisamvare // 320	≈ L 184.10; H 664(vs.)146cd.
vṛddhatve śobhate nāpi matir niṣkramaṇe bhava / yauvanaṃ kṣaṇasamṇattir vidyutsamkāśam adhravam // 321	≈ L 184.11-12; H 664(vs.)147.
tad agrayaudevane tyaktvā rājyaṃ sarvān parigrahān /	

niṣkramya trijagadbhadrapatijñāṃ paripūraya // 322	≈ L 184.13-14; H 664(vs.)148.
na ca kāmarasais tṛptir lavaṇāmburasair yathā /	
tuṣṭiḥ prajñāmṛtaiḥ eva saṃbodhijñānasāadhanaiḥ // 323	≈ L 184.15-16; H 664(vs.)149.
yāvat tvam hi yuvā kāntaḥ sarvasattvahitotsukaḥ /	
jīrṇitendriyadehe tu kiṃ kuryās trijagaddhitam // 324	≈ L 184.17-18; H 666(vs.)150.
ādīptaṃ kleśasaṃtāpair niḥśaraṇam idaṃ jagat /	
dṛṣtvā tatkleśasaṃtāpaṃ dharmāmṛtaiḥ praśāmaya // 325	≈ L 184.19; H 666(vs.)151a.
mārapāśair nibaddhānāṃ kāmakleśāgnitāpinām /	
chittvā pāśān vinirmuktimārgaṃ saṃdarśaya drutam // 326	≈ L 184.19-20; H 666(vs.)151bcd.
cirāturaṃ jagat sarvaṃ vyādhikleśāgnitāpitam /	
kṛtvā saddharmabhaiṣadyaiḥ svasthitam cāraya śubhe // 327	≈ L 184.21-22; H 666(vs.)152.
andhānām iva sarveṣāṃ durdṛṣṭiḥ pariśodhayan / [103b]	
saddharmadīpaṃ ujjvālya darśaya sugatālayam // 328	≈ L 185.1-2; H 666(vs.)153.
sarve 'pi samudikṣanto brahmasākrādayo 'marāḥ /	
gandharvāḥ kinnarīyakṣāḥ kumbhāṇḍā rākṣasā api // 329	≈ L 185.3; H 666(vs.)154ab.
siddhā vidyādharaḥ sādhyā garuḍā nāgādhipā api /	
daityā lokādhipāḥ sarve tiṣṭhanty evaṃ samīhitāḥ // 330	
drakṣyāmo bodhisamprāptaṃ prakurvantaṃ jagaddhitam /	
vartayantaṃ jagaloke dharmacakraṃ samantataḥ // 331	≈ L 185.4; H 666(vs.)154c.
tatsaddharmāmṛtaṃ pītvā carīṣyāmaḥ sadā śubhe /	
iti dhyātvā samīchantaḥ tiṣṭhanti tvāṃ samarcitum // 332	≈ ibid.
samīkṣya bhujagendrāś ca bhavantaṃ śrīprabhāsvaraṃ /	
prabhajiṣyanti saṃchādyā phaṇāchattraīḥ saratnakaiḥ // 333	≈ L 185.5-6; H 666(vs.)155.
sarve lokādhipāś cāpi bodhimaṇḍasamāśritam /	
jayantaṃ mārasaṃghāṃś ca draṣṭum icchanti sanmate // 334	
daśadiksaṃsthitāḥ sarve saṃbuddhāḥ sugatā jināḥ /	
sādhukāraṃ pradāsyanti bodhiprāptāya te mudā // 335	
catvāro lokapālās te buddhāya brahmacāriṇe /	
pātrāṇi dātum icchantas tiṣṭhanti saṃprasāditāḥ // 336	≈ L 185.7-8; H 668(vs.)156.
brahmasākrādayo devā dharmacakrapravartanam /	
adhyeṣitum samīchanti bhavantaṃ bhadrakāraṇam // 337	≈ L 185.9-10; H 668(vs.)157.
sarveṣāṃ api sattvānāṃ traidhātukanivāsinām /	
tvam eva bhagavāṇ chāstā saddharmadeśako jinaḥ // 338	
sarvajño 'rhan mahābhijño dharmarājā vināyakaḥ /	
jagadgurur jagannātho muniśvaro bhaved dhruvam // 339	

iti satyaṃ parijñāya praṇidhānaṃ yathā tava /
 tathā saṃpūryatāṃ sarvaṃ trailokyahitasādhanaṃ // 340
 dīpaṃkarādibuddhānāṃ vyākaraṇaṃ anusmaran /
 niṣkramaṃ bodhim āsādyā saddharmaṃ saṃprakāśaya // 341 ≈ L 185.15-16; H 668(vs.)160.
 tribodhiṃ samupādiśya sarvān sattvān prabodhayan /
 triyāneṣu pratiṣṭhāpya pranaya saugatālayam // 342
 tad ākarṇya mahāsattvo pūrvacaryāṃ anusmaran /
 dhyātvā niṣkramaṇotsāhaṃ dhṛtvā tasthau samāhitaḥ // 343
 tathā tāḥ pramadās cāpi sarvāḥ saddharmalālasāḥ / [104a]
 bodhicaryāvratam dhṛtvā mudāceruḥ samāhitaḥ // 344
 evam anye 'pi lokāś ca tadanuvṛtticāriṇaḥ /
 bodhicaryāsamutsāhaṃ dhṛtvāceruḥ samāhitaḥ // 345
 rājā śuddhodanaś cāpi samantrījanabāndhavaḥ /
 bodhicaryāsamutsāhaṃ dhṛtvācere 'numoditaḥ // 346
 etatpūṇyānubhāvena sarvatrāpi subhadrakam /
 nirutpātaṃ mahotsāhaṃ prāvartata nirantaram // 347
 iti me *guruṇādiṣṭaṃ sāmpratam tat mayocyate /
 tathā tvam api ca śrutvā suprasanno 'numodatu // 348
 ye 'py etad bodhisattvānāṃ saṃvṛttidharmacāraṇam
 śrutvānumodanāṃ kṛtvā pracaranti prabodhitāḥ /
 te 'py sarve vikalmaṣāḥ pariśuddhamāṇḍalāḥ
 bodhisattvā mahāsattvā bhaveyuḥ śrīguṇāśrayāḥ // 349
 iti tenārhatādiṣṭaṃ śrutvā*śokaḥ sa sanmatih /
 tathety abhyanumoditvā prābhyanandat sapārśadaḥ // 350

// ity antaḥpurābhīratibodhisattvaniṣkramaṇasaṃcodanāparivarto nāma pañcadaśo
 'dhyāyaḥ samāptaḥ //

Apparatus criticus

1b upagupto] A (post corr. marg.) B D: [śākyasiṃho] A(ante corr.; seconda manu!). **Note.** In A, letters of *upagupto* are written between lines (inter lineas) by the the hand of a person other than the original scribe of A.

- 1c aśokaṃ] B: ++kaṃ A(ante corr.): ānandaṃ A(post corr.; seconda manu!); aśokan D. **Note.** In A(ante corr.), letters of original scribe are lost by overwritten letters (seconda manu) of *ānandaṃ*.
- 2c saṃvṛti°] A B: saṃvṛtti° D.
- 3a tataḥ so] D: tato so A B.
- 3b saṃvṛti°] A B: saṃvṛtti° D.
- 3c caturaśīti°] A: caturāśīti B D.
- 4 note] pāda c is hypermeter.
- 5c saṃvṛtti°] sic A B D.
- 5d ramamāṇaḥ] A: ramayāṇā B: ramamānā D
- 6b saṃvṛtti°] sic A B D.
- 12b lokāś catuḥ°] A2: lokā catuḥ° A B.
- 13d carīṣyanti prabodhitāḥ] D: carīṣyati prabodhitāḥ A2: carīṣyaniḥprabodhitāḥ A: carīṣya niṣprabodhitāḥ B.
- 15ab taptvā] A A2 D: tatvā B.
- 16a saṃcintamāṇās] A A2: saṃcintyamāṇās B D.
- 17a yad ayaṃ] A B D: yadāyaṃ A2.
- 24c saṃvṛti°] A A2 B: saṃvṛtti° D.
- 28d praṇidadhātha hi] A: praṇidadhīya hi A2 B D.
- 30 note] pāda c is hypermeter.
- 36d jagaddhite] B D: jagaddhitaṃ A A2.
- 38 cd rabdhvā*karor] ex con: rabdhvākaro A: labdhākaro A2 B D.
- 43b °*ravitāḥ] ex con (cf. Lalitavistara): °ramitāḥ A A2 B D.
- 50c tīraruhaiḥ sa°] A2: tīraruhair sa° A B: tīraruhai sa° D.
- 55d kāntā ramābhimaṇḍitāḥ] A(marg.) B D: kāṃtā ramābhimaṇḍitāḥ A2.
- 56a subhadrāṅgāḥ subhadrāṅgāḥ] A(marg.) A2: divyarūpā subhadrāśā B D.
- 57c veṇubhyaś] B D: veṇubhyāś A A2.
- 62a vīryaṃ] A(post corr. marg.): kāryaṃ A(ante corr.) A2 B D.
- 67d °niṣkramaṃ] B: °niṣkrama A A2: °niṣkramaḥ D. Or read °*niṣkramya?
- 82a yadā] A: yathā A2 B D.
- 82b pravrajyāvratam ācaraḥ] A: pravrajyāvratanaṅcare A2: pravrajyāvratanaṅcareḥ B D.
- 83, 84, 85 note] The text of 83d, 84abcd, 85abc is lacking in A2, B and D.
- 84ab 'bhūs tadā] corr.: 'bhūt tadā A.
- 85a cābhūḥ suto] corr.: cābhūs suto A.
- 86a yadābhūs ca] corr.: yadābhūc ca A A2 B D.

- 87b ripur me hartum] A: ripuḥ prahartum A2: nipur me haṃtum B D.
- 90a syamu *ṛṣir] ex conī (cf. Lalitavistara): syamu[nyā]ṛṣir A: syamunyarṣir A2 B D.
- 91b °drume yati] A: °drume mati A2 B D.
- 92d prācārīḥ su°] corr.: prācārīs su° A A2 B D.
- 95c °samutsāhatapo°] A B D: °samutsāhaṃ tapo° A2.
- 96a evaṃ] A2 B D: etaṃ A.
- 102a yadā] A B D: yathā A2.
- 108c somo bhūtvā] A: sāmā bhūtvā A2 B D.
- 108d nīrujā vyadhāḥ] A: nīrujā vyathā B: nīrujā vyadhāt D.
- 110c svoruraktaiḥ sa°] corr.: svoruraktais sa° A: svānuraktais sa° A2 : svānaruktais sa° B D.
- 111d cintāmaṇīṃkajaṃ] A A2: cintāmaṇīkajaṃ B D (metre!).
- 117c sacarmaṃ] A B: savarma A2: sarvama D.
- 125c triyāṇeṣu] A2 B D: triyāṇesu A.
- 131d evaṃ] A B D: eva A2.
- 135b brahmacārīḥ] A B D: brahmacārī A2.
- 142 note] After 142, a gāthā was written in the margin of A by the hand of a person other than the original scribe of A. It is as follows: *iti tūryaravaṃ śrutvā smṛtvā pūrvacarīḥ svayam / nū-
naṃ parigrahāṃs tyaktvā yāsyāmīti sthitas tadā //* The same verse is also found in A2, B and D.
- 144c kṣāntiḥ] A2: kṣānti A B D.
- 148a °mbhodhīn] A B: °mbhodhi A2: °mbhodhī D.
- 150d dharme 'nudyotyā] corr.: dharmanudyotyā A A2: dharme nudyābhya B D.
- 153a pramadā*nārīḥ] ex conī: pramadānā[r]āḥ A: pramadāmāyā A2 D: pramadāmāyāt B.
- 161ab daśādānai rodhur] A(post corr.): daśādānair nirodhur A(ante corr.) A2: daśādārair nirodhur B D.
- 162c mahauṣadhyais] corr.: mahōṣadhyais A A2 B D.
- 167a *tiṣyaḥ] ex conī (cf. Lalitavistara): tikṣaḥ A A2 B D.
- 167b: mahāviyūkaḥ] sic A A2 B D. **Note:** mahāviyūka < mahāvyūha, m.c.
- 168a *sustotraiś] ex conī: sutostraiś A B D: sutotraiś A2.
- 172 note] pāda a is hypermeter.
- 173a tagaraśikhyākhyāḥ svarā°] corr.: tagaraśikhyākhyā svarā° A: tesaraśikhyākhyāḥ svarā° A2: teśaraśikhyākhyā svarā° D: teśaraśikhyākhyā rā° B.
- 176c śākyamunimukhā] A B D: śākyamukhā A2.
- 176d dhṛtarāṣṭrābhido] B D: [dh]ṛdharāṣṭābhido A: dhṛtarāṣṭābhido A2.
- 178 note] pāda a is hypermeter.

- 179 note] The text of 179cd, 180ab is lacking in A2.
- 182b charaṇaṃ] D: charaṇa A A2 B.
- 183, 184 note] The 2 verses of 183 and 184 are lacking in A2, B and D.
- 185b vicintyātām] A: vicintyanti A2 B D.
- 186a rājyakāmasukhābhogam] A: rājyakāme sukhābhogam B: rājyakāmaiḥ sukhābhogam A2: rājyakāme sukhābhogān D.
- 186b °saṃsthiti] A A2 B: °saṃsthitiḥ A2.
- 188d trijagaddhitam] A: trijagaddhite A2 B D.
- 190 note] The text of 190abcd, 191ab is lacking in A2.
- 194c naṭa*raṅgasamaṃ] corr. naṭaraṅgaṃ samaṃ A A2 B D.
- 196a babhrāmyate] A A2 B: vibhrāmyate D. Read baṃbhramyate?
- 197b note] Here one syllable is lacking.
- 199c asidhārānibhās] corr.: asidhāranibhās A B D: asiranibhās A2.
- 199e vigarhitāḥ] corr.: vigarhitā A A2 B D.
- 203c °śūlā] ex conī (cf. Lalitavistara, sūlasamāḥ): śūrāḥ A B: śūrā D: śūroḥ A2.
- 204c *dṛśyāḥ] ex conī: dṛśyā A A2 B D.
- 205c °*samālikā] ex conī (cf. Lalitavistara, °samā aliko): °samā.ikā A: °samācīkā A2: °samāriktā B D.
- 208d durbalaṃ vihatendriyaṃ] A(marg.): dubalaṃ vihatendriyaṃ B: madhalaṃ vihatendriyaṃ A2: mavalāṃ vihatendriyaṃ D.
- 208e samīkṣya nirdayāḥ sarve] A(marg.) B D: samīkṣya nirdayāḥ sarva A2.
- 214ab hīnaḥ sa°] A2: hīna sa° A: hīna sa° B D.
- 215a mahotsāhī] A(post corr.): mahotsāhaṃ A(ante corr.) A2: mahotsārha B: mahotsāhau D.
- 217a jarasā] A B D: jarasyā A2.
- 217c °śāla*vanam] ex conī (cf. Lalitavistara): °śālabalaṃ A A2: °śālavalam B: °śālavanam D.
- 218a rūpaharī] A A2: rūpaharā B D.
- 220a *vairī] ex conī.: vairoḥ A B: vairāḥ A2: vairi D.
- 233d kṣaṇa*prabhā] ex conī: kṣaṇaprabham A A2 B D.
- 235b āmakumbhavat] A2: ātmakumbhavat A B D.
- 236d manaḥsthāyi] A : manavasthāpi A2 B D.
- 236d note] Here one syllable is lacking.
- 245b *tau tathā] ex conī: te tathā A A2 B D.
- 246d cakṣur[n]īśritaṃ] A: cakṣuṇīśritaṃ A2: cakṣuviśritaṃ B D.
- 249c nāgatir na gatiś] A: nmāgatir jagatiś A2: nāgatir jagatiś B D.

- 254c °āgatigatī cāpi] corr.: °āgatigati cāpi A: °āgatigatiṃ vāpi B: °āgatir gatim cāpi A2: °āgatir gatim vāpi B.
- 255d saṃskṛtau] sic A A2 B D. Read *saṃskṛtam?
- 262 note] pāda b is hypermeter.
- 269c sarvām pūrvacarīḥ] corr.: sarvān pūrvacarīm A A2 B D.
- 270d saṃvṛtti°] sic A A2 B D.
- 274d : sarvajña°] A: sarvajñaḥ A2 D: sarvajño B.
- 275c saṃvṛtti°] sic A A2 B D.
- 278d *dadhyau] ex coni: dadhau A A2 B D.
- 283b °visaratkīrti°] sic A A2 B D. Read °*visaran kīrti°?
- 293a dadantu] sic A A2 B D. Read *dadatu?
- 294b *tat samāhitāḥ] ex coni: trisamāhitāḥ A A2 B D.
- 296bcd note] Words "*sadā śubhe / sarvāṃl lokān upāyena cārayeyuḥ*" are lacking in A2, B and D.
- 305b saṃvṛtti] sic A A2 B D.
- 311a °saṃvṛttir] sic A A2 B D.
- 312d saṃvṛtttau] sic A A2 B D.
- 328b durdṛṣṭiḥ] A B: durdṛṣṭāḥ A2: durdṛṣṭiḥ D.
- 329a samudikṣanto] corr.: samudikṣante A: samudikṣanta A2 B D.
- 333d phaṇāchattraḥ] A A2 D: phaṇātraḥ B.
- 335d °prāptāya te mudā] A: °prāptāya tan mudā A2 B D.
- 347c mahotsāhaṃ] A2 B D: sahotsāhaṃ A.
- 348a iti me *guruṇādiṣṭaṃ] ex coni: iti me[ma] purā[kṛtya]ṃ A (seconda manu!): iti mama purākṛtyaṃ A2 B: iti matvā purākṛtyaṃ D. **Note.** In A, letters of [ma] purā[kṛtya]ṃ are newly overwritten letters by the hand of a person other than the original scribe of A.
- 348c tathā tvam api ca śrutvā] A(ante corr.): tathā [ca mayi] ca śrutvā A(post corr.): tathā ca mayi tac chrutvā A2: tathā ca mapi ca śrutvā B: tathā ca matri ca śrutvā D.
- 349a saṃvṛtti°] sic A A2 B D.
- 350b śrutvā*śokaḥ] ex coni: śrutvā...aḥ A(ante corr): śrutvānandaḥ A (post. corr.; seconda manu!) A2 D: śrutvānaṃdaḥ B. **Note.** In A(ante corr.), letters of original scribe are lost by overwritten letters (seconda manu) of °ānandaḥ.
- (Colophon:) ity antaḥpurā] A: iti śrīlalitavistare antaḥpurā° A (marg.) A2 B D.
- paṃcadaśo 'dhyāyaḥ] A2 D: paṃcadaśādhyāyaḥ A: paṃcadaśodhyāyaḥ B.

5. 第15章の和訳（全訳）

後宮の歓楽の中にある菩薩への出離の勧発〔という〕品

かの阿羅漢、大通慧者である聡明な出家者ウパグプタはかのアショーカに再び話しかけて、次のように教示しました。― [1]

〔世俗法を行いつつ快樂を愉しむ菩薩〕

その後、かの菩薩サルヴァールタシッダは生類の益のために、世俗法⁽⁴⁷⁾を受持して、〔それに従って〕行動しようと欲しました。[2]

そして彼は後宮の中に住しつつ、世俗法の達成のため、八万四千の美女たちに付き添われて、愉しみました。[3]

それらの女たちの最高者である、名声高き（ヤショーダラー）かの美女、正妃ゴーパーは、サルヴァールタシッダ王子にとって最も愛しい善女でした。[4]

彼女とともに、欲するがままに快樂を享受し、飲んだ〔王子〕は、世俗法に愛著し、楽しみながら、〔その法に従って〕行いました。[5]

その〔後宮〕においてそのように楽しみながら、世俗法を成就し、家の伝統法に則った行為をする、かのサルヴァールタシッダに対して、[6] 梵天や帝釈天（インドラ）を始めとする神々、護世王たちすべて、またダーナヴァたち、ガルダたち、ナーガ（龍）たち、ヤクシャ・ガンダルヴァ・キンナラたちや、[7] 天女（アプサラス）の群を伴ったシッダたち、サーディヤたち、ヴィディヤードラたちも、〔菩薩を〕供養する行いへの切望に満ちて、来至しました。[8]

其処に、それらすべての生類、梵天や帝釈天などの神々がやって来て、かの大士（菩薩）に敬意を示して、嬉しげに〔供養を〕行いました。[9]

その後、かれら護世王たちは、かの〔菩薩が〕美女たちへの愛執にとらわれ、愛欲の享受に執着しているのを観察して、次の様に思惟しました。[10]

「ああ、栄耀と快樂に愛著している菩薩は、望むがままに快樂を享受し、楽しみながら、久しく後宮に滞留している。[11]

かつて〔前世に〕生類は彼によって四摂事をもって覚知せしめられ、〔彼の〕努力により正法に導かれてきた。[12]

47. saṃvṛtidharma を「世俗法」と訳した。この第15章テキストでは、saṃvṛti と saṃvṛtti の両方の綴りが用いられている。例えば311偈では、写本通りに saṃvṛtti と読まないと韻律が狂う。そのためその語を saṃvṛti の綴りに統一せず、写本に記された通りに、両方の綴りを記すことにした。

彼がやがて正覺に到達して正法を説く時、〔生類は〕欣然として聴聞し、信仰を完全にそなえ、覺知を得て、〔教えを〕行うことであろう。[13]

〔このまま出家せずにいると〕彼ら法器たる者（弟子たりうる者）たちすべてが生存から消え去ってしまったということになりかねない。その後この大士が出離して森に出て、[14] 甚だ困難な苦行を行じて、あらゆる苦行者たちを超え、阿羅漢としてマーラたちに勝利して、完全な悟りを得るということになるであろう。」 — [15]

このようにそれらすべての護世王たちは考えながら、彼を見つめながら合掌してお辞儀し、供養しました。[16]

「清らかな心をおもちのこの方は、王權や所有財を捨てて、出家して後、苦行を行じて、あらゆる苦行者たちを超え、[17] 菩提樹下に坐り、マーラたちの群にも勝利し、阿羅漢として悟りに達し、仏・世尊・ジナとして、[18] 十力をもち、大神通をもち、四無所畏の徳性をそなえ、〔十八〕不共仏法のすべてをそなえた牟尼の王として、[19] 世尊・三界の師として、法輪を転じつつ、すべての生類を、熱心な信仰に应えて正法に導くことであろう。[20] それなのに、いつになったら、私たちは見つめながら、この方の善説を聴聞し、法という不死の甘露を飲んで、涅槃を獲得することだろうか。」 — [21]

このように、それらすべての世界の守護者たちは心に思いつつ、彼を懸念する心を抱いて、まさにその〔彼のあり様〕を眺めながらいました。[22]

大神通をもつ、明敏なかの菩薩は〔気づいて〕そのことを考慮しつつ、一切法王・教師として、一切の有情を益することを求める者として、[23] 時を知る者として、出家の誓戒の達成における〔適した〕時を觀察しながら、世俗法に愛著し、美しい後宮で愉しんでいました。[24]

〔1回目の音楽からの勧請の声の出現〕

このように五感の感覺的享樂の対象に愛著しているその菩薩を見て、〔世界の〕十の方角にいるあらゆる仏たちは、〔彼に〕次の様に勧發しました。[25]

彼らの加持によって、其処で合奏のトゥールヤ樂器の音から、〔以下の如き〕菩薩を勧請するこれらの偈頌が現れ出ました。 — [26]

「大士よ、あなたはかつて誓願をなしました。〔その誓いを〕その通りに想起し、堅持して、今〔それを〕成就しなさい。[27]

〔かつて〕煩惱に乱された心をもつ有情たちが輪廻的生存に愛著しているのを見て、あなたの心は憐れみに襲われ、次の様に誓願を立てました。[28] 「救護のない生き物たちの世界で、私はひたすら救護を行おう。生き物たちを悟りへの道に安立せしめて、善行を行わせよう」と。[29]

この、あなたの誓願を成就するための時が今です。それ故、出離して、悟りに達し、
[あらゆる] 生類を「法から成る者」（如法に生きる者）にしてあげなさい。[30]

その[誓願の] ため、あなたはかつて前世においてすべての乞う者たちに、望むがままにあらゆる財物や食べ物を、幾度となく繰返し施してきました。[31]

[あなたの] 妻たち、息子たち、娘たちも、王権・国土・家なども、また自分の体と血と肉なども、頭と目と舌も、[32] 頸も、鼻も、耳・心臓・腸の管も、手・胸・足も、望むがままに与えました。（布施波羅蜜）[33]

その[誓願の] ため、[あなた] は清らかな心を持ち、感官・身体を制御し、善慧者として、勝れた戒・禁戒を愛好し、絶えず浄行をなしました。（持戒波羅蜜）[34]

その[誓願の] ため、大士よ、『忍辱』という水によって心性を洗った[あなた] は、あらゆる有情に益をもたらす、慈しみの禁戒を行じました。（忍辱波羅蜜）[35]

その[誓願の] ため、[あなたは] 偉大な『精進』という船に乗り、越えがたい『輪廻の生存』の海を越えゆき、生類の益のために働きました。（精進波羅蜜）[36]

その[誓願の] ため、[あなたは] 『煩惱』という邪悪な敵に打ち勝ち、感官を制御して、三昧・禪定を愛好し、集中して行修しました。（禪定波羅蜜）[37]

その[誓願の] ため、[あなたは] 『智慧』（般若）の大海の彼岸に達して、善慧者の最高の認識という貴い宝を獲得して、生類の益のために働きました。（智慧波羅蜜）[38]

その[誓願の] ため、清らかな心を持ち、四梵住をなす[あなたは] あらゆる有情に益をなしながら、悟りの禁戒を行じました。[39]

[あなたは] それらの福德により、清浄な性質をもつ者、三輪清浄なる者であり、無垢なる者として雲を脱した月のように光り輝いています。[40]

その[誓願の] ため、大士よ、あなたにとって今、一切のことが成就されねばなりません。それ故、出離して、出家し、菩提樹の根元に坐して、[41] マーウたちのすべての群に勝利して、あらゆる牟尼の王（仏）たちを禅思し、悟りを達成して、仏として、生類を「法から成る者」（如法に生きる者）にしてあげなさい。」 — [42]

以上のように、合奏のツールや楽器から生じた、仏たちが響かせた音声、大士・菩薩であるかの王子を勧発しました。[43]

それを聞いて、かの大士は過去の出来事を想起しながら、出離することへの意欲を心に抱いて、熟慮しながら、住しました。[44]

しかしまた、かの王子、善慧者たる菩薩の[住む] 後宮の、一切の相を具えた美しい高樓において、[45] 種々の宝石の光輝とあらゆる装飾品に飾られた、傘蓋・旗幟・幢幡などや鈴網に飾られた、[46] 上等の綿布や絹の彩布などと、最上等の衣と真珠の瓔珞が垂れ懸けられ、種々の宝石から出来た、輝く天蓋によって荘厳された、[47] 美と栄耀をそなえ、あらゆる資財の品々をそなえ、あらゆる季節の花々に覆われ、かぐ

わしい香りに満たされ、[48] 八種類の徳性をそなえた水が満ちた、紅蓮や青蓮などに覆われた、色々な鳥たちが沢山集まる幾つもの池を有し、[49] 飛び回る蜜蜂に覆われた様々な花や果をつけた樹々、河畔の樹々をそなえもつ大きな園林を有する〔王宮〕、[50] 瑠璃宝珠に近い〔光輝〕をもち、触れると快い地面のある、あらゆる季節の快さをそなえた、神々の宮殿に似た〔王宮〕において、[51]

ほしいままに食事をとって〔安楽に〕住みながら、〔その生活に〕愛著し、体に妙香を塗った、上等の綿布や絹の彩布のすばらしい衣を着た〔王子〕が、[52] 様々な宝石で出来た輝くあらゆる装身具の飾りによって、体を飾った、かぐわしい花と花鬘を着けて、[53] 上等の綿布や絹の彩布に覆われた、とても柔らかな寝椅子の綿〔蒲団〕の座席の上に、愛しい女たちや、美しい娯楽の世話人たちと一緒に上がり、[54] 自分自身の後宮に住しながら、かしずかれている時、美しく、華麗さに飾られているあらゆる女たちの群、[55] 神々しい美貌ととてもみごとな肢体を有する、愛情と愛欲に縛られた女たちは、合奏や踊りの遂行によって〔菩薩の〕心を高揚させました。[56]

〔2回目の音楽からの勧請の声の出現〕

その時、あらゆる牟尼の王たち（諸仏）の加持の威力によって、笛〔の音〕から菩薩を勧発する偈頌が現れ出ました。― [57]

「聖人よ、あなたは昔、とても苦しむ人々を見て、同情と憐れみの心で自ら誓願をなしました。[58] そのことを想起して、大士よ、今や三界の生類の益のため出離し、悟りに達して、法という不死の甘露を雨降らしてください。[59]

あなたは〔かつて〕すべての乞い求める者たちのために、望まれるがままに何かを喜捨しないことがあったでしょうか。今や、あなたの、その種子の芽から生じた果実を成就させなさい。（布施波羅蜜）[60]

聖人よ、あなたはかつて、禁戒や、なしがたい苦行をしなかったことが何かあったでしょうか。（持戒波羅蜜） また正覚への思いをもつあなたが忍辱をしなかった場所がどこにあるでしょうか。（忍辱波羅蜜）[61]

あなたによって一切の生類の益のために精進が達成されなかったことが、どれほどあるでしょうか。（精進波羅蜜） また禅思しながら、いかなる者の得た幸せをあなたが実現しなかったことが何かあったでしょうか。（禅定波羅蜜）[62]

智慧の海を越えて、輝かしい知の宝石を獲得して、〔あなたが〕いかなる者に幸せを与えず幸福にしなかったことがあったでしょうか。（智慧波羅蜜）[63]

聖人よ、あなたは次の様に誓願をなしました。「煩惱の火に焼かれている生類を、徳行の水をもって私は鎮火しよう」と。[64]

その〔過去の誓願の〕記憶をしっかり保ち、〔今〕ここで最高の悟りを得て、生類を悟りへの道へ導き、浄行を行わせてください。[65]

聖人よ、その〔誓願の〕ために、あなたは四梵住をなし、あらゆる有情に益を生じさせる禁戒を常に行じてきたのです。[66]

心堅固な方よ、あなたのかの〔誓願〕がここで今、成就されねばなりません。取るに足らない〔感官の〕対象に執着せず、出離を喜びなさい。[67]

その〔誓願に〕依拠して、かつて仏たちは最高の知を獲得しました。彼らの教示に基づき、仏の知を獲得しなさい。」 — [68]

再度また、他の若い美女たちが、琵琶の甘美な音色により、寝台に横たわる王子を見つめながら、このように覚知（気づき、目覚め）を得させました。[69]

〔3回目の音楽からの勧請の声の出現〕

その時、それらの琵琶から、あらゆる仏たちの威神力により、菩薩への勧発としてのこれらの言葉が出現しました。 — [70]

「聖人よ、かつてあなたは生類が煩惱の火に焼かれているのを見て、自ら誓ったとおりに、正覚への誓願を堅持してきました。[71]

今や、あなたが誓願を成就するためのその時がやって来ました。それを想起して、〔王宮を〕出離し、出家して、誓戒を行じながら、[72] 樹王（菩提樹）の根本に坐して、禪定し、マーウたちに打ち勝ち、悟りの知を達成して、仏の位を得てください。[73]

その後、生類の世界が煩惱の火に焼かれている場所であることを観察し、『法』という不死の甘露を雨降らして、悟りのために〔生類の世界を〕清涼たらしめてください。[74]

かつて、〔あなたが〕布施を好む王子であった時、あなたの前に婆羅門がやって来て、次の様に言いました。[75] 「王よ、もしあなたに信心があるのなら、私に王国すべてを布施して下さい。」それを聞いて、偉大な布施者であるかの〔王〕は彼に喜んで王国を与えました⁽⁴⁸⁾。[76]

またあなたが王の師であるバラモンであった時、あなたは勝れた戒を保ち、四梵住（慈悲喜捨）をなし、誰をも悩害することはありませんでした。[77] 誓戒の行いにより清らかな心をもつ者、正法の師長（グルと父母）に仕える者として、あなたはすべての有情を悟りへの道に安立せしめて、守護しました。[78] その福德によって清らかな心をもつ〔あなた〕は、身体の死没の後、天界へと去り、其処にとっても長い間住しつつ、常に浄行をなしました⁽⁴⁹⁾。[79]

48. 75～76偈は Lalitavistara 13章25詩節の本生話にあたる。この説話の詳細とパラレル（並行文献）については未詳。

49. 77～79偈は Lalitavistara 13章26詩節の本生話にあたる。パラレル未詳。

またその後、あなたは王の子に生まれ、聡明でした。その時も王国を捨てて、森に住して、あなたは苦行を行いました。[80] その「森」で、邪悪な王が憤怒してあなたの両手を切り落としました。しかしその時においても、正覚への心をもつあなたは、忍辱をなさいました⁽⁵⁰⁾。[81]

またあなたが仙人の子であった時、出家の誓戒を行じていましたが、その時邪悪な心の王が「矢で」あなたの体を切り裂きました。[82] その時においても正覚への思いを抱くあなたは忍辱をなさいました。あなたの心はスメール山のように少しも動揺しませんでした⁽⁵¹⁾。[83]⁽⁵²⁾

またあなたが鹿王であった時、男が河で流されてゆくのを見て、あなたはすばやく「彼を」運んで陸の上に安置しました⁽⁵³⁾。[84]

またあなたが王の子であった時、宝珠を海に落としました。精進力をもつあなたは「海の」水を干して、「宝珠を」獲得しました⁽⁵⁴⁾。[85]

50. 80～81偈は Lalitavistara 13章27詩節の本生話にあたる。忍辱仙本生。パラレルは岡田真美子 (1991), p. 585, No. 1 「忍辱仙」と岡田真美子 (1997), pp. 34-36 「身汁仙」を参照のこと。

51. 82～83偈は Lalitavistara 13章28詩節の本生話にあたる。シュヤマカ本生。パラレルは岡田真美子 (1991), p. 586, No. 2 「Syāmaku」 (*Śyāmaka) を参照のこと。

52. A2, B, D の3写本では 83d ～ 85c のテキストが欠損する。つまり83偈は pāda d が無く、84偈が全部無く、85偈は pāda d のみが存する。A 写本の後の時代の筆写師がうっかり 83c の後に 85d を書き、2偈分のテキストを飛ばしてしまったわけであろう。そのミスをした写本（未現存の1写本）から A2, B, D の3写本が派生したと考えられる。—— なお A2 がミスを犯し、そこから B, D が派生した可能性は無い。例えば 87b の箇所を見ると A は ripur me hartum と読み、A2 は ripuḥ prahartum と読み、B, D は nipur me haṃtum と読むが、ここで A2 は me が欠けているから、A2 から B, D が派生した可能性は無い。しかしまた B, D は haṃtum と誤った読みを有しているのに、A2 は正しく ḥartum と読んでいるから、B, D から A2 が派生した可能性も恐らく無い。110c では、A は svoruraktas, A2 は svānuraktas, B, D は svānaruktas と読み、A が正しく、A2, B, D の3者はどれも間違っているが、A2 の誤りは B, D の誤りから派生したものでないことは明らかである。このように A からの派生写本である A2, B, D の3写本は、同じ欠損を共有する一つの family に属する写本であるが、それら3写本のどれもがその family の親写本にはなり得ないことがわかる。それら3写本が欠損を共有する箇所は、他にもある。注の 42 を参照のこと。

53. 84偈は Lalitavistara 13章29詩節の本生話にあたる。パラレルは岡田真美子 (1991), p. 592, No. 40 「鹿」を参照のこと。なお鹿本生には「鹿（身代わり）」と「鹿（川渡し）」と「鹿（忘恩）」の3種があるが、本偈の鹿本生は「鹿（忘恩）」にあたる。

54. 85偈は Lalitavistara 13章30詩節の本生話にあたる。大施商主本生。パラレルは岡田真美子 (1991), p. 586, No. 5 「杼海」と岡田真美子 (1997), pp. 33-34 の「杼海」を参照のこと。

またあなたが大仙人であった時、婆羅門（もしくは鳥 dvija⁽⁵⁵⁾）が敵の恐怖から、あなたに助けを求めて来て、頭を下げ、このように懇願して「[言いました]」。[86] 「大仙よ、あの敵が私を拉致しようと、追ってきています。それ故、私はあなたに助けを求めます。あなたはどうか私を救ってください」と。[87] その時彼の敵が其処で大仙の前にやって来ました。その冷酷な心をもつ者は、殺すためにその婆羅門（もしくは鳥 dvija）を捕まえて引っ張ってゆきました。[88] 憐れみのない、冷酷で邪悪な彼を見て、同情に心を痛める「大仙」であるあなたは、その者に自分の体を喜捨し、その婆羅門（もしくは鳥）を守りました⁽⁵⁶⁾。[89]

また、あなたが住んでいる木の住まいにスヤム仙人（= スヤマ／シュヤマ仙人）が近づいて、「この樹にどれほどの数の葉があるか」と尋ねました。[90] それを聞いて、あなたは観察し、その樹にある葉がどれほどの数か、すべて数えて、その仙人に教示しました⁽⁵⁷⁾。[91]

またあなたが感官の対象に愛着せずに樹の住まいに「鸚鵡として」住していた時、その果実を食べながら、とても長い間苦行をなしました。[92] その後まもなくその樹が枯れて滅んでしまった時も、その「樹の」徳性を思い出しながら、その場所に居続けました。[93] そのこと（鸚鵡の生き方）を観察して、インドラ神が嬉心をもってその場所にやって来て、その樹を再び豊かに葉が繁茂した美しい姿にしました⁽⁵⁸⁾。[94]

このように、大士よ、あなたは悟りの知を欲し、大精進の熱意をもって苦行・誓戒を行いました。[95]

55. TJAM 86b, 88c, 89d にある dvija の語は「婆羅門」と「鳥」のどちらの意味にも取れる。Lalitavistara の相当箇所（13章第31詩節）にも dvija とあるが、外蘭幸一校定本の注によれば（上、966頁注55）、その語は蔵訳では bram ze（婆羅門）と訳されるのに対し、漢訳方広大莊嚴経では「鵠」と訳される。外蘭博士は「鳥」と訳すべきと判断し、そう訳す（939頁）。しかし TJAM 102a にある dvija の語は明らかに「婆羅門」を意味するので、TJAM の作者はこの 86～89 の箇所の dvija を「婆羅門」と理解している可能性がある。特に 86d の ānataḥ 「頭を下げた（お辞儀した）」の表現は人間的なしぐさであり、鳥らしくない。

56. 86～89偈は Lalitavistara 13章31詩節の本生話にあたる。主人公は仙人であるが、シビ王本生の異伝か。パラレルは岡田真美子（1991）, p. 597, No. 8 「Śibi 王《救鵠》」を参照のこと。

57. 90～91偈は Lalitavistara 13章32詩節の本生話にあたる。この Śyāma 仙パラレルについては Mamiko Okada & Yukihiro Okada (2008), pp. 273-274 を参照のこと。

58. 92～94偈は Lalitavistara 13章33詩節の本生話にあたる。Jātaka 429, 430 の「恩に感じた鸚鵡」の話。パラレルは岡田真美子（1991）, p. 593, No. 48 「オウム《枯木》」を参照のこと。Cf. H. Oldenberg: *Kleine Schriften*, S. 1072, 1074.

このようにすべてのことを想起して、この都城から出離して下さい。菩提樹の下に行って、結跏趺坐に坐し、[96] 禪定をなし、[四] 聖諦を達成し、克服しがたいマールたちに打ち勝ち、正覚の知を達成して、法という不死の甘露を雨降らして下さい。」 — [97]

以上の、これらの言葉を聞いて、かの菩薩・善慧者は、あらゆる過去の行為を想起しながら、瞑想に専念して過ごしました。[98]

〔4回目の音楽からの勧請の声の出現〕

すると〔先と〕同様に、他の美しい若い女たちが合奏とトゥールヤ楽器の音色によって、寝椅子にいる大士（菩薩）を、朝早く次の様に覚知（目覚め、気づき）を与えました。[99]

それらのトゥールヤ楽器の音からも、あらゆる仏たちの威神力により、菩薩への勧発としてのこのような偈頌が現れ出ました。 — [100]

「数千劫の生の間、菩提行の誓戒を行じてきている〔あなた〕は、誓願をなしたことをその通りに想起して、今や行動しなさい。[101]

あなたが聡明な婆羅門（dvija）であった時、あなたはすべての所有物を喜捨してしまい、人里離れた森の中に住して、悟りへの心を有し、禪定をして過ごしていましたが、[102] その時、飢えに苦しむ雌虎を見ると、あなたは同情に心を痛め、自分の体を投げ捨てて、仔らを連れた彼女を救護しました。[103] [Cf. MJM 43; JMAS 1]⁽⁵⁹⁾

またあなたがシビ王であった時、やって来た盲目の婆羅門を見ると、自分の両眼を彼につけてやり、目が見えるようにしてやりました。[104] [Cf. MJM 44; JMAS 2]

またあなたが一切の〔生類の〕益を願求するマイトリーバラ王（慈力王）であった時、自分の血と肉をもってヤクシャ（夜叉）たちを満足させました。[105] [Cf. MJM 46; JMAS 8]

またあなたが兎であった時、森で食物を求める婆羅門に、自分の決意により、歓然として自ら火の中に飛びこみ、自身の体を与えました。[106] [Cf. MJM 47; JMAS 6]

またあなたがヴィシュヴァンタラであった時、すべての乞う者たちが欲したものを叶えんとする者として、婆羅門たちに、自分の息子と娘と貞淑な妻を与えました。[107] [Cf. JMAS 9]

59. ここの TJAM 15章102～127偈に出てくる沢山の本生話は、Lalitavistara には対応する詩節が見当たらない。この箇所は TJAM の独自内容の偈頌であり、本論文の第2部の「2. 第15章第102～127偈の検討」において検討した。この和訳では短く [Cf. MJM 43; JMAS 1] という様な形で、TJAM のこの独自の創作箇所の直接的なソースと思われるパラレルだけを示すにとどめる。

またあなたが神々の王であった時、あなたは生き物たちが飢えに苦しんでいるのを見て、ソーマ（巨大な虫の名）となって、血を伴った自分の肉によって、健康にしました。[108] [Cf. **MJM 8; JMAS 43**]

またあなたがルーピヤーヴァティー（女）であった時、〔生まれた〕子に対する飢えと渇きに苦しめられている女（その子の母親）を見て、自発的に自分の乳房を切って、食べさせました。[109] [Cf. **JMAS 47**]

またあなたがジュニャーナヴァティー〔王女〕であった時、悪瘡に苦しむ導師（グル）を見て、自分の腿の血と肉をもって、彼を腫瘍の無い健康な状態にしました。[110] [Cf. **JMAS 38**]

またあなたがマニチューダ〔王〕であった時、すべての乞う者たちの願いを満たす者として、自分の血と肉、また息子、妻を、そして如意宝珠から生じた物を与えました。[111] [Cf. **MJM 49**]

またあなたがサルヴァンダダ〔王〕であった時、あらゆる有情の益を願求する者として、四肢すべての肉を与えて、鴿を逃れさせてやりました。[112] [Cf. **MJM 45; JMAS 37**]

またあなたが巨大な象王であった時、飢えていた人々すべてを、自分の肉と血をもって、健やかで安楽な者にしてあげました。[113] [Cf. **JMAS 30**]

またあなたがスプラバーサ（光明王）であった時、象の御者の教えのおかげで、菩提への誓願を獲得して、菩薩の禁戒を行じました。[114] [Cf. **MJM 7; JMAS 0.3**]

またあなたがサムドラレーヌという婆羅門であった時、正覚の成就のため、あらゆる人に覚知を得させ、正法に導きました。[115] [Cf. **MJM 10, 31, 32, 33**]

またあなたがチャンダーラ（旃陀羅）であった時も、ブンヤバラ（福力）という名の王として、あらゆる有情の益をなす菩提行の誓戒を行じながら、[116] 望まれたとおりに布施して、あなたはすべての有情を喜ばせ、〔自分の〕皮と肉、両目を与えて、〔それらを〕求めた者たちを満足させました。[117] [Cf. **MJM 34**]

またあなたがダルマーカラ王であった時、あらゆる有情の益を願求して、〔自らの〕舌と両耳を与えてまで、求めた者たちすべてを喜ばせました。[118] [Cf. **MJM 35**]

またあなたがドウルダラ王であった時、〔自身の〕全身のあらゆる部分をも常に与えながら、病に苦しむ有情たちを健やかな状態にしました。[119] [Cf. **MJM 36**]

またあなたがプラディーパ・プラドヨタ王仙であった時、海で邪悪な敵（大羅刹）につかまった（grasita 吞まれた）商人たちを見て、〔彼らを救い〕正法に導き入れました。[120] [Cf. **MJM 37**]

またあなたがスシッダールタ・マティという長者であった時、あらゆる財を〔如意宝珠によって〕雨降らし、生類を幸・美・楽を完全にそなえた者にして、浄行（善行）をなしました。[121] [Cf. **MJM 38**]

またあなたがスールヤマーラガンダ仙人であった時、あらゆる災害を鎮めました。あらゆる所で栄耀ある浄行に努力し、あなたは常に浄行を行じました。[122] [Cf. **MJM 39**]

またあなたはアンバラ王であった時、妻・息子・娘たちも、一切の所有物と王国も、また〔自身の〕四肢・あらゆる体の部所も与えた後、[123] さらに幾度も、全身を〔山のような大きさに〕増大させたあなたは、一切の感官を与えながら、全身の血や肉〔の布施〕をもってあらゆる生類を満足させました。[124] [Cf. **MJM 40**]

またあなたは龍（蛇王）になって、七度も地上に伏蔵（地中に隠された宝蔵）を出現させながら、すべての生類を覚知せしめ、三乗に導きました。[125] [Cf. **MJM 41**]

またあらゆる有情の益を願求するあなたは、チャンドラプラバ（月光）王であった時、〔自分の〕頭すらも布施して、乞い求める者たちすべてを喜ばせました。[126] 正覚に向かう心をもつあなたは、そのように千回も頭を布施してきたのです、あらゆる有情の益をなす、菩提行の誓戒を行じながら。[127] [Cf. **MJM 48; JMAS 46**]

このように、あなたは幾千コーティの劫の間、幾千の生において、正覚への誓願により欣然とあらゆる布施をしてきたのです。[128]

そのすべてを想起して、生類の益のため、ここで出離しなさい。正覚の知を得るため、あなたにとって今がその時なのです。」 — [129]

このように〔語る〕その声を聞いて、善慧者であるかの菩薩はそのすべてを想起し、ひたすら瞑想に専念して過ごしました。[130]

〔5回目の音楽からの勧請の声の出現〕

更にまた、他の美しい若い女たちはトゥールヤ楽器の合奏の音をもって、寝台にいるかの大士（菩薩）に次の様に覚知（気づき、目覚め）を与えました。[131]

その時、そのトゥールヤ楽器の音声から、あらゆる仏たちの威神力によって、これらの菩薩への勧発としての偈頌が現れ出たのです。 — [132]

「その〔菩提の誓願の〕ために、清らかな感官をもつ賢者であるあなたは無数の劫の間、布施などの誓戒を堅持し、一心に〔戒の〕行をなしました。[133]

幾千コーティの劫の間、浄戒を保ちながら、感官を制したあなたは、仙人の行における誓戒を堅持し、生類の益のために行をしてきました。[134]

出家の禁戒を堅持し、梵行に専心し、煩惱なく、清らかな心をもつ聖者（阿羅漢）として、仏教の誓戒を行じました。（以上、持戒波羅蜜）[135]

無数幾千の生において四梵住をなし、忍辱の誓戒を保ち、三界の生類のために〔忍辱を〕行じました。[136]

敵である王や賊によって、王国などやすべての財が奪われた時も、また矢が身体を射た時も、あなたの心が乱されることはありませんでした。[137]

それらの危害をなす敵たちにおいても、あなたは常に忍辱を持ちました。あなたの心において喜びが乱されることは決してありませんでした。（以上、忍辱波羅蜜）[138]

生類・有情の幸福という目的を達成するため、あなたの偉大な精進において、〔襲来した〕あらゆるマーウたちの群によっても、大士であるあなたは揺るがされることはありませんでした。[139]

幾千コーティの生の間、精進行の誓戒をなしながら、あらゆる有情に益をなし、善き徳行を常にあなたは行いました。[140]

努力して悪人たちも極悪人たちも救済しながら、あなたは気づきを得させて、正法に導き、行をさせました。[141]

あなたは極悪人たちすら浄化して、地獄からであっても引き上げて救い、生類の益のために悟りの道の上に置いて、行をさせました。[142]

このようにあなたはあらゆる邪悪な敵たちに打ち勝って、気づきを得させ、あらゆる有情に益を生じさせるため、菩提への道へと導いてきたのです。（以上、精進波羅蜜）[143]

あなたが〔これまで〕なさらなかった布施は何でしょうか。行じなかった誓戒は何でしょうか。忍辱をなさらなかったのはどんな時でしょうか。〔これまで〕誰に益をなさらなかったでしょうか。

〔また〕このように、大通慧者〔たるあなた〕は禪定をしながら煩惱の敵たちや邪見の者たちに勝利し、三昧に専念した心であっても、あらゆる有情を益することを行いました。（禪定波羅蜜）[145]

様々な姿を取って、一切処、あらゆる世界を遊歴しながら、救済し、覚知せしめながら、あらゆる有情たちを法に導いてきました。[146]

〔あなたは〕雨雲のように、あらゆる生類の上に教法という不死の甘露を雨降しながら、悟りの達成のために、あらゆる有情たちに法を行わせました。[147]

一切の『学問』と『徳性』という〔広大な〕諸海を越え渡って、生類の益のため、般若（智慧）の知という偉大な宝石を獲得して、光り輝きながら、[148] 無明という闇を破り、法という松明をあなたは燃え輝かせました。あらゆる生類を法の道の上にしつかり立たせ、〔法を〕行わせました。（智慧波羅蜜）[149]

このように、一切処で生き物たちを太陽のように照耀しながら、生類の世界を浄化しながら、あなたは照らして、法を行わせました。[150]

以上のように、誓願を堅持しながら、あなたは菩提行を喜んで行ってきました。あなたはその〔誓願〕を今や成就して下さい。三界の生類の益のため、出離して下さい。」 — [151]

このすべて〔の声〕を善慧者であるかの菩薩は聞いて、過去の出来事を想起し、気づきを得た彼は、瞑想しながら過ごしました。[152]

〔6回目の音楽からの勧請の声の出現〕

また更に、他の若い美女たちが、合奏の甘美な音によって、自己知を有する者として寝椅子に坐しているかの菩薩に覚知（気づき、目覚め）を与えました。[153]

その合奏の美しい音色から、あらゆる仏たちの威神力によって、菩薩への勧発としてのこれらの偈頌が現れ出たのです。― [154]

「正覚への誓願をもつあなたによって、〔これまで〕あらゆる仏国土の一切の仏たちは恭敬供養されて、歡びました。[155]

初めに、最初の劫においてあなたは牟尼の王（仏）アモーガダルシンに会って、淨信の心をもってシャーラ樹の花々で敬意を示しました。[156]

その後、淨信をもつあなたは師ヴァイローチャナ〔仏〕と会って、自分を見つめている仏に明淨の心をもって供養し奉侍しました。[157]

また、あなたはハリータキーの実を差し上げて、ドウンドウビスヴァラ〔仏〕を満足させました。また、あなたは干し草の松明をもって、チャンダナ〔仏〕を都城で道案内しました。[158]

あなたはまた、レーヌ〔仏〕と会って、明淨の〔心〕により、黄金の粉末をもって供養しました。またあなたはダルメーシュヴァラ〔仏〕と会って、「すばらしいことです」（善哉）と賞讃の言葉を述べました。[159]

また、サマンタダルシン〔仏〕と会って、あなたは「南無」と唱えることにより、〔かの仏を〕満足させました。あなたはまた、マハールチスカンディ〔仏〕を見て、黄金の花環をもって敬意を示しました。[160]

あなたはまた、ダルマドヴァジャ〔仏〕に灯芯をもって、ロードゥ〔仏〕に一握りの豆をもって、またジュニャーナケートゥという名の〔仏〕にアショーク樹の花々をもって、敬意を示しました。[161]

あなたはまた、サーラティ〔仏〕に粥の飲物をもって、また欣然とラトナシキン〔仏〕に灯明をもって、また欣然とパドマヨーニ〔仏〕に特効ある薬草をもって、敬意を示しました。[162]

あなたはまた、牟尼の王サルヴァービブーに真珠の璽珞をもって敬意を示し、またサーガラ〔仏〕に欣然と蓮の花環をもって常に敬意を示しました。[163]

あなたはまた、パドマガルヴァ〔仏〕に天蓋をもって、またシーハ〔仏〕に上等の綿布の敷物をもって、またサーレーンドラ・ラージャという名の〔仏〕にあらゆる物をもって、またプシュピタ〔仏〕に乳をもって、敬意を示しました。[164]

あなたはまた、ヤショードatta〔仏〕にクルンタの花々をもって、またサトヤダルシン〔仏〕に食物をもって、またジュニャーナ・メール〔仏〕に身を屈しての礼拝をもって、敬意を示しました。[165]

あなたはまた、欣然とナーガダッタという牟尼の王（仏）に多くの衣をもって供養し、またアティウッチャ・ガーマン仏に栴檀をもって敬意を示しました。[166]

あなたはまた、ティシュヤ〔仏〕に塩の一握りをもって、またマハーヴューハ〔仏〕に蓮華の花々をもって、またラシュミ・ラージャ〔仏〕に幾多の宝石をもって、またシャーキャムニ〔仏〕に幾枚もの黄金をもって、[167]

またインドラケートウ〔仏〕に良き讃歎の詩をもって、またスールヤーナナ〔仏〕に幾多の耳飾りをもって、スマティ〔仏〕に黄金のターバンをもって、またナーガービブー〔仏〕に幾多の宝珠をもって、[168]

あなたはまた、プシュヤという牟尼の王に更紗の坐具をもって供養し、またバイシャジャ・ラージャという〔仏〕には宝石の日傘をもって供養しました。[169]

その後あなたは、シンハケートウという〔仏〕に坐具をもって敬意を示し、その後グナグラダーリン〔仏〕に両掌いっぱい宝石をもって敬意を示しました。[170]

またカーシャパ〔仏〕にあらゆる楽器をもって、またガンダーグリ〔仏〕に〔香〕粉を散じることをもって、また牟尼の王アルチケートウに花のチャイティヤをもって供養しました。[171]

その後、アクショービヤ・ラージャ〔仏〕に重閣（高樓）をもって敬意を示し、またローカプーヅタ〔仏〕をよい香りの花環をもって飾りました。[172]

その後、タガラシキンという名の〔仏〕に自分の王権〔の布施〕をもって敬意を示し、またジャヤという名の〔仏〕にあらゆる香をもって、またマハープラディーパ〔仏〕には自分自身〔の身体〕をもって、あなたは〔供養しました〕。[173]

あなたはまた、あらゆる宝石で飾られた幾つもの装身具をもってパドモータラ〔仏〕に、またよい香りのする美しく飾られた花々をもってダルマケートウ〔仏〕に、また篤い尊崇の思い（バクティ）によりディーパカーリン〔仏〕に幾多の大青蓮をもって、敬意を示しました。[174]

あなたはかの〔誓願の〕ために、これらの〔諸仏〕をはじめとする仏たちに敬意を示してきました。その〔誓願の〕目標を今思い出して、三界の生類の益のため、出離してください。[175]

最初の〔阿僧祇〕劫において、シャーキャムニから始まりドリタラーシュトラ仏に至るまでの七万五千の仏たち、[176] それらの仏たちにいつも信心をもって供養し続けて、あなたの心が疲倦することは、どんな時でも少しもありませんでした。[177]

また第二の〔阿僧祇〕劫において、ディーパンカラ（燃燈仏）からチャンドラ・ドヴァジャという牟尼に至るまで、七万六千の仏たちにあなたは供養しました。[178] それらの仏たちにも絶えず供養し続けて、あなたの心が疲倦することは、どんな時でも少しもありませんでした。[179]

その後、第三の〔阿僧祇〕劫において、クシェーマンカラ仏からカーシャパ仏に至るまで、その間において絶えず、[180] 七万七千の仏たちにあなたは供養しましたが、あなたの心が疲倦することは、どんな時でも少しもありませんでした。[181]⁽⁶⁰⁾

かくも多数の、三界の生類の守護主（仏）たちに帰依しながら、正覚の誓願により、三界の生類の益のため、あなたは〔彼らに〕供養したのです。[182]

そのすべてを想起して、また生類が煩悩に満ちて混乱しているのを見て、あなたが誓ったとおりに今〔その誓いを〕完全に成就して下さい。[183]

あなたが心悅んで帰依したかの〔仏たち〕は皆、涅槃した状態にあります。あなたにとっても、涅槃の時が今、近づいています。[184]⁽⁶¹⁾

あなたの〔前世の〕かくも多数のすべての身体はどこに行ったのでしょうか。輪廻界は〔必ず〕滅することで終わる性質をもつことを考えなさい。有為〔法〕においては常性（永続性）は無いのです。[185]

王位・愛欲の幸せの享受は無常であり、刹那のみの存続性を有するものです。老い・病・死、これらはすべての〔生き物〕たちの前にいつもあります。[186]

諸煩悩は大変邪悪なものであり、あらゆる法と幸せに終わりをもたらします。身体は刹那に滅ぶ、はかないものです。〔あらゆる〕生命は草の露の一滴のようなものです。[187]

大士よ、このように考慮して、誓願を思い出し、出離して、悟りに到達し、三界の生類を益して下さい。」 — [188]

これらすべて〔の声〕を聞いて、菩薩は気づきを得て、前世の出来事すべてを想起し、ひたすら瞑想に専念して過ごしました。[189]

〔7回目の音楽からの勧請の声の出現〕

その後、他の若い美女たちが、笛の合奏の音声によって、寝椅子に坐しているかの王子に覚知（気づき、目覚め）を得させました。[190]

その時に笛の音から、あらゆる仏たちの威神力によって、生類の師（菩薩）に対するこれらの勧発の偈が発せられたのです。 — [191]

「煩悩の火に焼かれる三界の生類の世は無常であり、老いと病と死滅という火の苦熱によって焼かれています。[192]

60. この176～181偈の、菩薩時代の釈尊が三阿僧祇劫に出会った諸仏の名に関する記述は、Lalitavistara 13章に相当する文が見当たらないため、TJAMの作者が別の伝承（有部ではなく大乘の伝承か）に基づいて、独自の内容を追加した箇所と見なしうる。

61. A2, B, Dの3写本はどれも183偈と184偈のテキストが抜けている。

蜜を欲しがって、蜜の壺に入り込んだ〔出られずにいる〕愚かな蜜蜂の如く、生き物たちは愛欲の享樂を欲して、三界の中をさまよい廻ります。[193]

三界は堅固ならざるもので、秋空の雲のように脆くはかないものです。〔それは〕舞台劇に等しいもの、また稲妻、山の溪流の水面の波のようなものです。[194]

〔生類は〕六道において、地上と神々の都と惡趣（悪い世界、地獄・餓鬼界）の間を常にさまよい巡ります。無明に支配され、あらゆる煩惱に心が束縛されています。[195]

あらゆる生類は陶工の〔回す〕轆轤のように〔輪廻界を〕どこまでも転じ続けています。滝川の水の勢いのように決して止まることはありません。[196]

いつも愛しい者への眺め、その姿形、愛らしい声によって、快い香りによって、美味によって、最高の触の快感のある享樂によって、愛著を抱いたこれらの生類すべては、まるで猟師の罠にかかった獲物、一匹の猿のように、カリ（罪深い惡世）の〔仕掛けた〕罠にかかり、捕らわれています。[197-198]

五種の感官（眼・耳・鼻・舌・身）の感覺的享樂は、常に恐怖を伴い、欲望を伴い、仇敵を伴っています。それらは刀の刃に似て鋭利であり、毒の葉の如くに不健康です。聖者たちは〔それら五種の〕感官享樂の欲望を、まるで糞尿の壺のように卑しみます。[199]

〔それらは〕記憶を枯らし、〔知性を覆う〕闇をもたらし、恐怖の原因であり、苦の根であり、貪欲・煩惱という蔓を繁茂せしめるものです。[200]

〔それらは〕燃える火坑のようなもの、大きな泥地のように甚だ越え難いもの、毒が塗られた矢のようなものであり、また蜜が塗られた剃刀のようなものです。[201]

賢者たちは〔五種の〕感官享樂の欲望を、大きな毒の器である蛇の頭の宝石のように、〔美しいが危険なものと〕認識して、避けます。[202]

幸・美・徳性・よき名声・正法の利を破壊するものである〔感覺的享樂の欲望〕は、まるで鳥の肉片〔の串刺し〕に似た〔処刑用の〕串棒のように〔生類に〕苦をもたらしめます。[203]

〔それらは〕骸骨をめぐって犬たちがする、大きな憎惡の喧嘩のようなものです。〔諸々の〕見られるもの（美しいもの）は、水中の月に等しい〔虚ろな〕もの、〔鏡中の〕反射像である自分の像〔の如く〕です。[204]

〔それらは〕木霊のようなもの、夢のようなもの、舞台劇のようなもの、影像のような虚偽のもの、幻や陽炎に似たものです。[205]

〔それらは〕刹那滅であり、空虚であり、空っぽであり、妄想から生じたものです。実体がない水の波、泡・あぶくのようなものです。[206]

聖者たちは〔それらの〕欲望が無実体のものを作りだしていると、〔欲望を〕咎めます。実体がないものが愚者たちによって愛され、美しいものとして甘く語られ、欲されるのです。[207]

若くても、好ましい人、美人から愛される者であっても、役立つ人、親友であっても、老いや病に侵された時に、感官が害されて無力になった〔彼〕を見ると、誰もが、家族でさえも、無慈悲に〔彼を〕見捨てます。[208]

美の輝かしさをもつ者、大財産者である間は、〔人は〕あらゆる人から愛され、親友となりますが、〔その〕魅力を失った時、彼は自分の家族からさえ見捨てられるのです。[209]

〔人が〕繁栄の家において一切を具足している間は、すべての人々から愛され、役立つ人に見なされますが、繁栄が減び去った時、まるで悪人・仇敵のごとき〔扱い〕となります。[210]

〔人が〕美と徳性を十分具えて、あらゆる願いをかなえる施者である間は、その間だけ、花と果実に覆われている一本の樹のように、求め来る者たちから愛されます。[211]

たとえ徳性ある者であっても、財産が尽きて、施す者でなくなり、乞い求める者となれば、〔誰からも〕空を飛ぶ悪しき禿鷲のように嫌悪され、恐怖されます。[212]

〔人が〕有力者で、財産と力を有し、すべての人を益することを願い、賢者たちとの出会いを愛する者である間は、〔皆を〕悦ばせる者、親友、役立つ者です。[213]

しかしそんな人であっても、財と力が失われ、あらゆる仕事に意欲を喪失した時、まるで悪しき敵・蛇・死神のように〔誰からも〕厭われる者となることでしょう。[214]

〔人が〕若くて、正法・美・徳性の達成のために大きな活力をもつ間は、〔彼は〕すべての者から愛される者として、兄弟・主人・親愛なる者・友・血縁者のように〔扱われます〕。[215]

しかしその人も、身体が老衰に襲われ、感官が衰えれば、〔皆から〕見捨てられます。まるで干上がった湖池がすべての鳥から見捨てられるように。[216]

あらゆる生き物は老いによって枯れてゆくものであり、生存〔状態〕の推移（老衰）を有します。それはあたかも一つのマール蔓草によって、密生したシャーラ樹の森全体が枯れてしまうようなものです。[217]

老いは美しい容貌を奪い、精進と力と意欲を滅ぼしてしまいます。老いは強さと活力と安らかさを奪い、病と死をもたらします。[218]

病は種々様々あり、それらすべては死の使いであると言われます。草木が雪によって苦しめられるように、いったい誰が病によって苦しめられないでしょうか。[219]

病は、力ある敵意をもつ者〔の如く〕、すべての感官を害し、〔人から〕徳性・精進・力・強さを奪い取り、あらゆる目標を消滅させます。[220]

病は、まるで火のように全身を激しい熱苦で焼くものであり、まるで酔い狂うブータ（悪霊）や餓鬼の如く邪悪なものであり、正しい意識（憶念）を〔人から〕奪い取ります。[221]

〔病は〕家の伝統法に則った行為や制戒・誓戒を消失させます。命を滅ぼして、天啓文学・聖伝文学の〔伝承の〕維持を破壊します。[222]

死は、〔生から〕落ちること、生氣（生命の呼吸）とあらゆる感官からの離脱です。いとし妻や子供や家族や親族や友人との離別をもたらすものです。[223]

〔死は〕樹から脱離して落ちた一葉の如く、もう繋がりが二度ともてなくなることで。死とは、川の流れて流されて行くように、自分の意志ではどうにもならず去り行くことです。[224]

死は、川が木材を奪い去ってゆくように、あらゆる生き物たちを掠ってゆきます。死期を迎えた人間は、たった独りで去りゆき、伴侶を伴うことはできません。[225]

〔死んだ者は〕運命が示す道に従って、〔自分の〕業を道連れとして、歩みゆきます。自業自得を味わいながら、六道の中を彷徨うのです。[226]

死は、ガルダ鳥が蛇を呑むように、あらゆる者を呑み込みます。死は、猛火のように、被創造者の群の一切を焼き滅ぼします。[227]

それら（生老病死）の苦しみによって、煩惱をもつあらゆる生き物たちが焼かれているのを見て、〔あなたはかつて〕誓った通りに今〔誓願を〕実現して下さい。[228]

その〔誓願の〕ため、あなたは十の波羅蜜を完成させたのです。その〔誓願の〕記憶を保持しながら、ただちに今、出離して下さい。」 — [229]

これらの声を聞いて、菩薩は気づきを得ました。彼はすべてのかの〔前世〕を想起して、ひたすら瞑想に専念して過ごしました。[230]

〔8回目の音楽からの勧請の声の出現〕

その後、また別の若く美しい女たちは、〔弾く〕琵琶の音によって、寝椅子に横たわる菩薩を楽しませました。[231]

その琵琶と歌唱の音の中から、あらゆる仏の威神力によって、菩薩を勧請するこれらの声が現れ出ました。 — [232]

「あなたも輪廻の回り続けていることを認識して下さい。現象（サンスカーラ）がわずかの間のみ持続することは、あたかも虚空における瞬時の〔稲妻の〕輝きの如くです。[233]

かの〔誓願の〕ため、あなたは種々の供養によって一切の善逝たちに奉事しました。あなたのその〔誓った〕すべてを成就して下さい。それをはっきり認識し、出離して下さい。[234]

諸々の現象（サンスカーラ）は無常であり、生土器のようにすぐ壊れるものです。〔それは〕子供が遊びで積み上げた、美しい砂の城に似ています。[235]

現象（サンスカーラ）は壊れるという性質をもっています。〔それは〕雨季の雲、また砂を含んだ川の堤防の如く〔脆いもの〕です。作られた現象（サンスクリタ）は心に依拠しています。[236]

現象（サンスカーラ）は縁に依って〔生じます〕。力なく灯っているランプが野外で風によって〔明滅する〕ように、たちまち生じては滅するものです。[237]

それは水泡の塊のように、芭蕉の幹のように、堅実ではなく、意欲を欠いた、空っぽなものです。不可思議の手品（マーヤー）のごとく、心を幻惑させるものです。[238]

それは、幼童を欺すようなもの、無意味なもの、〔何も中に無い〕空のこぼし（空拳）のようなものです。諸々の因と縁によって、現象（サンスカーラ）は起こっています。[239]

それが相互に依って生じたものであると、愚かな者たちは気づきません。〔それは〕ムンジャ草を縁（材料）として「縄を編むこと」が起こるようなものです。[240]

揚水の桶をもつ機械（水車）は、ばらばら〔の部品〕では回転しません。そのようにあらゆる存在の部品（支分）は、相互に依存しあっています。[241]

〔存在の部品は〕それぞれ別には存在しません。また前際（過去時）と後際（未来時）に〔分けられるものでは〕ありません。種子から新芽が生じますが、種子はまた新芽から生じるのです。[242]

それ（種子・新芽）からでなく、相互によってであり、このように〔現象は〕不断であり不常です。真実には、無明に依って（原因・縁として）、諸々の現象形成力（サンスカーラ、十二縁起の「行」）が生じるものではありません。[243]

なぜなら、無明もまた空なるものであり、〔そこから〕どうして諸々の現象形成力（サンスカーラ）が生じるのでしょうか。印影（刷られたもの）は印（版型）のとおり〔現れます〕が、〔印影は印が〕転移したものとは認知できません。[244]

そこにおいて常性も断滅もありません。また現象形成力（サンスカーラ）においても同様に両者はありません。非我であり、かくして、空性です。「我はない」と分別されます。[245]

眼と色とを縁として、〔眼〕識が生じます。しかし眼は色に基づいてあるのではなく、色は眼に基づいてあるではありません。[246]

識はいったいどこに存し、どのようにその生起と消滅があるのでしょうか。それはどこから来て、どこに去るのでしょうか。——〔それは〕まるで幻の発生のようなです。[247]

火が、手〔の擦る力〕・〔下の〕火切り板・上の火切り杵〔の結合〕から生じるように、現象（サンスカーラ）も同様に、一者からではなく、三者の結合から生じます。[248]

〔それは〕生じて、所用をなし終えて、消え去ります。〔それは〕どこに探されるべきでしょうか。かの現象（サンスカーラ）が来ることも去ることも認知できません（不可得です）。[249]

〔五〕蘊・〔十八〕界・〔十二〕処は、無明を有する者の業（カルマ）によって〔あります〕。一つの総体として「有情」（生き物）が生じますが、勝義においては彼は存在しません。[250]

喉と唇と口蓋から〔種々の〕シラブル（語音）が発生しますが、それら〔シラブル〕は総体として生じたものであって、個々の〔原因〕からは知り得ません（不可得です）。[251]

心と知性により、口から言語の音声が見え出ます。その〔言語の音声〕に似たものは、〔人の体の〕外側にも内側にも見当たりません（不可得です）。[252]

〔楽器の〕木材と絃に依り、また手の動きとの結合によって、琵琶の快い音が出ますが、輪廻の生存（有）もそれと同様です。[253]

その〔琵琶の〕音はどこから来て、どこに去り、また〔どこに〕とどまるのでしょうか。その来ること・去ること・持続することは、知り得ません（不可得です）。[254]

因と縁が合わさることにより、現象（サンスカーラ）が生じます。事物の真実を観察するヨーガ行者は、作られた現象において空（くう）を見ます。[255]

諸々の有情（生き物たち）とは、内でも空、外でも空であり、虚空の如き法であり、所依なく、ばらばらの部分（構成部分）を有しつつ、現象（サンスカーラ）としての法相をもちます。[256]

ディーパンカラ（燃燈仏）の恩恵により、あなたは覚醒を自ら得ましたが、それと同じ様に、生類の世界すべてに恩恵を与え、覚醒させて下さい。[257]

これらの生類が、妄分別による煩惱の熱火に焼かれているのを見て、雨雲の如く教法という不死の甘露を雨降らして、〔彼らを〕爽快にさせてください。[258]

あらゆる者の幸福と益の成就のため、あなたは〔これまで〕布施をして来ました。正法の完全な達成を得て、生類にも〔その教えを〕分け与えて下さい。（布施波羅蜜）[259]

〔あなたは過去に〕勝れた戒行と禁戒を堅持して、常に浄行を行じてきました。〔今や〕同じ様に、この生類すべてに勝れた禁戒を行わせてください。（持戒波羅蜜）[260]

〔あなたは〕常に忍辱の禁戒を堅持し、偉大な徳行を達成してきました。〔今や〕同じ様に、この生類すべてに常に忍辱という禁戒を行わせてください。（忍辱波羅蜜）[261]

あなたは精進と大勇猛心をもって〔生類の〕幸福と益の達成を行って来ました。〔今や〕同じ様に、精進と大勇猛心をもつての浄行を生類に行わせて下さい。（精進波羅蜜）[262]

あなたは禅定をなし、仏たちを憶念し、あらゆる三昧を得ました。〔今や〕同じ様に、すべての生類を禅定と三昧に導いて下さい。（禅定波羅蜜）[263]

あなたは智慧の海を越え渡って、知の宝石を手に入れました。その〔知の〕宝石という見事な輝きのランプによって、生類の暗愚の闇を取り去って下さい。（智慧波羅蜜）[264]

それらの前世の行為を想起して、あなたがかつて誓願した通りに、生類の幸せを作るために、出離して下さい。輪廻的生を楽しむべきではありません。[265]

生類すべてが煩惱の火の苦熱に焼かれているのを観て、出離し、打ち勝ち難いマール（魔）たちに勝利し、悟りに到達して、[266]

聖なる教法を説き示し、生類に善をなさしめて下さい。煩惱の炎を鎮め消すため、教法という不死の甘露を雨降らせて下さい。[267]

三界の生類がマールの行いを楽しんでいるのを見て、看過しないで下さい。出離して、悟りに達し、菩提行を明らかに教示して下さい。」 — [268]

これらの〔勧請の〕声を聞いて、気高い思いをもつ菩薩は、あらゆる前世の行為を想起し、ひたすら瞑想に専念して過ごしました。[269]

〔勧発の声を聞いた後の菩薩〕

かくして、世俗法の快樂をそなえた菩薩は昼夜、後宮の中にいながら、仏たちの教法という不死の甘露を飲んで、楽しみました。[270]

かの大士は前世においても、常に正法を熱望し、欣然と教法を聴聞して楽しみ、法を説く者たち（ダルマ・バーナカ）を尊崇していました。[271]

〔彼は〕正法を聞くことに飽きることなく、法を探求することに努め、法を聞き学びながら、至る所で人々を法を行わせました。[272]

〔彼は〕法の施主として、確たる心をもつ者として、善き徳性と益を与える軌範師、法を求める者、法を審らかに観る者として、一切法の意義を知る者、善慧者として、[273]

般若（智慧）の知により偉大な善巧方便の方法を知る、巧みな者として、正法と忍辱に精通した者、一切知（仏）の教法を示す者として、[274]

過去の菩薩たちの〔行った世俗〕法の追隨を行いながら、欣然として世俗法たる愛欲の享受を味わいつつ、楽しみました。[275]

〔彼は〕清浄な〔感官の対象の〕境界を享受し、大きな快樂を楽しみながら、前世の行為を想起して、ひたすら専念して〔心集中を〕なしました。[276]

このように、後宮にいるにもかかわらず感官を染汚することなく、彼は前世の行いを想起しながら、諸仏の法を現証しました。[277]

大きな憐愍の心をもって、あらゆる有情の解脱のため、マール（魔）の罟を断ち切って、涅槃の歓喜に心を定めました。[278]

輪廻的生存の過患を知る彼は、輪廻の道を願わず、出家の行法を望み、梵行の誓戒を欲し、[279] 人里離れた隠棲処の住まいに静かに住むことを望み、身内の者と他者と自身の益利を願い、教法と戒律に習熟し、[280] ヨーガと禅定の安樂を愛し、あらゆる有情を憐れみ、〔所有物に〕頓着しない偉大な施与者であり、煩惱なく感官を清らかに保ち、[281] 清浄な戒によって心清らかであり、マール（魔）の所行を嫌悪し、三宝への奉仕に励み、菩提行に専念し、[282] 忍辱と正法の芳香と、拡がる名声の輝きをもち、悪意のない心を堅持し、あらゆる有情を益することを願求し、[283] 正法を実践することに熱心で、堅固な精進の力を発揮し、不退転であり、大勇猛で、一切の者たちの益という目的を達成する者として、[284] 正念を有し、禅定を愛樂し、よく心を集中し、あらゆる明と大通智をそなえ、あらゆる成就と隆盛を得た者として、[285] 三昧の徳性を完全に達成し、幸・美・樂をそなえもつ者、善巧者として、般若（智慧）という宝石の光明によって無明の闇を滅ぼした、光り輝く者〔である菩薩〕は、[286] 幻や夢や陽炎に似たもの、木霊の如きものであると輪廻的存在（有）を考えつつ、一切智の正法の達成に専心して、光り輝きました。[287]

その後彼は、最後の輪廻的生存を行った〔過去の〕菩薩たちに随順する行為をなしつつ、四つの法〔門〕を達成しました。[288]

〔それは〕四摂事〔という第一の法門〕と、三宝の顕示〔という第二の法門〕と、あらゆる有情を見捨てない〔という第三の法門〕と、菩提分法〔という第四の法門〕です。[289]

勝れた知性をもつ彼は後宮の中にいながら、これらの〔四法門〕を現証して、後宮の者たち〔の心〕を成熟せしめるため、〔後宮で次の様な〕神変を示しました。[290]

〔菩薩の神通により出現した声〕

その時かの菩薩の威神力により、あらゆる場所で、合奏するトゥーリヤ楽器の音色から、次のような声が現れ出ました。― [291]

「もし輪廻において幸・美・徳性とよき安樂を欲し、また正覚の成就、教法を、そして最後に涅槃のよき安樂を欲する者たちであれば、[292] 信仰心により常に乞い求める者たちに熱心に布施を与えねばなりません。また勝れた戒・禁戒を堅持して、常に淨行をなさねばなりません。[293]

忍辱の誓戒を常に保ち、それを一心に行ずるべきです。また精進の行いの誓戒を保ち、生類の益のために行動しなさい。[294]

煩惱を克服し、心を集中して禅定のよき安樂を味わいなさい。また般若（智慧）の宝石の輝きというランプによって、煩惱の闇を滅ぼしなさい。[295]

四梵住を堅持し、常に浄行をなしなさい。また方便をもって、あらゆる生類に善き禁戒を行わせなさい。[296]⁽⁶²⁾

正覚への誓願を持し、三宝に帰依し、菩提行の誓戒を持し、生類の益のために行動しなさい。[297]

それらの福德の力によって、マーラ（魔）たち、また異教徒を含む邪な者たちに打ち勝ち、偉大な智者・大士（菩薩）・善逝の子となりなさい。[298]

その後〔その菩薩となった者たちは〕正覚のための成就〔法〕たる、菩提分法すべてを堅持して、〔生類に〕恵みを与える行いを仏教僧院でなすことでしょう。[299]

其処で彼らは仏の威神力によって知を獲得し、至る所に法の甘露を雨降らせながら、生類のため浄行をなすことでしょう。[300]

その後、輪廻的生存が空（くう）であり、無常であり、刹那ばかりの栄光をもつことを観察して後、輪廻的生存の変転を脱し、煩惱なく、感官を制御した者として、[301]

〔四諦の〕『滅』の知に達して、涅槃の境地を願い、菩提樹の根元に坐して、禅定に心を集中し、[302]

〔遂に〕正覚の知を達成して、生類を法から成る者に変え、如来身を得て、仏の住まいに至ることでしょう。」 — [303]

以上のトゥーリヤ楽器の音〔からの声〕を聞くと、すべてのかの〔後宮の〕若い女たちも菩提心を成就し得て、〔仏道を〕学ぶ者となりました。[304]

その後、世俗法を行うそれらの若い女たちすべては、正覚への誓願を堅持して、悟りのための禁戒を行いました。[305]

このように後宮にいるかの菩薩によって、それらすべての女たちも、正覚〔への道〕に導かれました。[306]

同様に、その場にやって来ていた他の神々も皆、覚知（気づき）を得て、菩提心を持つに至りました。[307]

〔フリー神による勧請〕

その時フリーという名の、サントゥシタに属する神（兜率天）が、真夜中に三万二千の神々を伴って、心悅んで〔王宮に〕やって来ました。[308]

夜中に、後宮の高楼で寝椅子に横たわるかの菩薩を見つめて、空中に居る〔かの神〕は、次の様に語りました。 — [309]

「大士よ、甚だ名声高き者よ、あなたは〔かつて兜率天からの〕下生を示現されました。また誕生をも示現され、あらゆる学問〔の通達〕をも示されました。[310]

62. 269 偈 bcd で A 写本の派生写本である A2, B, D には共通するテキストの欠損がある。

後宮において、世間随順という世俗法をお示しになり、多くの人間や神々を菩提への道へ導かれました。[311]

「あなたは」これらすべての若い女たちに覚知（気づき）を得させ、悟りへの道に導きながら、世俗法において「法を」行わせました。[312]

今や、あなたの出離すべき時が近づきました。それ故、「前世の」誓いを想起して、三界の生類の益利のために出離なさってください。[313]

すべての仏たちは生類の益のために、自分の誓いを放棄することがありません。彼ら「過去の仏たち」に随順する行為を保ちつつ、「あなたの」誓いを完全に達成なさってください。[314]

「仏がそなえる」五つの眼（肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼）を獲得して、法の道を示しながら、暗愚に盲いたあらゆる生類を覚知せしめ、「法を」行わせて下さい。[315]

マーラ（魔）の罠から自ら脱して、生類も逃れさせてやって下さい。輪廻的生存の海を自ら越え、「あらゆる」生類も越えさせてやって下さい。[316]

愛欲の奴隷になっている家住の者たちは、あなたが出離したのを見て、彼らも出離を、正法の成就を、切望することでしょう。[317]

「転輪王としての」偉大な王権と四大陸「の領土」と七宝、美女たちを捨てて、「あなたが」出離したのを眺めて、神々たちも出離することでしょう。[318]

またあなたは禅定の安楽をそなえ、心集中して住していますが、生類にも同じ様に覚知を得させて、禅定に導いて下さい。[319]

久しく「覚知なき」眠りに陥っている、神々やアスラや人を含むこれらの有情を覚醒させてやり、努めて、悟りのための禁戒を行わせて下さい。[320]

年老いた時に、輪廻的生存における出離への思いを抱くのは美しいことではありません。青春は刹那の幸せであり、稲光に似て、無常のものです。[321]

それ故、青春の盛りにおいて王権やすべての所有を捨てて出離し、三界の生類の幸せの誓いを完遂して下さい。[322]

塩水の賞味によって人が満足を得ることが出来ないように、感覚的対象の賞味によって満足を得ることは出来ません。「あなたは」悟りの知の達成をもつ般若（智慧）の甘露により「初めて」満足を得ることでしょう。[323]

あなたが若く美しい間、あらゆる有情への益利を望むとしても、老いた感官の肉体になった時、どうして三界の有情に益利をなしうるのでしょうか。[324]

煩悩の苦熱に焼かれて依り処をもたないこれらの生類を見て、どうか彼らの煩悩の苦熱を、教法という不死の甘露水によって鎮めてあげて下さい。[325]

愛欲の煩悩の火によって焼かれている、マーラの罠に拘束された者たちの罠を断ち切って「彼らをのがれさせ」、解脱の道を速やかにお示し下さい。[326]

〔長患いの〕病のごとき煩惱の火に焼かれて、久しく苦しんでいる生類すべてを、正法という薬によって健康にしてやり、浄行を行わせて下さい。[327]

盲闇のあらゆる者たちの悪しき見解を清く明澄なものにしてやり、正法という灯明を燃え輝かせて、仏たちの住まいを見せてあげて下さい。[328]

梵天やシャクラ（帝釈天）などのすべての神々は〔あなたを〕待ち受けています。ガンダルヴァたち、キンナリーたち、ヤクシャ（夜叉）たち、またクンバーンダたち、羅刹たちも。[329] シツダたち、ヴィドゥヤーダラたち、サーディヤたち、またガルダたち、龍王たちも、またダイティヤたち、すべての護世王たちも、次の様に願って、立って〔待つて〕います。[330]

『私たちは見ることでしょう — 菩提に達した彼を、生類に益利を施しつつある彼を、遍く生類の世界に法輪を転じつつある彼を。[331] その彼の〔説く〕法の不死の甘露を飲んで、絶えず浄行を私たちは行うでしょう』と、〔彼らは〕そう思念し、願いながら、あなたに敬意を払うために、立って〔待つて〕いるのです。[332]

また龍王たちは、〔仏位の〕栄光に光り輝くあなたを見て、日傘としての〔蛇族の〕宝石を有する頸部のずきんをもって〔あなたの頭上を〕覆いながら、〔あなたに〕仕えることでしょう。[333]

すべての護世王たちも、菩提道場に坐られた〔あなたが〕マーラたちの群に勝利するのを見ようと欲しています。善慧者よ。[334]

十方世界にいるすべての仏・善逝・ジナたちも、悟りを得たあなたに『お見事（善哉）』という称赞の言葉を与えることでしょう。[335]

彼ら四護世王（四天王）たちは、梵行をなす仏〔となったあなた〕に、〔四つの〕鉢を与えようと欲しながら、心清らかに、立って〔待つて〕います。[336]

梵天やシャクラ（帝釈天）などの神々は、〔世の〕幸せの原因となるあなたに、法輪を転じるように勧請したいと願っているのです。[337]

あなたこそ、三界に住するあらゆる有情にとって、世尊・師・正法の教示者・ジナ（勝者）であり、[338] 一切智・阿羅漢・大通慧者・法王・善導者、生類の師父・生類の庇護主、牟尼の王に必ずなられるでしょう。[339]

このように真実をしっかり認識なさって、あなたの誓願どおりに三界の〔生き物の〕益の成就を十全に実現なさって下さい。[340]

ディーパンカラ（燃燈仏）を初めとする仏たちの授記（成仏の予言）を想起しながら、出離して悟りを達成し、正法を明らかになさって下さい。[341]

三種の菩提（声聞菩提・縁覚菩提・無上正等菩提）をご教示になり、あらゆる有情を覚知せしめ、三乗に安立させて、仏の住まいに導いて下さい。」 — [342]

その〔フリー神の言葉〕を聞いて、大士は前世の行為を想起しながら瞑想し、出離することへの意欲を堅持して、心集中して過ごしました。[343]

〔菩薩と〕同様に、かの若い女たちも皆、正法を熱望し、菩提行の誓戒を堅持して、欣然と心集中して行じました。[344]

また同様に、〔宮中の〕他の人々も、それに随順する行為をなし、菩提行への意欲を堅持して、心集中して行じました。[345]

またシュッドーダナ王も、大臣や家来や親族と共に、菩提行への意欲を堅持して、随喜して行じました。[346]

これらの福德の威力によって、至る処で、とても幸に恵まれて災害の無い、大きな喜びの出来事が絶えず起こりました。[347]

— 以上、私の師が教示されたそれを〔そのまま〕今私はお話しました。その通りにあなたもお聞きになり、浄信を得て、随喜（信受して歓ぶこと）されますように。[348]

（締め括りの一詩節：） 菩薩たちのこの世俗〔諦〕の法の行いを聴聞して、覺知を得て、随喜をなしつつ、行うならば、その者たちは皆、罪の穢れが無くなり、清浄輪を有して、美と徳性の依処である、菩薩・大士たちとなるであろう。[349]

— 以上のように聖者が説いたのを聞いて、気高い心をもつかのアショーカは、「そのようにいたします」と随喜しながら、衆会の人々と共に、喜んで信受しました。[350]

以上、後宮の歡樂の中にある菩薩への出離の勸発〔という〕品、第15、終わる。

参考文献

Asplund, Leif (2013): "The Textual History of Kavikumārāvadāna: the Relations Between the Main Texts, Editions and Translations." Doctoral dissertation. Stockholm: Stockholm University.

Bajracharya, Manik & Michaels, Axel (2015, 2016): *History of Kings of Nepal: A Buddhist Chronicle*, i. Edition (2016); ii. Introduction and Translation (2016); iii. Maps and Historical Illustrations (edited by Niels Gutschow, 2015), Himal Books, Kathmandu.

Bendall, Cecil (1883): *Catalogue of the Buddhist Sanskrit manuscripts in the University Library, Cambridge, with introductory notices and illus. of the palaeography and chronology of Nepal and Bengal*, Cambridge University Library.

Demoto, Mitsuyo (2006): "Fragments of the Avadānaśataka", In: Jens Braarvig (Ed.), *Buddhist Manuscripts, Volume III of Manuscripts in the Schøyen Collection*, pp. 207–244. Oslo: Hermes Publishing.

Fiordalis, David V. (2019): "The Avadānaśataka and the Kalpadrumāvadānamālā: What should we be doing now?", *Critical Review for Buddhist Studies*, 25, pp. 47-77.

Formigatti, Camillo (2016): "Walking the Deckle Edge: Scribe or Author? Jayamuni and the Creation of the Nepalese Avadānamālā Literature", *Buddhist Studies Review*, 2016, pp. 101-140.

Gellner, David N. (1992): *Monk, Householder, and Tantric Priest. Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual*, Cambridge Studies in Social and Cultural Anthropology, Cambridge University Press.

Hahn, Michael (1983): *Das Mṛgajātaka (Haribhaṭṭajātakamālā XI). Studie, Texte, Glossar*, Indica et Tibetica 3, Bonn.

Hahn, M. (2007): *Haribhaṭṭa in Nepal. Ten Legends from His Jātakamālā and the Anonymous Śākyasiṃhajātaka*, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.

Hahn, M. (2011): "Ein neuer Handschriftenfund aus Nepal und seine Konsequenzen für die Gopadatta-Hypothese", *Studien zur Indologie und Iranistik* 27 (2010), pp. 71-140.

Hahn, M. & Bühnemann, G. (1985): *Der grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā). Eine mittelalterliche buddhistische Legendensammlung aus Nepal*. Asiatische Forschungen, Bd. 88, Wiesbaden.

Handurukande, Ratna (1984): *Five Buddhist Legends in the Campū Style. From a collection named Avadānasārasamuccaya*, Edited and translated (with an introduction), Indica et Tibetica 4, Bonn.

Locke, John K. (1985): *Buddhist Monasteries of Nepal. A Surveys of the Bāhās and Bāhīs of the Kathmandu Valley*, Kathmandu: Sahayogi Press.

Marciniak, Katarzyna (2017a): "Padumāvātī-jātaka attested in the Manuscript Sa of the Mahāvastu", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhism*, XX, pp. 68-102.

Marciniak, K. (2017b): "The oldest paper manuscript of the Mahāvastu", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhism*, XX, pp. 103-121.

Marciniak, K. (2017c): "A manuscript of Gopadatta's Jātakamālā copied by Jayamuni Vajrācārya", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhism*, XX, pp. 123-128.

Okada, Mamiko & Okada, Yukihiro (2008): "Zum Verhältnis des *Lalitavistara* zur *Ratnakūṭa-Sammulung* — Die Sage von Śyāma und Ruci (*Lalitavistara* XIII.[32])", *Bauddhasāhityastabakāvalī*, Indica et Tibetica 36, Marburg, pp. 269-283.

Okano, Kiyoshi (2021): "A Study of Buddhist Avadānamālās in Nepal: About Śāṅkarasvāmin's Devātīśayastotra, and Some Avadānamālās Related to Jayamuni", 『印度學佛教學研究』 (*Journal of Indian and Buddhist Studies*) 第69卷3号、2021年3月、(165)-(173)頁。

Slusser, Mary Shepherd (1982): *Nepal Mandala: A Cultural Study of the Kathmandu Valley*, 2 Vols. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

Takahata, Kanga (1954): *Ratnamālāvadāna, a garland of precious gems or a collection of edifying tales, told in a metrical form, belonging to the Mahāyāna*, Oriental Library Series D, Vol.3, Tokyo.

Tournier, Vincent (2012): "The Mahāvastu and the Vinayaṭika of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādin", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhism*, Vol. XV, 2012, pp. 87-104.

Tournier, V. (2017): *La formation du Mahāvastu et la mise en place des conceptions relatives à la carrière du bodhisattva*, EFEO Monographies No. 195, Paris.

Wright, Daniel (1877): *History of Nepāl. Translated from the Parbatīyā by Shew Shunker Singh and Pandit Gunānand; with an Introductory Sketch of the Country and People of Nepāl by the Editor, Daniel Wright*. Cambridge: Cambridge University Press.

岡田真美子 (1991): 「Rāṣṭrapālaparipṛcchā 中の釋尊前世50話」 『前田専学博士還暦記念論文集 〈我〉の思想』、春秋社、581-596頁。

岡田真美子 (1997): 「Vasubandhu (世親) と仏教説話」 『神戸女子大学教育学諸学研究論文集』 11号、31-42頁。

岡野 潔 (2013): 「ネパールの仏伝アヴァダーナ・マーラー Tathāgatajanmāvadānamālā」 『印度學佛教學研究』 62巻1号 (2013年12月)、323-330頁。

岡野 潔 (2019): 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (8) — Jayamuni, TJAM 第14章 (I), SMRAM 第21章, Kalpalatā 第84章 —」 『南アジア古典学』 14号、1-123頁。

岡野 潔 (2020): 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (9) — Devāśīṣayastotra, SMRAM 第20章, TJAM 第14章 (II) —」 『南アジア古典学』 15号、2020年7月、89-227頁。

田中 公明／吉崎 一美 (1998): 『ネパール仏教』、春秋社。

外薗幸一 (1994): 『ラリタヴィスタラの研究』、上巻、大東出版社。

※本研究は JSPS 科研費 21H00470 の助成を受けたものである。

<キーワード> Jayamuni, Nepal, Mahābaudha, Jātaka, Avadāna, Tathāgatajanmāvadānamālā, Avadānamālā, Jātakamālā, Ratnāvadānamālā, Lalitavistara, Mahājātakamālā, Avadānanaśataka, Karuṇāpūṇḍarīka, Bodhisattvajātakāvadānamālā, Jātakamālāvadānasūtra.

(九州大学大学院教授, Ph.D.)

正誤表 (ERRATA)

	誤 (Error)	正 (Correct)
p. 51	Bodhisattvajātakāvadānasūtra	Bodhisattvajātakāvadānamālā
p. 65	⑥の写本「BJAS 1」	⑥の写本「BJAM 1」

SOUTH ASIAN
CLASSICAL STUDIES

No. 16

2021

CONTENTS

Sanskrit Fragments of Saṃghasena's <i>Bodhisattvāvadānamālā</i>DEMOTO Mitsuyo	1
A Study of the <i>Avadānakalpalatā</i> and the <i>Avadānamālās</i> (10) — Works of Jayamuni and Chapter 15 of TJAM — OKANO Kiyoshi	51
KN 322,4 <i>mā ... śociṣṭa</i>KASAMATSU Sunao	139
A Japanese Translation of the <i>Nyāyikalikā</i> (I)KATAOKA Kei & SUDO Ryūshin	151
A Japanese Translation of the <i>Nyāyikalikā</i> (II)SUDO Ryūshin & KATAOKA Kei	195
An Annotated Japanese Translation of Jñānaśrīmitra's <i>Yoginirṇaya</i> (I)MORIYAMA Shinya	247
The Transformation from the Theology of Knowledge to that of Emotion in the Late Advaita School: Emotional Reinterpretation of Prior Literature in the <i>Bhaktirasāyana</i>MANABE Tomohiro	283
Maṇḍana Miśra's Application of <i>Mīmāṃsāsūtra</i> 1.2.40 and its Relation to the Injunction to Study the VedaSAITO Akane	299
Dharmottara on <i>pakṣābhāsa</i> : Focusing on <i>svavacanānirākṛta</i> MIAO Shoule	343
An Inquiry into Nepalese Traditional Performing Arts: Jagatprakāśa Malla's Newari songs (4) The Birth of SkandhaKITADA Makoto	355
Dharmakīrti and Dharmottara on the Erroneousness of Conceptual Cognitions and Its CausesNAKASUKA Miyuki	365

KYUSHU UNIVERSITY
DEPARTMENT OF INDOLOGY

ISSN 1881-2074

南アジア古典学

2021

第16号

目次

Sanskrit Fragments of Saṃghasena's <i>Bodhisattvāvadānamālā</i>Mitsuyo DEMOTO	1
Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (10) —Jayamuni の仕事と TJAM 第 15 章—岡野 潔	51
KN 322,4 <i>mā ... śociṣṭa</i>笠松 直	139
<i>Nyāyikalikā</i> 和訳 (前半)片岡 啓・須藤 龍真	151
<i>Nyāyikalikā</i> 和訳 (後半)須藤 龍真・片岡 啓	195
ジュニャーナシュリーミトラ著『ヨーガ行者の確定』和訳研究 (上)護山 真也	247
後期アドヴァイタ学派における知識の神学から感情の神学への転換 — <i>Bhaktirasāyana</i> における先行文献の感情論的再解釈— 眞鍋 智裕	283
Maṇḍana Miśra による <i>Mīmāṃsāsūtra</i> 1.2.40 を巡る議論、 及び自派ヴェーダ学習命令との関連について斉藤 茜	299
ダルモータラの「疑似主張」理解 —「自身の言葉によって退けられるもの」を中心に— 繆 寿楽	343
ネパールの演劇写本 ジャガトプラカーシャ・マッラ王のネワール語歌集 (4) 韋駄天誕生北田 信	355
分別知の錯誤性とその原因をめぐって —ダルマキールティとダルモータラ—中須賀 美幸	365

九州大学大学院人文科学府・文学部
インド哲学史研究室

南
ア
ジ
ア
古
典
学

第
十
六
号

二
〇
二
一